

# ENCOUNTER

## 出会いの広場 No.21 1996. 5

### 特集・エンカウンター・グループの未来

---

#### ●特集・エンカウンター・グループの未来

企画の趣旨	福井 康之
二十一世紀へ向けての我々の課題	畠瀬 稔
私のエンカウンター・グループ体験から	増田 實
実践、研究、ファシリテーター養成をめぐる	野島 一彦
医療領域へのEGの拡大を目指して	広瀬 寛子
地域支援システムとしてのエンカウンター・グループ	高松 里
指定討論者として語ったこと、語りたかったこと	木村 易

#### ●特集2・グループ・アプローチの危険、副作用とそれへの対応

企画の趣旨	野島 一彦
Tグループの場合	山口 真人
ベーシック・エンカウンター・グループの場合	小柳 晴生
構成的グループ・エンカウンターの場合	村久保雅孝
ゲシュタルト・グループの場合	日高 正宏
集団精神療法の場合	中山 巖

#### ●ウォーム・スプリングスの浅い春に

	木村 易
--	------

#### ●連載

エンカウンター・グループでは何が起ころのか⑥	福井 康之
------------------------	-------

#### ●お知らせ・情報・あれこれ

---

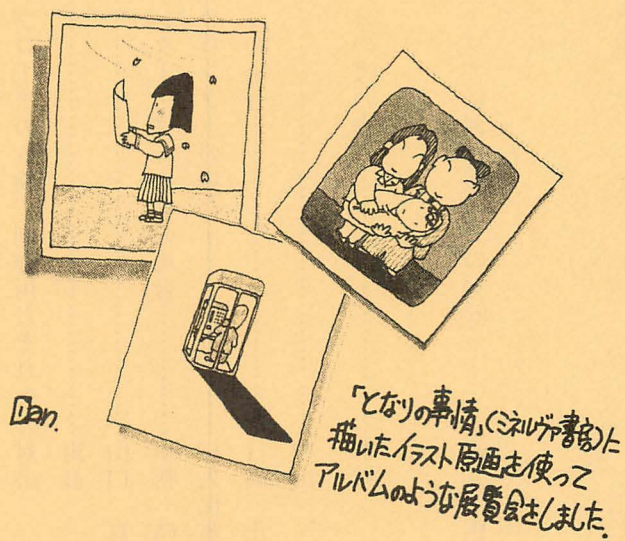


---

目次

ENCOUNTER  
出会いの広場

No. 21





本号の主な内容

■特集・エンカウンター・グループの未来

企画の趣旨……………福井 康之 1

二十一世紀へ向けての我々の課題……………畠瀬 稔 2

私のエンカウンター・グループ体験から……………増田 實 5

実践、研究、ファシリテーター養成をめぐる……………野島 一彦 8

医療領域へのEGの拡大を目指して……………広瀬 寛子 11

地域支援システムとしてのエンカウンター・グループ……………高松 里 14

指定討論者として語ったこと、語りたかったこと……………木村 易 15

■特集2・グループ・アプローチの危険、副作用とそれへの対応

企画の趣旨……………野島 一彦 21

Tグループの場合……………山口 真人 22

ベシック・エンカウンター・グループの場合……………小柳 晴生 27

構成的グループ・エンカウンターの場合……………村久保雅孝 30

ゲシュタルト・グループの場合……………日高 正宏 34

集団精神療法の場合……………中山 巖 40

■ウォーム・スプリングスの浅い春に……………木村 易 50

■連載

エンカウンター・グループでは何が起こるのか⑥……………福井 康之 66

■お知らせ・情報・あれこれ



《日本人間性心理学会第十三回大会自主企画シンポジウム報告》

## 特集

### エンカウンター・グループの未来

## ● 企画の趣旨

福井康之

これは、一九九四年九月十六日～十八日に東京農業大学を会場として開催された日本人間性心理学会第十三回大会において行われた自主企画シンポジウム「エンカウンター・グループの未来」の記録である。

このシンポジウムは、人間性心理学会の自主企画として、毎年エンカウンター・グループ（EG）を巡る諸問題を討議するために、継続して企画されているものの一つである。今回は標記のテーマにより、下記の企画で開催され、多数の参加者が討議に参集した。企画者：福井康之（愛媛大学）・増田實（東京家政大学）・野島一彦（福岡大学） 司会者：福井康之 話題提供者：畠瀬稔（武庫川女子大学）・増田實・野島一彦・広瀬寛子（東京都精神医学総合研究所） 指定討論者：高松里（九州大学留学生教育センター）・木村易（愛知大学） 注、各氏の所属は、シンポジウム当時。

このシンポジウムは、EGに関心を寄せて、会場に参集した参加者全員で、EGへ関与してきた各自の体験を、話題提供者の発言を手掛かりにして共に語り合い、個々のEGに対するイメージを明瞭化させながら、自己検討を加え、わが国におけるEGの今後のあり方を、皆で模索しようとして企画された。

わが国におけるEGの発展は、戦後、カウンセリングが導入された経緯からみて、ロジャーズ自身の実践と理論の展開に応じて、クライアント・センタード・セラピーから、パーソン・センタード・アプローチ（PCA）へと発展移行してきたことと、「人間関係研究会」のメンバーを中心にして推進されたということと、密接な関連があることは、だれしも疑いようのない事実であるといえよう。

その間、精神分析を源流とする、様々なサイコセラピーや、その他の技法が、精力的にわが国に紹介され、それぞれの立場から研修

るファシリテーターの進出が期待される各分野へのEGの導入発展が阻害されているのも事実であろう。

昨年のファシリテーター養成・研修のシンポジウムが台風のため流会となり、関係者のみで非公式にホテルのロビーで意見交換がされ、要点の記録は残されてはいるが、今回はそのことも踏まえて養成問題の将来展望についての討議も期待されている。

以下、シンポジストと指定討論者の発表の要旨を掲載することにとどめ、討議の詳細は、記録の不備のため割愛せざるを得ないことをお詫びして、今後、また、改めてこの種の企画が実施されることを期待する。

ふくい やすゆき  
●愛媛大学

## ●二十一世紀へ向けての我々の課題

畠 瀬 稔

私自身はエンカウンター・グループをやっている、まだまだこれから本腰を入れてやらないといけないということと、様々な領域でファシリテーターが育つ必要を感じており、また、今、実際にファシリテーター養成研修のプログラムを行っているが、意外とニーズが多く、たくさんの希望者が集まってくれている。社会の各方面でグループに対するニーズがあるのだと思える。

長らく私自身が教員養成にかかわっているが、まず、第一に、教

員養成、医療従事者、組織のリーダー、その他の人たちに対するエンカウンター・グループ経験ということに、これから本腰を入れてからねばならないと思っている。長らく学校の先生の養成をやっていると感じることは、先生たちでグループ経験を持っているか、持っていないかによって、学級経営能力に大きくかわるという感じを抱いている。

次に、第二として、さらに、これからセルフ・ヘルプ・グループ

に励む臨床家が輩出するようになった。また、レビンを元祖とするグループ・ダイナミックスの流れを汲む感受性訓練（ST）、構造化されたグループ体験学習（構造的エンカウンター・グループ）やその他の集団精神療法も試みられ、わが国の臨床心理の世界は、今や花盛りの観がある。そのため、ロジャーズのペーシック・エンカウンター・グループを主唱するファシリテーターの勢力も相対的に孤塁を守る観なきにしもあらずともいえる。しかも、個人療法かグループ・リーダーか、いずれかに力点を置いて研鑽する他の諸流派に比して、両刀遣いの力量を要求されるEGのファシリテーターが育つことも困難になってきていることも事実である。そのことがファシリテーターとしての水準を維持することの困難性や、力量あ

が社会の各方面で要請されてくるだろうし、その際にエンカウンター・グループというのは非常に重要な方法になるだろうと考えている。

第三番目に、日本では、我々がまだ全く出来ていない領域で、ロジャーズが先進的に行った社会的、文化的、国際的葛藤の領域であり、これについては後で、次のことも関連して詳しく、今回、経験してきたことにも含めて述べる予定である。

第四番目として、日本の今までのシンポジウムには取り上げられてはいたが、あまり焦点が当てられなかった留学生の問題である。外国から留学してきている人たちが日本で孤立感を抱いていて、日本人の方は国際感覚が育っていないというこの領域に、エンカウンター・グループが大きく貢献するのではなからうか。

第五番目には、これは余り詳しく知らないが、最近いろいろなニュースなんかで「マルチ・メディア」というようなことをいわれているが、ますます、機械だけが双方向的になっても、我々人間の方がどこまで追いついていけるか、あるいは人間がそういうものを利用していくために、我々自身の能力を錬磨するために、エンカウンター・グループがますます要請されてくるのではなからうかと思える。

以上のようなことを、エンカウンター・グループの今後の発展の姿として考えていたが、実は、この九月三日から、オーストリアのグムンデンで開かれた、第三回インターナショナル・コンGRES・オン・クライエントセンタード・アンド・エクスペリエンシャル・サイコセラピーに出席してきたので、その時の様子を紹介しながらエンカウンター・グループの未来を考える話題提供の端緒としていたいと思う。

全体の会場には二五〇人位が集まったのだが、その会合は九月五日から九日までの五日間あり、実はその前に三日間、九月三日の土

曜日の午後三時から始まって、九月五日の正午頃まで、日本流に言うところの二泊三日という感じのエンカウンター・グループのワークショップがあった。それに参加したので、その時のことを中心にして、これとの関連で語りたいと思う。

参加した日本人は、一人だけだと思っていたところ、もう一人、千葉大学の諸富先生も参加者で、全員で四十人、十三カ国の人が集まっていた。アメリカ、オーストリア、イギリス、オランダ、チエコスロバキア、ドイツ、ギリシャ、ポーランド、南アフリカなど、それに日本人二人で、確か十三カ国だったと思う。四十名を一室に集め、丁度この教室の半分くらいの部屋で、四角いテーブルを囲んで、椅子が一杯で、こちらの方からは向こうがはっきり見えない。

私自身は、てっきりこれからスモール・グループに三つ位に分かれると思っていたのに、一向に分かれる気配がない。全部、日本というコミュニティ・セッションで、二泊三日やった。これは非常に特異な経験だった。ファシリテーターと称する人は、イギリス人とアメリカ人の女性が一人ずつだったと、後になって解った。

スモール・グループに分かれた方がいいと、強力に主張したが、それに我々は言語的にハンディキャップがあり、みんなの顔が同じように見えるし、日本流のネーム・プレートは用意しないし、どこかの国から来ているか解らないので困った。しかも、ファーストネームで言うので、トニーだとか、アンだとか、なんとかだとか言うけれど忘れてしまう。それで、我々いい方法知っていて、教えるからネームカード作ってくれと要求した。そうすると、今日は準備がないから、明日までに持つてくると言う。それなら、スモール・グループを作ることと、ネームカードの下へどこの国から来たか、イングランドとかチエコと書いてくれと要求した。非常に積極的にかましく主張したので、諸富さんもえらい日本人がおるものだと驚いた様子で、他の連中も驚いた様だった。



結局、スモール・グループの提案は実現しなかったし、言葉のハンディキャップも、オーストリアで開かれていたから、オーストリア人が多く、ドイツ語で、チェコなどの東欧圏はわりとドイツ語でドイツ語を話す人たちと英語を話す人たちと、それからドイツ語を話す人たちで、英語をかなり話せる者と英語を全然話せない者、そして非常になまりのある者といったように、かなりのバラエティのある話し合いになっていた。

学会の公用語がイングリッシュが第一で、第二にジャーマンということで、ドイツ語は一応学会の公認で、それを拒否する訳にもいかず、大変困ったことは、ドイツ語を英語に通訳する人が、ドイツなまりのきつい人だったので、よく解らない。そこでダブル・ハンディキャップだから、ゆっくり話してくれということと、出来るだけみんな英語で話そうじゃないかと、つまり、スローでクリアーなアーティキュレーションをやって欲しいと盛んに言った。私自身の強力な主張が効果があったのか、ワークショップ後のカンファレンスはとてつもないスピードでやられて、とても行けなかったけれども、エンカウンター・グループはなんとなく解るという程度には行けたので、やはり私自身が強力に主張したからだなということだと思っている。

ここで、さらに問題になったことは方言のことで、しばしば出てきたのが、ダイアレックスで話したい、みんなダイアレックスで話そうという。特にオーストリアでは、自分の感情をありのままに出すには方言でいうのが一番いいという。そうなるるとまたよく解らなくなるという問題になる。

次に問題になったことは男と女の問題、そして年令、年老しているか若いかな。例えばある若い人が、アメリカから来た女性に「あなたは非常に年寄りに思えるけれど、あなたの気持ちは非常に若くフレッシュに感じる」なんて言うと、猛烈に批判され、そのアメリカ

人が怒りだして「私は確かにオールドだけれども、自分は自分をオールドだと思ったことはない」と言う。なんという差別的な発言をするのかというわけで、また、ニューヨークから来たある男性が「自分はオーストリア語でジュリー、ユダヤ人ということだが、ユダヤ人と言ってはならないと言われた」と言うのと、途端に「なんてことを言うんだ」と、凄いいことになって、人種のるつぼの中に入っているという感じになった。

そして、そこらでは、例えば、ホロコーストとか、いろいろのユダヤ人の虐殺に対する話も出てきて、それに対する責任というのは、我々無関係ではない、その世界と隔てられていても、戦争や虐殺に對して、あくまでも現代の我々にも責任を持っているんだという主張があつて、凄いいつかりあいがあつた。

何故、私が小グループを主張したのかというと、十人前後のグループだったら、お互いに顔も区別でき、名前も判るが、これでは何も解らなくなると言ったのだが、彼らは全体で集まるということの意味を、彼らなりに持っているということ、ヨーロッパのエンカウンター・グループというのは、小グループ中心ではなく、こういうコミュニティ中心なのだということを非常に感じた。

全体を通じて、もう一つ特筆すべきことは、二泊三日のセッションの進行の仕方が、日本とずいぶん違うということである。日本だと、スケジュールに何時から何時まで休憩と予定されて取つてある。それが無くつて、みんな各自が勝手にコーヒープレイクを取ったり、トイレに行く。それだから、ある時サーツと急に四十人のうち十五人くらいが一斉に立ち上がると、それが自然に休憩ということになる。

その辺がすごく印象的で、一人ひとりの自由、個性を重んじていて、全体の枠組を作らないという発想なのだというところで、エンカウンター・グループの極致を見た思いがした。

また、不思議なことに、そのようなぶつかりあいがあった、三日目の正午頃別れるまでに、いろいろな葛藤や猛烈な対決などがあった後別れて、決して十分理解しあったというのではないのに、その妻いぶつかりあいというのが、今度は全体の二五〇人くらいの学会の中で、四十人がいろいろな出会ったおりに、なんか懐かしい思いがする。それでみんなちよつとした食事のおりに「来い、来い」と言ったり、なんとなく集まったりして、これは独特のエンカウンターなのだと、エンカウンターの持つ意味というものを感じたわけである。

これに参加して、我国でもこの様な国際的な理解、日本人の国際化あるいは日本に来てゐる外国人たちとのこういうつながりというものとは絶対に必要なのではないかと感じた。韓国からも、中国からも、あるいはいろいろな諸外国からも外国人が日本へ来ている。

そしてもう一つは、その折に我々は英語とドイツ語というダブル・ハンディキャップに置かれたが、英語なら英語だけで、英語を話

す人はゆつくりと明瞭な発音で話すということと、日本人もできるだけ英語を勉強して、下手な英語でも一生懸命話して、英語なら英語という一つの言語でやらないと、通訳がついてたとしてもやっつけられないと思う。そういうことを言ったら、ある女性が私に向かって「ア・ン・グ・リー」なんて言っていたらやれない、「アイム・アングリー！」と猛烈に言わないと言葉と感情が合わないという。英語を話す人たちにはそうであっても、こちらには何も解らないのだから、土俵を一緒にするということが非常に大切なことなんだということが言いたかったのである。

このようなエンカウンター・グループを日本でもやれないものだろうか、ぜひやってみたいということを、一緒に参加した諸富さんとも話し合った。実施する機関は、出来るところから始めると、意外にこういうことをやり始めると、参加層は広いのではなからうかと思われる。

はたせ  
みのも  
武庫川女子大学

## ●私のエンカウンター・グループ体験から

増田 實

「エンカウンター・グループの未来」ということに関して、私自身のこれまでの体験を視点の根拠にして、その若干を考察してみたい。

エンカウンター・グループには個人（人間）の成長や人間関係に関するさまざまな可能性が含まれている——これが二十年以上このグループに携わってきた私の実感である。エンカウンター・グルー

プは、一九六〇年代後半、アメリカでは「潜在的能力啓発運動」と呼ばれるほどの大きなうねりとして展開するようになったが、今後このような状況が再現されることはないであろう。また、ブーム的な運動を望むことも、今後の志向ではないであろう。むしろ、人間の「生」にかかわる地道な進展としてすすめられることが望まれる。私のエンカウンター・グループへの最初の参加（体験）は、一九七二年の夏であった。それは、摩耶山で開催された本研究会初期のそれであったが、この体験にひかれてその次の年「ラ・ホイア・プログラム」(La Jolla Program)に参加した。

私のエンカウンター・グループの原点は、この二つに求められる。前者では、その体験後、私自身のなかにほのぼのとした暖かさが湧き出てきているのを感じ、それまで（存在しながら）眠っていた感覚や感情を開かせてくれた。後者では、これまで触れることのなかった人との出会いを通して（潜在的な）自己自身と出会う端緒を得、つくられていた狭い固い内的枠組みから開放されて自由な自己自身になっていく思いであった。

この体験は、私個人のそれであったが、このようなことは、私ひとりのみが経験する体験ではないように思われる。これは、時空を超えた個人の体験としての意味があるのではなからうか、と考える。エンカウンター・グループ体験後の生の声には、肯定的・否定的さまざまな反応があるが、それへの参加がその人自身の感覚や感情、感性などを開いていく（「感」の回復・開放）体験になっていると共に、その人自身を変えていく（内的枠組みの柔軟化・拡大化）体験になっている、と言える。そして、これは、他者の内的世界の成長や治療への援助に欠かすことのできない土台となる。

教育、福祉、医療、その他、人間にかかわる援助活動に携わる際、それぞれの専門的知識や技術を得ておくことは当然求められるが、これ以外に、それに携わる者の内面のあり方 (What to be in one's in-

ner world) がその活動を援助的にしていくか否かという分岐をもたらす、と思われる。とくに、カウンセリング的援助をおこなう場合には、これはよりいっそう顕著である、と言える。それは、その相手の成長を求めようとするならば、それに対応する者の相応の自己成長がなければなし得ない、からである。「子どもは、親の背を見て育つ」という諺が想起される。

エンカウンター・グループの過程では、相互的なかわりが次第に深められていくなかで、しばしば沈黙を経験する。この沈黙は、多くの場合、何となく気まずい思いとして受けとられ、それが起こらないよう、また、避けようとするが、このグループ体験のなかから、同じ沈黙であってもそのときどきで異なった意味をもっていることを感得するようになる。

「グループの初めで、うまく心が伝わらない気まずさの沈黙から、次の展開への間としての沈黙、その場で話された言葉を熟考するため、また、その言葉の背景やその場の人々の心を考える時間としての沈黙、そして、最後のセッションでは、それまでのことに思いを馳せ、残り少ない貴重な時間を噛みしめる沈黙」(村山他編「エンカウンター・グループから学ぶ」九州大学出版会、一九九一、四十五頁)などを体験を通して感じとるようになる。

このようなことから、沈黙のときほどその人自身の内面が動いている（考えたり、感じたりしている）ときはない、と言えるのである。そして、沈黙のこの動きは、外からは見え難い。見えないこの動きを見るには、感じとる以外に道はない、と言えよう。そこにいる人の「見えない世界」を見るには、それをあえて言語化するよう求めないで、こちら側の「感」の世界によってそのまま受けとめることが肝要であるが、それには、感覚・感性などの豊かさが不可欠である。

カウンセリング面接の過程では、しばしば沈黙が生じる。そして、



この沈黙は、カウンセリングの成否にかかわることさえある。ここでは「沈黙を聴く」ことの重要性が浮き彫りにされてくる。エンカウンター・グループには、感覚・感性など（「感」の世界）を通して「沈黙を聴く」トレーニングの要素が多く含まれている、と言える。

「感」の世界に関しては、「能」の諸業との結びつきがあるように印象づけられた。

日本人間性心理学会第十三回大会では、ワークショップのひとつとして「能と謡と囃子」のプログラムが組まれており、たまたまそれに参加するようになった。（からだごとことばのレッスン」に参加する筈であったが、遅れて会場に着いたため入室しにくく、うろうろしていた折、隣室の「能と謡と囃子」が休憩時間であったので、休憩後誘われるまま合流してしまった。）これも、ひとつの縁かと思う。

ここでは、謡と鼓（つづみ）に触れたが、まず、謡について記してみたい。「能」の謡は、よく知られているように、独特の発声から生まれてくる。この発声には、相当の修業が求められる、と思われたが、われわれ参加者も、その初歩的な実習をおこなった。大きく深く息を吸い、それをゆっくり長く吐く。そして、息を吐きながら「アー」や「エー」の声を出す。

この呼吸のしかたは、気功などでもなされており、これまで同じような経験をしたことがあったが、これに声を加えることは初めてであった。この発声には、全身に心地よさを感じられた。これを参加者全員が一斉に、しかも、それぞれ思いのままにおこなうのであるが、それを続けていくと、その発声がバラバラであるにもかかわらず、全体的にはひとつの統合性を感じられてくる。これは、不思議なことであった。つながり（連帯）は、個が真の個に近づくとき成し得る、ということを実感させられた。

鼓には、乾いた響きのあることもよく知られている。ここでは、鼓を組み立てることから始められた。鼓の皮をひもで引き締め、その響きが「能」の世界に至るまで丹念に組み立てていくようであった。その過程では、引き締めては音を出し、その響き具合を何度も確かめながら、その作業は続けられた。

できあがった鼓を手にして、その所作から打ち出された響きは、胸を射る矢のように感じられた。祭の太鼓はどんと腹に響くが、「能」の鼓は、胸に響いてくる。鋭く一直線に、という感じである。しかし、その響きには心地よさがある。そして、それがくり返し続けられると、からだの奥底にまで届くようであった。

「能」を観賞し、その世界に入っていると涙があふれてくる、と言う。「能」観賞の経験者が何人か参加しており、その人たちもそのように言っていた。このワークショップの時間にそれはなかったが、涙があふれてくるのが確かにあるだろう、と想像できる。

このワークショップのサブタイトルには、「思いに届く声」と記されているが、「能」の世界では、この「思い」にひとつの基点があるように思われた。「思い」は、一般的に使われる意味での思いとは異なり、感情よりも深い部分に存在する心的（内奥的）な動きである、と言う。嬉しいときには嬉しいの感情が、また、悲しいときには悲しさの感情が動くのがわれわれ人間の内面の自然な動きであるが、「能」を深く観賞していると、これらの感情が殆んど動かない状態でも、何かわからないまま涙があふれてくる、と言う。この涙をあふれさせる内奥的な動きが「思い」なのである。

「能」の謡や鼓の響きは、この「思い」に届くのであり、それが涙を誘う、とみられる。謡は、「神や死者や鬼や、そして恋しい人の心を打つ（訴う）コトバ」（本大会プログラム、十二頁）である、と言われるが、それは、鼓の響きと共に、われわれの内面の深い部分に届いていく、と考えられる。

これは、換言すれば、「感」の世界の深い部分への響きである、とみられよう。このような深い部分へ響く（届く）ような所作がなされるのは、容易なことではない。厳しい修業に似た訓練がなければ、それは成し得ない。

鼓を打つ手を見せて頂いた。その手は、指や手の甲にタコができており、それが固っていた。そこには、修業の跡が示されていた。この手があつてこそ、「能」の鼓の響きが生まれるのである。人間の内奥に届くには、なみなみならぬ修業的な訓練が求められる、と思われた。

すでに述べてきたように、カウンセリング面接時に生じる沈黙には、言葉にしているとき以上にその人の内面では意味深い感情の動きがある、と言える。水面は静かであっても、深い部分には流れが

ある。このような見えない部分には「感」の世界で触れる以外に道はないように思われる。それには、「感」の世界を培っていく必要がある。

それぞれのもつ「感」の世界は、「能」の謡や鼓と同様、修業的なトレーニングによらなければ培えない、と思える。この場のひとつがエンカウンター・グループである。そして、修業的なトレーニングには継続することが欠かせないから、このようなグループ体験を重ねていく必要がある。経験的に言えば、少なくとも年二回はエンカウンター・グループに参加することが欲しい、と思う。

自己の「感」の世界を培うことが自ずと自分自身の人間観や価値観を修正し、自己の「観」を豊かにしていくと思われる。

ますだ みのる  
東京家政大学

## ● 実践、研究、ファシリテーター養成をめぐって

野 島 一 彦

「エンカウンター・グループの未来」ということに関して、大きく三つの観点―第一に実践のこと、第二に研究のこと、第三にファシリテーター養成のこと―から、今後の課題について述べたい。

### 一、実践領域の拡大

エンカウンター・グループは今世紀最大の社会的発明と言われるが、私は二十数年エンカウンター・グループをやつてきて、本当にそんな感じがする。しかし、われわれはまだこれを十分に活用できているとは言えないように思う。エンカウンター・グループは、今後もっと活用されてもよい力を持っていると考える。

家庭にかかわる問題にも貢献できる。また学校におけるいじめの

問題、最近指摘される子ども達の主体的欠如の問題にも貢献できる。今の子ども達は、人と自分との共感的関係を持ちにくいと言われるが、エンカウンター・グループにはそれを体得するチャンスが秘められている。だから学校のなかでもっと展開していけるのではないかと思う。それと地域の問題にも貢献できる。最近地域における人と人の距離が遠くなったり、関係の断絶ということが言われているが、そのへんをつないでいくというのにも有効だと思う。

さらに高齢者の問題にも貢献できる。私自身はそのような実践はやっていないが、谷口正己先生（神戸女学院短期大学）が以前やられたというのを聞いたことがある。公民館で老人を集めて週に一回のエンカウンター・グループをされたが、これはかなり有望だと言われていた。年をとっていつて、人間として精神的にいきいきと生きていくためには、単に物理的な環境が整うといったことだけではなく、やはり心理的に人と交わるといふ体験を続けていかなければならないと思う。そういう意味では高齢者の方のエンカウンター・グループ、あるいは高齢者と中学生・高校生をミックスしたエンカウンター・グループとか、いろいろなバリエーションでやっていくのではないかと思う。

それからターミナル・ケアの問題にも貢献できる。ガンとかエイズとか治ることが難しいという状況のなかで、それを支えるのに個人カウンセリングも有効であるが、個人アプローチだけでは結構しんどいところもあるので、エンカウンター・グループなりグループという形でお互いに支え合うことができる。また、ターミナル・ケアに携わっているスタッフが消耗してくることが多いので、スタッフのリフレッシュの場としてエンカウンター・グループを使っていると思う。

それに、人間関係の専門家、つまり人間関係が大切になる職業人の研修などにも貢献できる。それから日本ではあまりやられていな

いが、晩年のロジャースが取り組んだような社会的緊張・対立などの問題にも貢献できる。エンカウンター・グループはそんな問題に対して力があると思う。

以上のように、実践領域の拡大はいろいろ可能であり、われわれはもっとそのようなことに尽力しなければならないのではなからうか。

## 二、研究の推進

わが国のエンカウンター・グループの研究は、一九七〇年以來これまで地道に続けられてきており、二十四年間に膨大な研究成果の発表も行われている。どのような研究が行われてきたかについては、私が毎年文献リストをつくっているので、恐らくわが国のエンカウンター・グループ研究の九十五%以上は、それでフォローできているのではないかと思う。今後は特に次のようなことが必要であろう。

①これまでの二十四年間にわたる膨大な研究のレビューをとおして、何が分かり何が分かっていないのかを明確にすることである。これまではプロセス研究に関しては、私は一九八二年に、それまでの研究を丹念に一つ一つひろって簡単なサマリーをつけてレビューしている。効果研究についても一九八〇年前後にやられたのがある。このようにいくつかレビューが行われているが、一九九〇年代に入ってからはそのような膨大な形の研究レビューはない。だから二十四年分を振り返って、何が分かり何が分かっていないのかをはっきりさせる必要がある。

②エンカウンター・グループ理論の確立である。「エンカウンター・グループには理論がない」という批判がある。ないことはないのであるが、他の例えば精神分析理論みたいにかっこよく体系化された理論は確かにない。そのような形の理論がいい



かどうかは別として、もう少し理論として通用するような概念化をしていく必要があると思う。二十数年間もエンカウンター・グループの実践が（消滅せずに）続いているということは、エンカウンター・グループが有効であることを示していると考えられるが、「よかった、よかった、有効だ」と言うだけでは弱い。そのへんをやはり理論化していく必要があると思う。

③エンカウンター・グループ理論と関連したリサーチを行うことである。エンカウンター・グループには理論が全然ないわけではなく、プロセスに関する理論、ファシリテーションに関する理論、アウトカムに関する理論など、「芽」みたいな研究はいくつかあるので、そういう仮説なり概念化されたものをリサーチという形で再検証していくことが必要である。これまでの研究はややもすると単発の研究で、あちこちで研究は行われるが、理論との関係づけがあまりなされなかったのが問題である。

### 三、ファシリテーター養成

実践の領域が拡大しグループを行うチャンスが増えてきた時代となったが、その際、グループを担当するファシリテーターが重要なキー（鍵）である。極端に言えばエンカウンター・グループがどう展開するかは参加者次第だという感じがするが、その要因に加えてファシリテーターのあり方も重要な要因である。だから、できるだけお互いに意味のあるようなグループを展開できるようなファシリテーターを養成していくことが必要である。

ただこれはなかなか難しいことである。例えばパソコンやワークができるようにしていくのには、時間をかけて量的に練習を積み重ねていくとうまくいく。しかし、エンカウンター・グループのファシリテーターの場合は、そういう形で獲得できる部分もあるか

もしれないが、そういう技法的な部分と、ファシリテーターの持味・人間性のようなものがからみあっている。だから技法の部分はなんとか訓練して形をつけていくことができるが、もう一方の部分は研修をしてなんとかするというのができない。そのへんのジレンマはあるが、何もしないとも何も起こらないので、私はなんらかの形でファシリテーター養成のいろいろなコースを提供してやっていくほうがよいと思う。

昨年の本学会での自主企画でもこの問題については取り上げられたが、どのような人達をどのようにエンカウンター・グループのファシリテーターとして養成していくかについて、さらに議論を深めるとともに、その養成システムをきちんと作っていく必要があるう。

## ●医療領域へのEGの拡大を目指して

広瀬寛子

『エンカウンター・グループ（EG）の未来』というテーマは、私にとってはあまりにも大き過ぎる。そこで、自分が行ってきたこと、現在、実践していること、そして、将来的に行っていきたいと思っていることという身近なところで、このテーマを考えてみたい。

### 看護学教育の中のEGの発展を目指して

私が初めてEGに参加したのは看護学生の時だった。そのEGというのは大学の授業で行われたもので、それまでまったく知らなかった新鮮な世界との出会いであった。同時に、ようやく、求めてきたもの、そしてこれからも求め続けていきたいものに出会えたという確かな感触でもあった。看護学生である私が、そして、ずっと自分の病気を引きずってきた患者である私が癒される体験であった。それが今から十二年前のことである。このグループとの出会いが、自己を見つめることの大切さや、看護婦が患者をわかろうとすることの大切さ、人が成長するとはどういうことかなど、多くのことを教えてくれた。その後、Rogers や Gendlin の理論、現象学的アプローチに惹かれていき、グループ体験と共に、私の看護観、看護教育観、生き方に深い影響を与えてくれたと思う。

最初はメンバーとしてEGに参加し始め、今では、看護学生や看護職を対象としたEGのファシリテーターを務めるようになっていく。現在行っているものは、年に一回、三泊四日の合宿形式である。看護婦である私は、看護学教育の中で、EGを確立したいと思ってきたのである。

### 私の中でのEG領域の変化

現在の研究所に移ってからは、精神障害者のデイケアや、アルコール依存症の患者のミーティング、訪問看護婦の自主研究会、患者へのカウンセリングなどにかかわっており、そういうさまざまな集団の中で、EGのファシリテーターとしての経験を生かさないか、EGを活用できないかと、模索している段階である。

この中の訪問看護婦の自主研究会は、私が講演に行ったのをきっかけに、もともとカウンセリングの勉強がしたい、お互い話し合う場もないし、訪問に行っている中でのいろいろな感情を出す場もないので、EGをやってほしいという要望が訪問看護婦の中から出て、始めたものである。月一回二時間のグループで、参加者は十人弱である。最初の頃はなかなかEGにならなくて、模索期間が随分と続

いたが、現在、ようやく軌道にのってきた感がある。

#### 〈医療職へのサポート・グループの試み〉

私は、将来的には、緩和ケア（これまでの治療第一主義の医療に対する反省の元に、癌などの疾患の進行した患者及びその家族のニーズに答えるためのケアであり、疼痛その他の身体的症状のコントロールを行い、医学的、社会心理的、*spiritual* な側面を含む全人的ニーズを考慮したケアで、チーム医療を強調していることが特徴である）の中で、ナース・カウンセラー（看護の中でも、ある特定の領域の分野を専門とし、病棟看護婦とは独立して存在し、一般看護婦への教育的機能も持つ看護婦を、*clinical nurse specialist*（CNS）と呼ぶ。ナース・カウンセラーとは、カウンセリングの知識と技術及び精神看護学を専門的に学んだCNSであり、カウンセリング技法を用いて患者に心理的ケアを行う人）としての仕事をしていきたいと思っている。そういう私にとっては、特に緩和ケアを担うスタッフのためのEGや、患者のためのEGに関心がある。

その手始めとして、現在、ある緩和ケアチーム（医師、看護婦、カウンセラー、音楽療法士、ボランティア、事務員からなるチーム）で、月一回二時間のサポート・グループを始めた。これは、チーム・リーダーからスタッフのサポートをしてほしいという依頼のもとに始まったものである。場所は、普段の仕事場から離れた所でやりたいということで、夜景の美しい会議室で行っている。最初の頃は、照明を暗くしてみたりとか、そういうところ、メンバーは結構楽しんでるようで、そういう場所にいるということだけでも、結構リラックスできるようだ。モチベーションの高いグループで、つまり、とりあえず、このチームの中で感じていることや解決したいことがいつもあるようなので、グループの初期から、時間になるとずっとグループに集中できていた。

一方、前述した訪問看護婦の集まりの場合は、初期は、グループ

が始まる時間になっても、仕事の連絡事項や井戸端会議的なものが出て、なかなか現実から離れられない感じだった。それで、始めにリラクゼーションやフォーカシングの *clearing a space* を取り入れてみたこともある。そうすると、切り替えがしやすいようになった。

#### 医療職にサポート・グループが必要なわけ

どちらも始めたばかりなので、まだ評価できる段階ではない。ただ、緩和ケアチームのグループでは、「ファシリテーターがいることで、安心して話ができる」とか、「普段は患者のこと、仕事のこととが頭から離れないので、この時間はとてもリラックスできる」、「話したら楽になった」とかいう感想が聞かれている。

月一回で何ができるか、いつも一緒に働いている人達が同じグループでやる意味、難しさなど、課題はいろいろある。ただ、こういうグループの意義として、以下のようなことが考えられるように思う。一緒に仕事をしていると、相手に対して「あれっ？」と感じることがある。そういう違和感は、ほんどの場合、そのままになる。すると、そういう「あれっ？」という違和感がどんどん溜まっていき、相手への否定的感情にまで発展していく。いつの間にか、相手はこういう人なのだと自分の中でレッテルを貼ってしまう。そして、いつか、爆発して、相手も自分自身も傷ついてしまう。相手に対する「あれっ？」というわからなさを率直に伝える場にこのグループがなれないものだろうか。そうすることで、相手の気持ちを確かめることができ、相手の行動だけを見てもよく理解できなかったことが、相手の気持ちを知らなくて、相手の行動の意味を理解できるようになる。相手と自分との違いがはっきりして、違いをお互いに尊重できるようになる。そして、人間関係がスムーズにいくことで、本来の自分たちが大切にしたいと思っている仕事の中で、自分



たちの内なる可能性をより発揮できるようにするのはないだろうか。また、仕事をしていると、自信がなくなったり、自分と患者との関係で悩んだりすることが非常に多く、それを人に話し、聴いてもらえること、わかってもらえることで、案になったり、安心できたり、新しいものが見えてくる可能性や気づきがある。

こういうグループを進めていく上で、スタッフや病院側に、このグループの意義を理解してもらうことがひとつ課題だと思う。今、私がやっているところの医師たちのような考え方はまだまだ少数派であり、普通は、こういうグループの価値を認めないことが多い。形にならないものに時間をつぶすなんてもったいない、そんな暇があれば溜まっている仕事をこなしたい、あるいは、大切だとは思いますが、とてもそんな暇や余裕はないと思う人が大半であろう。

## 患者のためのEGの可能性

さらに、患者のためのサポート・グループもいずれ行いたいと思っている。アメリカの文献などを読むと、エイズ患者のためのサポート・グループを初め、患者のサポート・グループが盛んである。ただ、日本で行う時に問題なのは、日本では、痛患者が自分の病気にことについて真実が知らされていない場合が多いという現状で、それがグループを広めていく時のひとつのネックだろうと思う。また、真実が知らされていないということは、医師の権威の象徴でもあり、日本での医師―患者関係から、病院外で医師以外の専門家が介入するグループを組織することには困難を伴うかもしれない。患者へのカウンセリングというと、時に、医療者から、特に看護婦からの抵抗にあう場合がある。それは、自分たちの領域に侵入されるとか脅かされるとかいう恐れなのかもしれない。そして、もうひとつは、看護婦自身がそういうケアを受けたことがないからでは

ないだろうか。看護婦たちは他者に与えるばかりで、自分たちを酷く使うばかりで、自分たちが癒されるという体験を知らない。カウンセリングというものがどれだけ自分を楽にしてくれるかを知らない。そういう意味でも、まず、スタッフへのグループを広めることが大切なのだろうかと考えたりしている。

## おわりに

私は以前は看護学教育の中にEGを確立したいと思ってきた。しかし、今、ナース・カウンセラーとして臨床に出ている中で、患者にかかわるすべてのスタッフと協力し合えなければ患者によりよいケアを提供することはできないのだということをあらためて実感した。今は、看護婦という狭い枠組みにこだわらずに、それを越えて、医療の中でEGを確立していきたいと思いは始めている。

私が現在、行なっているグループは、前述したように、集中ではなく月一回のグループである。generalなEGと異なり、メンバーからは、具体的な問題解決の場として活用されることも多く、こんなあり方でいいのだろうかと思ふこともあった。しかし、今、メンバーにとって一番、気がかりなことが出せる場であることが何より大切なのだ。従来のEGにこだわらず、その対象に添ったグループができればいい。仕事から離れた時間をもつことそのものが癒される体験であり、そのような時間をもてるだけで十分なのかもしれない。そんなふうに私自身が気負わないでやっていきたいと思っている。そうすると、最近、いろいろなプロセスが起こってきて興味深い。こんなふうに、これからも柔軟にグループをやっていきいたいと思っているが、領域や方法が変化しても、EGの精神はいつも私の中にあり、私を支え続けてくれると確信している。

## ● 地域支援システムとしてのエンカウンター・グループ

高松 里

シンポジウム当日、私は指定討論者として、「応用の可能性はわかるが、そもそもエンカウンター・グループの本質とは何なのだろうか」という趣旨の発言をしている。この答は簡単に得られるものではない。しかし、その後このことはずっと気になっている。

結論を先に書くと、私はエンカウンター・グループは地域に普通に住む人々のための心理的支援システムの一つだと思っている。道具としてもいいし、理念としてもいい。どちらの性格も併せて持っていると考えている。

なぜそのように考えるようになったのか、今考えていることを書いてみたい。

### 「病気ではない、しかし健康でもない人々」の存在

精神的な病気になれば精神科の病院がある。病院には医者もいれば心理カウンセラーもいる。子供が学校に行かないならば児童相談所もある。逆に全く健康であれば、そもそもカウンセラーなどは必要がない。問題はその中間の人々の存在である。

一応の生活は出来ているが対人関係がうまくいかない。依存しすぎてべったりになる。あるいは逆に人に甘えることができない。親

の言うことに逆らえない。人に「NO」と言えない。今の仕事はいやだけど、それを変える勇氣はない。難しい場面からはすぐに逃げてしまう。自分は何をしたいのかわからない、等々。

このような人々はたくさんいる。このような問題を精神科に持ち込んでもカウンセリングを受けることはまず期待できない。神経症や分裂病の治療で忙しいのである。「どこかでカウンセリングを受けられないだろうか」という相談を最近よく受ける。しかし適当な場所がない。信頼できるカウンセラーが開業していない。

しかし、エンカウンター・グループではこのような問題を取り扱うことは比較的容易である。一見普通に暮らしている。しかし生きることを難しくさせている様々な問題を抱えた人々が、そこでは心を開いて話し合える。そしてグループの中で、実際に「生きて」みて、自分の問題がどこにあるのか気付く人も多い。

### 「素人ではない、しかしそれで生活をするというプロでもない」ファシリテーターである我々

メンバーのこのような特徴に対応して（逆かもしれないが）、我々ファシリテーターもまた中途半端な立場にいる。グループ・ファシリテーターとしての技術は非常に高度なものだと私は思っ

いる。長い経験が必要だし、知識も必要である。その意味では極めて「専門的」な仕事である。しかし、同時にエンカウンター・グループを生活の糧にしているファシリテーターはほとんどいないのではない。いや、むしろ企画が気に入れば「タダでも行く」という人も多いと思われる。つまりファシリテーター自身が何らかの「素人性」というか「社会運動家としての自分」とか「遊び感覚」を持っているのだと思う。

エンカウンター・グループとは、「病気でもないが健康でもない人々」を対象として、「専門的ではあるが素人的でもある」ファシリテーターが共に作りあげていく、一種の支援システムではないのかと思うのである。

メンバーが「病気」ではないのだから、それを「治してやる」という発想はでてこない。問題を抱えながらも、どうやって折り合いを付けて生きていくかを考えるには、グループは非常に良い場だと思う。

## エンカウンター・グループの未来

エンカウンター・グループの基本は、「セルフ・ヘルプ」ではないかと思う。メンバーだけではなく、ファシリテーターである我々も、ファシリテーターをすることにより救われているのだろう。そういう相補性をベースにしなから、あるグループはより専門的に治療色や訓練色を強めていくだろう。また別のグループはより日常的で素人色を強めていくだろう。

しかしいずれにしても、現在のケアシステムではほとんど対象とされず、しかも決して軽いとは思えない個人的問題に対して、エンカウンター・グループは何らかの貢献をしてきたし、今後重要な理念や道具を提供することができると思う。

たかまつ さとし  
九州大学

## ● 指定討論者として語ったこと、語りたかったこと

木村 易

### 一、EGは知的表現力や理解力を向上させうるか

メンバーおよびファシリテーターとしてのEG経験者の一人とし

てのぼく自身の実感のみから、EGの効果について言うなら、例えばこうしたシンポジウムのような場での議論における理解や表現の能力、あるいは様々な現実的な課題に直面しての解決能力や判断力、事務処理における能率性等は、向上してはいないことである。

これは余りに個人的な体験からの発言だが、畠瀬が発表論文集の話題提供の概要で、マルチメディアや双方向性TVの普及に伴い、日本人の感情・知性の表現力、共感的理解力等のEGによる促進が急務となることを予想しているのを読んで思ったことは、現在までのEGの効果研究からみても、感情の表現力、共感的理解力の促進はよいとして、知性の表現力の促進までを言えるかということだった。EGの今後を考える場合、EGが様々な知的および現実的な問題をも扱える場となりうることは重要な課題であろう。

【従来EGでは、話題提供者の一人増田の言う「それまで（存在しながら）眠っていた感覚や感情を聞かせてくれ」ること、「情緒性の再確認」（畠瀬直子、一九七七）「失われた情緒の回復」（小野修、一九七一）などが強調されてきた。例えば、鈴木正子（一九九〇）は、「EGではこうしたことから感情に注目する。どう感じたか、今何を感じているか、自分をどう感じているか、EGではしばしば知的な話題は「事例である」、「ストーリーである」などと、時に批判的な扱いを受ける。」しかしこれはEGの猥小化された戯画と言うべきではないだろうか。ロジャース（一九七〇）自身は感情と認知（思考）の両面を伴う全人間が参加するグループを希求すると述べているが、この方向でのEGの追求はその後十分になされてこなかったように思われるのである。様々な領域に導入される時、EGは、現在のような個人や対人的な感情の表現や探求のみでなく、様々な重要な政治的、社会的、哲学的、宗教的、等の思想的なあるいは実質的な問題の探求や討論、意志決定の促進をも含む必要性がある。従来実施されてきたEGはこれらの期待に応えきれない。現在までEGはそのもつ可能性（ロジャースの言う「今世紀最大の社会的発明」）のいく一部を実現しているに過ぎないと言えよう。】

## 二、EGによる対人関係的技能の育成について

畠瀬と野島とが挙げているEGによる対人関係的技能の育成ということでは、例えば他に自己主張訓練、SST（社会的技能訓練）、リーダーシップ訓練、親業訓練、教師業訓練のような技能訓練法が開発され実用化されており、また構成的EGやSTとかTグループなども技能の訓練を目標の一つとしてかけて実施されている。これらと並んでEGも対人関係の技能の育成法として加わるべきなのだろうか。

【考えなければならぬ幾つかの問題がある。かつて小野（一九七一）はEG体験によるファシリテーターとしての技能の向上が極めて逆説的（背反的）である（「グループをうまく扱えるようになりたいという」「参加意図からの脱出によって、自分のなかの変化が始まり」「参加意図が自分の中で満たされている」）ことを自分の体験から述べていた。グループをうまく扱う技能は結果として得られたのであって、グループではまずその意図を捨てる必要があったのである。EGが技能の習得を目標にすることは自己矛盾というべきではないだろうか。また、小柳（一九九一）が論じたEGの非効率性、目的・方法の曖昧さ、目的追求に対比的な目的探求的な性質等の特徴は、EGを技能の効率的な養成手段から極めて遠いものにするように思われる。さらに言えば、EGを特定の技能養成の手段とすることは、むしろEGの本質に反するとさえ言えるのではなからうか。ロジャース（一九七〇）は「人は決して個人を人間にへ訓練することはできない」と述べているが、技能訓練という考えとEGとは両立しうるのだろうか。sensory awarenessの創始者Charlotte Selver (Brooks、一九七四)はその実践をpracticeとよび、exerciseとよばなかった。EGも同様に反復練習や訓練をして上手になるこ

とを目指すものではない。単に狭い職業的な技能訓練としてではなく、むしろ豊かな人間性の涵養の機会としてこそ、教師や医療や看護の分野で働く人やセラピスト等の養成におけるEGの意義が強調される必要があるのではなからうか。ばく自身の経験から言うなら、研修EGにおいてメンバーに生じる意味のある体験は、助産婦や養護教諭としての狭義の技能の向上や養成とは殆ど直接関係がない。

そう言う意味で研修におけるEGでその目標に職業的技能的向上を掲げることをばくはしていない。またしばしば研修に導入される構成的EGについて言うなら、主催者やリーダーが計画し、かかせる研修目標は、個々のメンバーにとっては必ずしも切実で適切な目標とはならない場合が多いのではとばくは想像する。

技能訓練と限定しないにせよ、EGは、すでに様々な研修の場で実施されているが、そこには未だ議論の必要な問題が残されている。小沼（一九九二）は、看護学生の研修について書いている中で、学生の主体性が奪われた状況で実施されることなどを挙げて「研修という形で学校の教育の場にエンカウンター・グループを導入するということへの疑問」から構成的プログラムに移ったことを述べている。福井（一九九四）もEGが、何か特定の目標を達成するための人間改造を目論むものではないという理念と研修EGの間の矛盾をファシリテーターがどう解決できるかを論じているが、この研修へのEGの導入をめぐる問題も未だ十分に議論が尽くされているとは思わないのである。」

### 三、新しい領域へのEGの導入により生じるEGの変化

島瀬は多くの分野でEGが必要とされることを予想し（この点では野島も同様）、これらに対応するファシリテーターの養成、それを支援するEGプログラムのあり方を考えねばならないと言う。そ

こではどのような問題が予想されるだろうか。新しい分野へのEGの応用は、従来のEGなりEGファシリテーターの変化（適応）を迫るように思われる。

【例えば島瀬は話題提供の中で月一回の訪問看護婦のグループや緩和ケア・チームでの実践の中でグループが、具体的な問題解決の場や井戸端会議的な要素を含み「従来のEG」とは異なるものに變化することを報告している。ファシリテーターは「その対象に添う」ために異なった動き、在り方をとらざるをえない。小野（一九八八）の親のグループでの促進者の役割について挙げているものの内には、「子どもの言動の理解の仕方の提供」、「親子関係促進の援助」、「親の『気づき・学び』の位置づけ」や「情報提供」のように、従来のEGのファシリテーターのそれとは異なるものが含まれているようである。つとに臨床教育EGを考察して山口（一九八二）は、ファシリテーターに要請される機能が一般公募のEGとかなり異なるとして、教師、スーパーバイジング、ファシリテーターの三つに分けて論じている。島瀬や小野が述べているのもこれに類した機能であるように見える。ファシリテーターは従来のEGファシリテーターのままでは留まらず、ではこのような変化にもかかわらずそのグループはEGなのであろうか。EGとは何かがここでは問題となろう。さらに野島（一九九四）は、看護学校の研修の経験から最近の看護学生（青年）は、強い依存性やあいまいさへの低い耐性故にEGよりも構成的EGとの相性がよくなっているとして、非構成的EG実施に慎重な工夫が必要であると論じているし、また別に看護学生の研修において（野島一九九一）構成的EGの実施の率を高めていることを報告している。また矢幡（一九九〇）も、両者を比較して構成的EGを「ベシシクEG未経験者のための導入的段階として」位置づけている。このEGの適用に当たった限界についてどう考えるべきだろうか。EGとそれに代わる構成的EGの違い、



野島の言うEGと参加者の相性の問題もさらに明確にされる必要がある。さらに、このEGと構成的EGにおいてファシリテーターの在り方にはかなりの違いが存在し、この違いは当然ファシリテーターの養成において問題になるであろう。さらに本質的な問題として、同一の人間が状況に応じてEGと構成的EGの両者を使い分けて実施することは可能であろうかという問題がある。そこには、「非指示的」な面接、EG、フォーカシングの指示を実施する者のアイデンティティー如何を問う諸富（一九九四）の指摘が同様に当てはまると思われる。これにどう答えるのだろうか。」

#### 四、ファシリテーター養成の問題

島瀬も野島もファシリテーターへの需要の増大を予測し養成の問題に言及している。今後、三で述べたように多様な分野へのEGの導入に伴い、EG自体の多様化が進むとするなら、それに対応できるためにはファシリテーターも変わらざるをえないだろうし、養成法も変わらざるを得ない。

【すぐ考えられるのは、例えばEGにも構成的EGにも臨機応変に対応できる能力とか、ファシリテーターにはより大きな柔軟性や幅広さが要求されることになろうし、その土台となるグループ理論も必要となるだろう。また、野島は、ファシリテーターの技能は訓練できるが人間性の涵養は難しいと言う。ばく自身は、むしろ人間性の涵養の面でこそEG体験は有意義なのではと考えるが、その点ファシリテーター養成におけるEG体験の意義や位置づけについて野島の見解をより詳しく聞きたく思う。小野（一九七二）が述べている、EGにおける技能養成の逆説性の問題は、この技能と人間性の涵養との関係に関連している。】

#### 五、EGの利用と効果研究について

新しい分野へのEGの導入を図ろうとすれば、その有効性が当然問題となる。例えば医療の領域をとれば、新しい医療技術、医薬等の場合と同様の方法とデータによる有効性の実証が要求される。野島の言うように理論の確立とリサーチが必要である。

【その結果、仮にEGの様々な分野での有効性が証明されたとするなら、EGは人間とその集団の心理的操作や変容のための手段、あるいは技法（技術）として利用される危険性が増大する。この予想される未来世界は、むしろ Skinner の Warden Two に似た極めて非EG的世界であると言わざるを得ない。だががだれのためにこの技法（技術）を所有し管理し使用するのであろうか。】

#### 六、EG研究とその方法論

今回の大会の方法論セミナーで論じられた真実と事実のパラダイムの区別の問題とも関連すると思われるが、増田の述べたEGの原点的な体験は、恐らくEG参加者や研究者が共有し、本人にとり極めて真実な意義ある体験であるにもかかわらず、この体験自体、そこで生じることを明らかにすることの至難さをEG研究者は常に痛感させられる。野島がEGのリサーチについて語るとき、このEG研究の方法論上の問題にも触れてはしなかった。

【科学の世界で何等かのパラダイムのチェンジが必要とされているという予感が語られている。「科学の知」の普遍主義、論理主義、客観主義の枠内に収まり切れず、中村（一九九二）の「臨床の知」であらざるを得ない知的営みが現在生まれている。EGは果して「科学の知」というプロクルステスの寝台に縛りつけられ続ける必

要があるのだろうか。彼が「臨床の知」のコスモロジー、シンボリズム、パフォーマンス性、受肉性について述べているのを読むとき、それはそのままEGについて語っているように思われるところが多い。EG自体がすでに「科学の知」とは別の一つの新しい知であると言えはしまいか。」

## 七、EGの未来

角川必携国語辞典によれば、『未来』は『未だ来たらず』という意味で、『将来』よりさきの、不確かで予測しにくいことに使う。『将来』は『将来に來たらんとす』という意味で、予測可能な近い未来をいい、『将来は医者になるつもりだ』のように使う。とある。個人の一生のスパンにはいるのが『将来』であり、それを超えた範囲が『未来』と考えたらよいだろうか。この意味では話題提供者たちが語っているのはEGの『未来』というよりもEGの『将来』であるように思われる。

【小柳（前出）の「EGの推進者たちが漠然と感じていた『単なる治療ではなく』もっと大きな意味をもつという感覚」をばくも共有している。その感覚から未来を照射するなら、ばくにとつて人間の未来はEGの未来と緊密に結び付いて感じられている。もし人類の大多数であるごく一般普通の人々が、自分たちの生活とその子どもたちの将来、様々な問題の解決や目標の選択を、血統や知識や能力などを基に選ばれた人間、賢者や聖者、精神的知的指導者、権力者、企業家、官僚、学者や技術者等の個人の集団に委ねるのではなく、その責任を自ら担い、自ら考え、決定する自らの能力を信頼してそれを行使する、徹底した民主化の道を選ぶなら、EGあるいはPCA（人間とその集団の可能性への信頼と個人 person の尊重）こそ、その先駆的な基本的モデルとなるものだろう。人間にとつて希

望のもてる未来はそこにしかないし、人間は恐らくその方向を選択するだろう。そのためには、今後のEGにおいては人間の感情と認知や思考の両側面の統合が最重要な課題となるだろう。】

（自主シンボの席での指定討論者としての発言要旨を当時のメモと記憶から記し、さらに企画者の許しを得て、時間の制約から言い足りなかったことを書き加えた。追加部分は【】で区別してある。）

## 参考文献

- Brooks, C. V. W. *Sensory Awareness*、一九七四（伊東博訳 センサリー・アウェアネス 誠信書房 一九六六）
- 畠瀬直子・ジェネラル・エンカウンター・グループ 村山正治『エンカウンター・グループ』第二章 福村出版 一九七七
- 福井康之・エンカウンター・グループでは何が起ころのか③ ENCOUNTER 出会いの広場 No 18、六四—七一、一九七七
- 諸富祥彦・「クライエントセンタード」としてのアイデンティティ ENCOUNTER 出会いの広場 No 18、一一—一〇、一九九四
- 中村雄二郎・臨床の知とは何か 岩波新書、一九九二
- 野島一彦・学校教育システムの中でのグループ・アプローチ 看護教育の立場から・日本グループ・アプローチ研究会資料 No 5、一一—一四、一九九一
- 野島一彦・看護学生の研修エンカウンター・グループ——Low Development Group 事例研究——福岡大学人文論叢 25(4) 一五七七—一六〇九、一九九四
- 小野 修・自分がよみがえった—エンカウンター・グループへの参加体験 人間関係研究会刊行資料 No 2、一九七一
- 小野 修・子どもと共に成長する親たちのグループ—援助者のためのマニュアル（改訂増補） 人間関係研究会刊行資料 No 11、一九九四

小沼京子：看護婦の卵たちと ENCOUNTER 出合いの広場 No.14、

一〇一五、一九九二

小柳晴生：現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義

ENCOUNTER 出合いの広場 No.12、二四一九、一九九一

Rogers, C. : Carl Rogers on Encounter Group. 一九七〇（畠瀬稔、畠

瀬直子訳：エンカウンター・グループ ダイヤモンド社、一九七  
三）

鈴木正子：私の体験的エンカウンター・グループ観 ENCOUNTER

出合いの広場 No.11、一六、一九九〇

矢幡 洋：構成的エンカウンター・グループの実際問題

ENCOUNTER 出合いの広場 No.11、七一四、一九九〇

山口祐二：ファシリテーター論の試み 九州大学心理臨床研究 一、

七五―八五、一九八二

・愛知大学  
きむら やすし

## 人間関係研究会刊行資料

Na 1	畠瀬 稔	身体接触を伴う人間関係促進の一技法（改訂増補）1972	（価200円 千120円… 40g）
Na 2	小野 修	自分がよみがえった―エンカウンター・グループへの参加経験―1971	（価200円 千120円… 40g）
Na 3	カール・ロジャーズ1967（小野 修訳）	学校組織の主体的変革のための計画1971	（価200円 千120円… 45g）
Na 4	畠瀬 稔	エンカウンター・グループについて―来談者中心療法の行動科学的発展― （「教育の医学」18巻1号より転載）	（価200円 千120円… 30g）
Na 5	ジェンドリン&ビービー1968（小野 修訳）	体験グループ―グループのための インストラクション―（増補改題）1972	（価200円 千120円… 40g）
Na 6	北島 丕	高校生のためのグループ・カウンセリング1976	（価800円 千240円…180g）
Na 7	増田 實、東山 紘久、清水 信介	ラ・ホイヤ・プログラムへの参加経験1977	（価200円 千120円… 40g）
Na 8	畠瀬 稔	企業における人間関係の改善について―エンカウンター・グループ導入―1979	（価200円 千120円… 30g）
Na 9	渡辺 忠	職場のチーム・ビルディング―人間中心の組織づくりのために―1985	（価300円 千170円… 60g）
Na10	ナタリー・ロジャーズ（坂川 雅子訳）	母と私―鏡の中を覗いて―『生まれ変わる女』より	（価200円 千120円… 35g）
Na11	小野 修	問題をもつ子どもの親たちのグループ―臨床家のためのマニュアル―	（価300円 千240円…105g）
Na12	小柳 晴生	エンカウンター・グループ多数回参加者としての自己分析 ―参加体験と心的変容過程―	（価300円 千170円… 90g）
野島 一彦編	わが国の「集中的グループ経験」に関する文献リスト（1970～1980） 〔福岡人間関係研究会資料 Na.11〕		（価400円 千170円… 60g）

研究会資料の申込先は巻末に示したエンカウンター購読申込先と同じです。

《日本心理臨床学会第十二回大会自主シンポジウム報告》

## 特集2

### グループ・アプローチの危険・副作用とそれへの対応

#### ● 企画の趣旨

野 島 一 彦

これは、一九九三年十二月四日（土）に日本心理臨床学会第十二回大会（琉球大学）で開催された自主シンポジウム『グループ・アプローチの危険・副作用とそれへの対応』の記録である。本企画の趣旨は、以下のようなものである。

現在いろいろな領域（医療、司法・矯正、福祉、教育、企業、地域等）で、様々のやり方のグループ・アプローチ（集団精神療法、各種集中的グループ経験等）が広く実践されている。それはグループ・アプローチが有効・有益であることが認められているからである。

しかし、その反面グループ・アプローチには危険・副作用（心理的損傷、グループピー等）もある。このようなことについてグループ臨床家はよく知っておく必要がある。そしてその予防のために細心の注意・努力をしなければならないし、不幸にしてそのような事態

が生じた場合にはそれに対応もできなければならない。

従来はこのような問題をめぐる個人発表は時折なされてきたが、シンポジウムという形で取り上げられたことはない。しかし、グループ・アプローチの広がりや深まりが進行しつつあるわが国の今日的状況においては、これについて互いに論じ合うことが必要でかつ有意義であるように思われる。本シンポジウムでは、この問題に真正面からスポットライトをあててみたい。

話題提供者には、グループ・アプローチを数多く実践・研究されてきている様々の立場の先生方（山口先生・Tグループ、小柳先生・ベシツク・エンカウンター・グループ、村久保先生・構成的グループ・エンカウンター、日高先生・ゲシユタルト・グループ、中山先生・集団精神療法）をお願いした。先生方に、①これまでどのような危険・副作用を体験してこられたのか、②どのように予防し

たり、③また対応してこれたのかを具体的に紹介していただきながら、④この問題についてのご自分の考えを述べていただく。そして相互に意見交換をして、この問題へのわれわれの認識を深め、今後のグループ臨床に生かしていきたい。

本シンポジウムの関係者は次のとおりである。なお所属はシンポジウム当時のものである。

## ●Tグループの場合

私は名古屋にあります南山短期大学の人間関係科で教えておりますが、この学科の特色は、学生の人間性の成長をねらいとして専門科目の授業を体験学習を中心に展開している点です。その体験学習の一つとして、Tグループは基本的には必修科目となっております。

私自身は大学院時代はアカデミックなグループダイナミックスの研究者で、Tグループについては文献の上で知っており大変興味を持っておりましたが、実際に体験したのは南山短期大学に赴任した後、JICEのTグループに参加したのが最初です。その後、トレーナートレーニングを受け、JICEのフェローズとしてトレーナー体験を重ねました。その後JICEの活動が変化したためにJICEのトレーニングに参加する機会はなくなりましたが、南山短期大学の学生のTグループや南山短期大学人間関係研究センターの社会人対象のTグループのトレーナーあるいはトレーナー・トレーニ

・企画、司会者Ⅱ野島一彦（福岡大学）

・話題提供者Ⅱ山口真人（南山短期大学）、小柳晴生（香川大学）、村久保雅孝（名古屋音楽大学）、日高正宏（平安女学院短期大学）、中山巖（佐賀大学）

・指定討論者Ⅱ岩村聡（広島大学）

## 山口 真人

ングのトレーナーとしてかかわっております。

グループの危険や副作用という問題になると、一番最初にTグループが取り上げられるようです。過去にいろいろな歴史があったものですから、危ないといったイメージを持たれているようです。事実Tグループという名称で実施されたグループで自殺者が出たり精神病の発病、あるいは以前から持っていた病的な傾向が顕在化するといったことが何件かあったようです。しかし、私自身は十八年間のJICEや南山短大での学生や社会人のTグループ体験を通して、深刻なものには直面しておりません。

## 過去

歴史的なものを考えてみますと、グループアプローチは一九五〇

年代にTグループという名称で最初に日本に入ってきたと言えます。初期のTグループはJICEでは教会生活研修会として、Tグループの体験に加えて実習や講義もたくさん行い、グループ運営のスキルトレーニング的色彩の強い形で実施されておりました。

しかし、特にTグループの中で生じる「いま、ここ」での体験をベースにしたフィードバックは、日常生活では見せないお互いのありのままの姿を明らかにするという意味で強烈な体験であり、それを共に乗り越えると非常に強い相互信頼感・仲間意識が生じるという体験は、Tグループ参加者にとって強烈な印象を残したようです。この体験学習によるトレーニングは、その目新しさで参加者を与える影響の強さから、企業研修の一種の流行になって管理・監督者のトレーニングに使われたり、モータリゼーションという形に変質してSTという名称で呼ばれたりしました。それらのトレーニングの中で、特に特殊なパーソナリティを持ったトレーナーの方々のトレーニングの中で、事故がいくつか起こったというように私は理解しております。Tグループそのものは本来そういった事故を起こすようなものではないと思っております。

今現在私たちが実施しているTグループを考えてみると、いくつかの、例えば一つはトレーナーが引き起こす何らかの副作用、もう一つはメンバーの相互関係の中で、あるいは非常に特殊な個人が参加して何かが起こるといふメンバーの要因による危険、もう一つはTグループという枠組み自体が持っている何かしらの副作用、この三つの要因で副作用あるいは思わぬ出来事というものが起こる可能性があると思っています。

## 枠組みの影響

最初に枠組みの話をします。Tグループは非常にはっきりした

枠組みを持っているといっていると思います。グループアプローチ全体としては「いまここ」のプロセスの中から学んでいく、あるいはプロセスがそこでは取り上げられるという意味では、Tグループもエンカウンターグループもゲシュタルトでも、言葉の上では多分同じだろうと思います。しかしTグループの特色は、まず、教育プログラムとしてデザインされているということです。

### ①教育プログラムとしての構造

Tグループはエンカウンターグループなどと比較すると期間が比較的長く、二泊三日で行われることはありません。昔は二週間というものもあったようですが、今ではTグループという名称が付くと五泊六日というのが標準的な長さだと思っています。

この期間の中で教育を目的に行われるといいますが、健康な成人を対象として実施されています。過去には病歴を持った方が入っていらして難しいことが起こったこともあったようで、募集する時に健康な成人の教育的プログラムであることをはっきりとうたうようにしています。それでもいろいろな方が混ざってこられることは十分考えられます。

ラブ（Tグループでは研修全体のことをトレーニングラボラトリーの略でラブと呼ぶことが多い）は全体の構造が明確です。まず、トレーナーは一つのグループに基本的に二人入ります。一人でグループを持つことは非常に希です。トレーナーは人間ですのでひとり一人違っていますし限界がありますから、片寄った見方が起こったり死角が出来るということもありますので、複数のトレーナーが入るのが原則です。複数のトレーナーが入ることには、グループの中で起こっていることが密室での出来事にならないようにするという意味もありますし、一人のトレーナーが出来事の渦中に入っている時に他方のトレーナーが全体を見たり、一方のトレーナーに対し



一つのラブはたいいてい複数のグループで行われますから、スタッフミーティングを毎晩開き、お互いのグループの状況を報告し合いながら翌日のプログラムを作っていきます。

Tグループセッションは、五泊六日のラブで大体十四回から十五回程度行います。セッションとしては、数回のTグループを経験するとGセッション（全体会）を設けて、Tグループとは少し異なる状況での体験や講義などを導入します。例えば、グループで問題解決実習をしてTグループ内の関わりやコミュニケーションやリーダーシップのあり方を比較検討したり、ノンバーバル実習をして言葉にならない気持のやり取りに気づいたり、グループの中の自分の関わり方を表すような物を自然の中から採ってきて、グループの中の自分の状態を表現してみる、そして他の人の置いた物を見ながらお互いにフィードバックする、というようなTグループ以外の体験学習も間に含められます。あるいは対人関係の中での成長に関する理論やコミュニケーションに関する理論を講義したりすることもあります。

そして最終日の前日の午前中にはTグループを終了して、午後からは「Tグループ体験のふりかえり」に入ります。初日からのTグループや全体会の体験の中で、どんな気づきがあつてどんなことを学んだかということを言語化していくことに取り組みます。これはその日の夜まで五、六時間かけて、まず個人で毎セッションごとの学びや気づきを書き出した後、Tグループのメンバーでそれらを話

最終日には、これから日常生活に戻って行く準備として、現場に戻ってどんなことをしたいか、あるいは数か月後の自分を想像してみて、その自分に手紙を書いてみるというようなことをして、日常生活に戻る準備をして閉会を迎えるというふうになります。

Tグループセッションは以前は一セッション九十分で行っていましたが、最近は七十五分で行うことも多いです。エンカウンターグループに比べると短いのではないかと思います。グループの中で起こることはエンカウンターグループの場合とほとんど変わらないと思います。here and nowで自由に話しをしていくという形です。特定の話題はなくて「今ここ」で起こっている事から学ぶということを確認してスタートします。

グループの最初には自己紹介をやってみようなどという提案が出ることもありますが、「There and Then」の話題が長く続くこともありますが、最近のトレーナーは「今このことではない」と言ってしまうことにストップをかけるようなことはしませんし、なぜ自己紹介をしようとしているのか、その影響はどうか、などを分析するように求めたりもしません。むしろ自然な流れの中で「今ここ」で起こっていることにメンバーがだんだん気づいていくのを助けるような形で介入していきます。ですから、メンバーには自分たちのやっていることを阻止されたというようなフラストレーションは比較的少なく、むしろメンバー間の感じ方や考え方の違いが際立ってくると思いますか、メンバーの中で「こういうことをしていてもつまらないんじゃないか」とか「話に乗れない」というような気持の表明が起こって、メンバー相互の間で「今ここで起こっていること」の点検が始まって、トレーナーも動きだすというような形で進んでいく

ことが多いようです。

Tセッションは全てテープ録音されます。さらに毎セッションの終了時には各メンバーは、自分の気持や、人から受けた影響や、気になる事などを「ふりかえり用紙」に記入します。これらの記入済みのふりかえり用紙やテープは全て学習のためのリソースとしてグループ室に置いておき、グループメンバーに限りいつでも自由に見ることが出来るようになっていきます。テープを聴き直して自分の気になる過去のセッションに戻って、自分の発言や関わり方を検討することもできます。このようにグループ内の出来事が記録されるということは、無理なファシリテーションを防止するというこの役にも立つといえるかもしれません。

## ②受け付け時のチェック

申込みの受け付けの段階では特別にチェックはしていないんですが、JICEと大阪のSMILEという団体はTPI（東大式のPersonality Inventory）を実施しています。これは受け付け時のスクリーニングというよりも、特別にケアの必要な人がいるかどうかを見るぐらいのために使われていて、TPIの結果で受け入れを拒否したということは私の知っている限りではありません。

南山短大の社会人のTグループに関しては、受け入れ時のチェックは全然行われていないので、病歴のある人や現在治療中の人の参加に対して無防備だといってもいいかと思います。どんな人が来るか分からないという状況です。ただ申込みの時点で、どのような研修を受けたことがあるかということを書いてもらっていますが、本人の申告に任せていますので、受け入れ時にはほとんど無防備で実施しているのは事実です。いろんな人が入って来ているだろうと思いますが、最近ではTグループそのものが教育的なプログラムであるということが浸透して、治療的な関係を求めて来る人はほとんどい

ないだろうと思います。私も以前、トレーナーを始めてごく初期の頃、治療を受けているという人をJICEのトレーニングで受け持った経験があります。彼の場合はグループの中で言動の活動性が高かったですが、グループメンバーも注意深くかわっていたのでアクティングアウトすることもなくグループは終了しました。その方に関してはTグループ体験は良いものだったようで、コ・トレーナーとは住んでいる地域が一緒だったので、結婚式に招かれたりしたようです。最近はそのようなケースを体験していません。

## ③フロアアップミーティングの実施

また、南山短大の社会人のTグループの場合、ラブが終わってスポンと切れてしまうことはありません。Tグループの三か月後にフロアアップミーティングを実施しております。そこで日常生活の中でいろいろな感じた不適應のようなものがあれば話し合われるでしょうが、大抵の場合は不適應というよりも、自分が学んだものかどうかという活かせるだろうかという悩みの方が多いようです。

学生に関していうと、二年間の在学期間がありますので、その間はフロアアップをしていきますし、学生相談室もありますので、何かあった時には対応できる形でやっております。実際にTグループ体験が原因となったケースはないという報告を受けています。

こういう枠組みそのものは非常にきちつと守られているのもTグループの特徴です。例えばセッション時間に関してみても、毎朝スタッフの方から出される一日の日程表に表された時間にしがって行われ、時間が来ると基本的にはピタッと終わります。話しが多少続いても『今はここまでにしましょう』という形で止めますので、ある意味で泥沼に入っていくようなことは避けることができます。逆の意味では不満が残るということも起こるでしょうが、本当に必然性のあることならば次のセッションに必ず続いています。

で、クールダウンするという意味でも時間枠を守るということは、大切なことだと思います。

## トレーナーの影響

トレーナーに関していうと、トレーナーの個人的な特性というものも非常に大きな影響を持っていると思います。特に以前、産業界でいろいろなトラブルが起きた原因は、権威者になりたがるトレーナーの問題であつたと思います。トレーニングしてやる側と受ける側というような関係に自分を置きたがるトレーナーの元では、メンバーはいじめられることを避けるために偽りの言動を示し、大きな問題が起るでしょう。それともうひとつ、非常に評価的な言動を多く用い、『何を言ってるのかわからん』『伝わってこん』などと言つてメンバーを追ひ込み、混乱と緊張が極限まで高まつたメンバーが屈服すると、『よくやつた』と受容するというような手で至福の喜びをもたらし、グループ全体が極度の一体感を体験するというようなトレーニングも横行したようです。そこにある人間観はメンバーの主体性や人間性を否定しており、本来のTグループとは似て非なるものです。

Tグループでもエンカウンターグループでも同じですが、トレーナーやファシリテーターは最初はメンバーとは少し違う人間として見られています。それゆえにトレーナーは自分が使う言葉は、メンバーひとり一人の尊厳を犯さないように吟味して、細心の注意を払つて語られなければならないと思います。思つてもみない受け取られ方、傷つけ方をする可能性があるからです。

実際に傷つく体験が起こつていてもトレーナーの所には聞こえてこない可能性もありますので、心理臨床家の方でTグループの中でこんなことがあつて傷ついた人がいるというケースを御存じであれ

ば教えていただきたいと思います。

## メンバー相互の影響

もう一つはメンバー相互の影響関係の問題があると思います。トレーナーがグループの中で問題を起こさないとしても、メンバーの中にいろいろな人がいます。Tグループの場合よそのトレーニング会社のトレーナーがメンバーとして送られてくるということもあります。普段トレーナーをやっているような人の中には、その人の個人的な特性と相まつて非常に大きな影響をグループやメンバーに与える人がいます。時にネガティブなフィードバックを強く出して他のメンバーを傷つけるという可能性もあります。

メンバーの中に病的な傾向を持った人が入っていると、グループの中で起こっている事に対して常に何らかの形でその人がかかわってくる、あるいはみんなの関心を引いてしまうということが起こります。コミュニケーションが難しくなるとどうしても他の関係よりも一番難しいその人との関係にみんなの関心が集まつてきて、常にその人を巡つてグループが動くのだけれども進展はしない。すると他のメンバーが十分自分自身の課題に取り組めないで時間が尽きてしまうということも起るでしょう。非常に大きな気がかり・懸念がグループの中に存在して、その懸念を巡る動きに終始して膠着状態に陥るということです。

また非常に大きな個人的問題を抱えている人が自分自身を露呈していく中で、防衛が取れてしまつて、グループの中でそういう自分を受け入れてもらえた経験から、普段の生活に戻るのが不安になるということも起こる可能性があります。Tグループでいう自己開示とは、本来「今この関係の中で」感じていること気づいていることとフィードバックするという意味ですので、個人のバックグラウン

ド的な悩みの開示をあえて禁止することはしませんが、特にお勧めもしません。むしろ『今ここでも、そういう気持ちを体験しているのですか?』などという介入によって「いまここ」のレベルでの現実吟味をすることをすすめて、個人的な秘密や体験の露呈がメンバーへの信頼感の証となるようなノーム（いわゆる人生相談や告白ごっ

このような）が出来ないようにします。  
以上のような要因に配慮をしながらTグループのファシリテーションをしていくことで、未然に事故や副作用を防ぐ努力をします。

やまぐち まひと  
南山短期大学人間関係科

## ●ベーシック・エンカウンター・グループの場合

小柳晴生

### 一、二十二年間のE・G参加者の自殺について

演者は一九七二年から現在まで二十二年間に一泊二日以上エンカウンター・グループ（以下E・G）を約百六十回経験している。この間同一グループになった人は延一七〇〇名、同一企画の参加者は延約六〇〇〇名である。

あるアプローチの危険・副作用を推測する一つの指標として、外的に比較できるという意味で自殺があげられるであろう。今回は、全ての人を追跡したというのではないが、演者と同一または同一企画の参加者で、知り得る範囲で、その後自殺した人は五名であった。六〇〇名中五名という数は十万人比に換算して八十三名になる。

この数は一九九四年の日本の自殺者数十万人に十七、四人と比べて約五倍という数字である。

ところで、E・Gの場合参加後もたびたび直接に接触を持つことは事実上できない。時折の手紙や他のメンバーからの伝聞で知ることが多い。こうした事情から亡くなった五名の方について詳細は知り得ないが、数人についてごく簡単にその概略に触れておこう。

Aは初回参加の一週間後、E・Gとは全く別な個人的な出来事が二つ重なり、それが直接のきっかけで亡くなったと聞いている。

Bは、数年間に三回E・Gに参加している。三回目の参加後しばらくして、個人的な問題のストレスから妄想的な言動が出るようになり、その後自殺と思われる事故で亡くなっている。Bの場合、妄想的になってからE・Gの関係者らによって弱いながらも援助のネットワークがつけられたが、利用されなかった。

Cは、数年間に十回程度にE・Gに参加していた。その後強い焦燥感に襲われ、その状態が長く続き、そうした中で亡くなったとのことである。Cの場合、根元的な問題は甘えだったように思う。度

重なるE・Gの参加ではとても癒される程度のものではなかったの  
であろう。ただ救いは、行方不明になった時、E・G等で知りあっ  
た人達が連絡を取りあつて探したことであつた。

Dは数年間にわたつてE・Gに熱心に参加していた。しかし抑う  
つ状態に陥り、そこへ生活の変化も加わつたことが強いストレスに  
なつたのか自ら命を絶っている。Dの場合も、援助のネットワーク  
が準備され、いくらかは利用したもののその中で自分の本当の姿を  
見せることは、いさぎよしとしなかつたのであう。

いずれの場合もE・Gが自殺の原因、または誘因になつたとは言  
えない。B、C、DはE・Gに救いや自己の変化を求めていたと言  
えよう。しかし自らの弱点を人前にさらけ出せないために、有効な  
援助を得にくかつたように思える。また、今回の発表を機に亡く  
なつた状況を調べる中で危機に際してE・Gの他のメンバーによつ  
て援助のネットワークが形成されていることが明らかになつたので  
ある。

しかし、自殺に親和性のある人が、E・Gのメンバーとして参加  
していると心に留めておいた方が良いことを示唆している事実のよ  
うに思われた。

## 二、E・G参加者でその後精神的トラブルが生じた人

### 参加形態から見た場合

演者と同一企画のE・Gに参加した人のうち、その後精神的トラ  
ブルが生じた人は知り得た範囲で約二十人であつた。これらを参加  
形態別に分けて考察する。

#### (一) E・Gでのメリットに懸念があるのに参加を促した場合

これは、E・Gの実施当初に時々生じていた。一つは、E・Gの  
人を変容させる力の過信からきており、もう一つは、参加者の数の

確保のためである。他の心理的アプローチの場合でも、初期には経  
験不足から利益を受けにくい人を誘うことがあると考えられる。

経験の蓄積とともに、メリットを享受できそうな人とそうでない  
人との区別がつくようになったり、無理に参加者を集めなくても企  
画が成立するようになると、こうした例は影をひそめてゆくように  
思われる。

#### (二) 集団での活動になじみにくい人が参加してきた場合

E・Gが世間に知られるにつれて、E・Gになじみにくい人が参  
加することもできた。例えばかなり重篤な精神疾患を持つ人が、  
E・Gに治療効果を求めてくる様な場合である。実際、精神科に入  
院中の人が外泊許可をもらつて参加していた場合もあった。

E・Gが引き受けられる以上の問題を持った人が参加すること  
を防ぐために、事前に面接をしたり、人間関係研究会では「このプロ  
グラムは治療を目的としておりません。現在、治療・カウンセリ  
ング等を受けておられる方、あるいはその必要のある方は治療者の同  
意を得た上でお申し込み下さい。同意のない場合の参加はお断りす  
ることがあります。」と明記するようになった。しかし、あくまで  
も自己申告を旨とするため完全に防ぐことはできないし、相手を傷  
つけずに参加を断ることは実際上かなり難しい。E・Gは精神疾患  
を持つている人を全て排除するものではない。他人の話のある程度  
歪みなく理解することができ、歪みのない反応をかえせる能力を有  
していること、精神疾患を治すという目標ではなく、対人関係や自  
己理解の深化という目標を持っていて、それを意識化できているな  
ら、E・Gは援助できるかもしれない。

これらの力が十分でない場合は、参加者自身が不利益を受けるば  
かりでなく、同じグループになつた人達の中にこの人を配慮するこ  
とにエネルギーの大半がさかれるために、自己探求を十分にできな

い不満が生じたりする。社会の中でそういう人も含めて、どう生きるかというテーマを課題と感じられる人は、不満が少ないうら。演者はまだまだだが、こうした人が参加した場合、両者の利益をギリギリのところまで配慮できる技量を蓄積したファシリテーターも出てきている様である。

### (三)主催者も参加者自身も不利益(危険)を予見できない場合

E・Gが導入された直後、E・Gの進め方が参加者の期待と異なっている場合など大きな不満を生み出した。E・Gについての情報が増え、参加経験が増すにつれて、減少しているが、現在でも研修型のE・Gで時々生じるように思われる。

教員、看護者、看護学校などで研修型が行われるが、E・Gによって、全く意識されていなかった問題に気付き強いショックを受ける場合がある。自発的な参加でも研修型の参加動機を持っている場合は同様のメカニズムで「傷ついた」という感覚が生じるようである。

かつて行われたような高揚した気分をあと、過度な率直さを良しとする雰囲気の中で洗いざらいしゃべることを促す時、この種の危険が生じる。ことに超自我の強い人が高揚の中で一時的にマヒしたような状態で話した時など、後で「させられ体験」として体験する様である。

### 三、E・Gの危険・副作用とその対応

以上述べてきたことを基に、改めてE・Gの危険・副作用とその対応についてまとめてみよう。

筆者の参加したE・Gについては、後自殺、精神的に不調になった人は少なからずいたが、楽観的すぎるかもしれないがE・Gがそ

の直接の原因とは考えられない。ただし、顕在化する引き金になることはありうるといえよう。上記のことが生じやすいのは、無理に参加を促した場合、参加に懸念があるのに断るか、事前に発見できなかった場合、主催者、参加者ともに事前に予見できなかった場合が考えられる。

無理に参加を促すことは、E・Gが導入され二十五年たちE・Gで可能なこと、不可能なことがわかってくるにつれて、無理な勧誘がなくなり影をひそめた。

参加に懸念がある場合、以前よりは「ことわる」という判断も増えるようになってきた。事前に発見できない場合もフォローする経験が蓄積されるにつれて、対応できる範囲が広がってきた。研修型での思いがけない自己との出会いについても、進行を急がない、変容を促さないことによって、より危険の少ないやり方に変わってきている。

### 四、グループ観の変化とE・Gの危険・副作用

この二十年間に、グループ観や運営方法も変化してきた。この変化が期せずしてE・Gの危険や副作用を防ぐ方向にも働いている様に思われる。

#### (一)日常性の重視

E・Gを始める時には、比較的丁寧な進行方法、特徴などを説明し、疑問についても可能な限り答えるようにしている。自己紹介や社交的な会話も積極的に肯定している。過剰な高揚感や繊細なまでの過敏さ、内面の暴露なども促進しなくなっている。日常性との連続性があるため、精神的にバランスを崩しにくいようである。

#### (二)自己や他者との深い関わりを強要しない



演者は最近 E・G を、自己や他者との関わりや自己表現、他者からの反応を楽しむ場と考えている。「E・G は社会の居間である」と表現したりもしている。従って、必ずしも深い自己表現や他者理解を求めなくなっている。この文脈で日程の長さもこだわらなくなり、楽しむことに重点を置いている。最近では一泊二日や三時間という短期間のものも実施している。その期間内で可能な深さの交流をはかっている。また、多数回参加も積極的に肯定している。同様の意味で、一日にとるセッション数も少なくなる傾向にある。セッション以外の人との関わり、多様な経験、休養などを重視している。

### (三)「変容」を無理強いしない

E・G の最良のファシリテーターは、時間であり、グループの自重で進むものと考えている。あるメンバーが（ファシリテーターを含む）真摯に自己探求する姿や言葉が、他の人の変容を促すのであって、計らいによって変容を促進することはできない。変容を無理強いされた時に精神的な混乱が生じやすいように思われる。

上記のような変化は、敏感さや、非日常性など「えぐいまでのエンカウンターさ」がなくなったとの批判も可能であろう。外からの強い刺激を求める人達にとっては物足らなく離れてゆくかもしれない。

### 五、おわりに

危険の全くない人生はあり得ないように、E・G もまた、その程度の危険は常にはらむものと考えている。危険を全く排除しようとするれば、それは巧みにしくまれた「自由」になってしまうだろう。

E・G は「人生のスクランブル交差点」「人生のごった煮」とも言えよう。心地よい出会いもあるかもしれないが衝突もある。良い味になることもあれば、予想外の食い合わせも生じるであろう。

細心の注意を払うのは当然としても、この避けることのできないスリルを味わうことも E・G の醍醐味と言えるかもしれない。

おやなぎ はるお  
・香川大学

## ●構成的グループ・エンカウンターの場合

村久保 雅 孝

### はじめに

構成的グループ・エンカウンターとは、自己や他者との出会い、心と心の触れ合い、グループにおける人々のコミュニケーションやリーダーシップ等に関する学習など、意図的な目的を提示しながら

いろいろな種類の課題を遂行する過程を通して、自己の成長を目指すグループ体験であると理解している。課題はリーダーの指示や提案によって示され、参加者はそれに沿ってさまざまな体験をすることになる。構成的グループ・エンカウンターでは体験学習的な活動と参加者同士の交流のほかに、リーダーによる知的説明（講義もしくはレクチャーなど）も行われる。課題は専らエクササイズと呼ばれることが多く、訓練の要素の強い種類とゲーム的要素が強調された楽しめるものがある。課題遂行的であり体験学習的であり、知的説明も含まれるので、構成的グループ・エンカウンターは研修もしくは教育として実施されることが少なくない。他方、出会いや触れ合いに重きを置いた、開発的・治療的接近として実施されることもある。

筆者は大学生時代から今に至るまで、折々に構成的グループ・エンカウンターの参加者体験がある。およそ九年前から年に二回から四回、リーダーの役も務めるようになった。筆者がリーダーを務めたグループは、大学生や短期大学生のグループ、研修の一環としての教員のグループ、企業での研修グループ、孤立児童の人間関係開発を援助しようとした小学校でのグループ、他に筆者が募って実現したさまざまな参加者によるグループである。筆者はまた、非構成的エンカウンター・グループにも参加経験があり、この方のファシリテータの経験もある。どちらかといえば、非構成的エンカウンター・グループに関わることの方が多いように思う。

ここでは、構成的グループ・エンカウンターに対する以上のような筆者の認識と体験に照らして、その危険や副作用、それに対する予防や対応についての考えを記そうと思う。

## 危険や副作用

ここでの危険や副作用とは、そのグループ・アプローチによって引き起こされた重大で好ましくない事柄を指す。具体的に思い起こせる事柄としては、自殺や自傷、精神病理の分野に入るような心理的損傷や日常生活の破綻などがある。

筆者の体験には、このような重い意味での副作用を引き起こしたグループはない。また、筆者の知る心理学者や教師がリーダーを務めたグループに関しても、同様のようである。そもそも一つ一つのエクササイズやエクササイズの組み合わせ（プログラム）は、危険や副作用が無いように考案されるものである。構成的グループ・エンカウンターが専門の訓練を受けたリーダーの下で実施されるならば、このような副作用は少ないか、ほとんど無いと言えるのではないだろうか。

ところで、軽いか、重大でなく好ましくないのでもないとは断言しにくいのが、好き好んで求めるような事柄でもないことならば、いくつか考えられる。

構成的グループ・エンカウンターはエクササイズを遂行しながら進められる。そのエクササイズに乗れないというか入れない参加者が出ることもある。その人がつまらない感じとか取り残された感じを持つことは想像できる。そして、できない自分に対し自己否定や自己嫌悪の感情に囚われることもある。自己否定や自己嫌悪はこのグループ・アプローチの目指すところではない。だからこのようなことはできるだけ少なくしたい。

また、エクササイズへの参加が過ぎてセルフ・コントロールを見失う参加者が出ることもある。調子に乗り過ぎるのである。過度に強調された楽天性や制御の効かなくなった自己主張など、本人に自覚があるので病的とは言えないにしてもその本人は自分で制御できないのである。このようなことが自分の新発見につながることもあるが、やはり肯定的な自己評価にはつながりにくいだろう。「自分

で自分のこともコントロールできないような人間」と、後で気分が沈むこともあるだろう。このようなこともリーダーとしては少なくしたい。

さらに、エクササイズに参加してはいるのだが、課題が達成できないことへの不全感を持つ参加者が出ることもある。構成的グループ・エンカウンターではエクササイズを実施する時、一次的な課題を示す。例えば二人組になること、自分の考えを明確にした上でグループとしての一致した見解を定めること、各人に与えられた情報の断片を持ち寄って地図や図形などを完成させることなどである。

一次的な課題は、グループが達成すべきこととして具体的に明示される。さらに二次的な課題として、一次的な課題の達成に向かう過程を通して、例えば自分の価値観を振り返る、コミュニケーションの流れを見る、グループのプロセスを観察する、自分を肯定的に見直すなどが、示されることもある。加えて、これらに縛られない自由な発見を歓迎すると言うこともある。二次的な課題は、示されたことのみが目標となるのではなく、参加者はリーダーの意向に添う必要は無い。何に気づき、何を感じ、何を見いだしてももちろんいいのである。この時の一次的な課題に対して、満足に達成できない、あるいは他のグループよりも遅い、下手である、間違っているなどとして、不全感を持つようである。過程に注目することはあまり魅力的なことではなく、できたかできなかったかに関心が向けられる。リーダーとしてはこのような状況に留まりたくはない。

そして、エクササイズに適切に参加し、本人にとって何か意味のある気づきを得たものの、その気づきを日常に統合できない参加者が出ることも少なくない。ここでの日常とは、多くの時間を過ごす環境のことと考えている。普段の家庭や職場がそうである。多少の波風はあってもそれなりに平穏であった日常が、何か意味のありそうなそのことによってぎくしゃくしてくるのである。気づきを得た

というよりも、気づいてしまっただけでどうしたらいいのだろうかと言ったところなのではないだろうか。本人にとってそれほど吟味されることなく「普通」とか「自然」と思われていたことがそうではないかもしれないのであるから、問題と言えれば問題であろう。しかし、筆者はこのことをできる限り避けなければならない困ったこととは必ずしも考えてはいない。何か意味のありそうな吟味が始まったことの方に魅力を感じるからである。ただ、当の本人にとってはそうも言っていられないことは理解できる。

他に、エクササイズの種類によっては、参加者同士の交流の中で特定の一人や少数の人が槍玉にあがってしまうようなことがある。率直な意見が正当であっても、度を過ぎていれば心の傷にもなりかねないと思う。また、参加者の個人情報取り扱いについて苦情が出されることもある。住所や電話番号もそうであるが、グループ体験を通して知ったさまざまな事柄の中には、そのグループを離れて取り沙汰されては都合の悪いこともあるからである。

## 予防や対応

構成的グループ・エンカウンターのリーダーは、多くのいわゆるエクササイズのレパートリを持っているが、それらを無分別に提案するのではない。会の主旨、参加者の数や関心・レイネス、持ち時間、会場の条件、リーダーの質・量などを勘案して、相応しいエクササイズを選択し、組み合わせ、プログラムを構成する。丁寧な準備が危険や副作用の予防や対応の基礎になるだろう。

エクササイズに乗って行けない参加者に対しては、「ためしにやってみよう」と勧めたり他の参加者から誘いかけてもらったりしながら、参加を促す。時には観察の役をとってもらったり、代わり

で参加していることにしたいと思う。また、エクササイズを振り返る時、乗れなかったことそのものよりもどのように乗れなかったのか、どの程度乗れなかったのか、に焦点を当てることを勧めることが多い。何故を問うと、自己批判に短絡しやすいように思うのである。

調子に乗り過ぎてセルフ・コントロールを見失ったような参加者に対して、筆者は直接頭を冷やさせるような介入をほとんどしない。エクササイズは時間がくれば終わる。リーダーが進行を修正して少し早めにそのエクササイズを終わりとすることもできる。すぐに次のエクササイズに入らず休憩時間にすることも可能である。それとなく、調子づいた気分が変わるような配慮をすることの方が多い。我に返って本人が多少気分が沈むことがあっても、あまり手厚く関わることも少ない。参加者も無能ではないのである。セルフ・コントロールを見失うこともあればできることもあるのである。ただし、過度に気分の落ち込みがひどいような場合には、個別に会うか他のカウンセラー（リーダー）に会ってもらうことがある。

エクササイズの一次的な課題が達成できなかったことへの不全感に対しては、二次的な課題の説明を丁寧に繰り返したり、どのような文脈で課題が達成できないというところへ至ったのかを振り返るなど、意図的に過程に注目するよう提案したりする。

以上の各点に関しては、老婆心ながらリーダーが体験の仕方提案し、体験の多様性を示すことになると思う。

エクササイズにおいて特定の個人が攻撃を受ける場面や、個人情報の扱いに対するリーダーの関わりにしても、リーダーが積極的に介入することが必要だろう。リーダーは単なる司会進行役ではない。護り、守るべきはそうすべきであろう。

何か意味のありそうな気づきへの戸惑いに対してはどうだろうか。筆者は次のように考える。

体を鍛えたい、体力をつけたいとは、大なり小なり人の願望だろう。そのために運動などすれば筋肉痛も起こる。心の成長というか、精神的な体力がついていく際にも、心の筋肉痛のようなことが起こるのではないだろうか。多少の痛みや苦しみはあるのではないだろうか。だから、休み休みでも戸惑いつつ吟味し続けることを期待したい。困ることはすなわち問題ではないのである。困ることは次の満たすべき欲求の予兆とも見なせると思うのである。また、集中的グループ・アプローチの体験は、自分の感情や気分が敏感になるという影響を及ぼしやすい。戸惑いが過度に意識されていることであろう。そして、何か意味のありそうな気づきを尊重するも無視するも、当の本人の選択なのであるから、戸惑いつつ吟味を続けるも見切りをつけるのも本人次第である。しかし、グループ後の継続した相談を受け付けることは参加者に伝えてある。その例もあるが、筆者の日常を圧迫するほどではない。

以下、その他予防や対応に関することとを挙げていこう。リーダーを務める人には、やはり専門の訓練が必要である。構成的グループ・エンカウンターのリーダー研修の機会はずしも豊かに準備されているとは言いがたいが、積極的に機会を作り、継続的にも訓練を続ける必要がある。訓練は基盤となる知識の充実に加えて、訓練目的のグループに参加すること、構成的グループ・エンカウンターや他の集中的グループ・アプローチに参加すること、グループにおける複数のリーダーの一方になることなどが考えられる。筆者は何度か友人知人に「自分はかくかくしかじかのこと（エクササイズ）をしたいが、うらみつこなしで来てくれないか」と呼びかけ、自前のグループでいろいろ試したことがある。これは気分的に楽し、集まって来た人からも率直な意見があり、筆者にとっても参加者にとっても貴重な体験になった。

リーダーはできれば複数いたほうがいいと思う。複数のリーダー

がいるとリーダー間の不調和が問題になることも考えられるが、筆者の体験に深刻な不調和はない。二人のリーダーは互いに補完し合い、一人プラス一人以上の働きが期待できる。複数といってもそんなにたくさんは要らない。

リーダーは複数ほしいが、宿泊を伴う、エクササイズの時間以外の共同生活もあるようなグループでは、リーダー以外にグループに関わらないカウンセラーもスタッフに入れたたい。

エクササイズの組み合わせは時間的に余裕をもって組み立てる方が賢明である。また、エクササイズには次案（スベア）を用意しておく、柔軟な進行が容易になる。

柔軟な進行について言えば、筆者は自分の非構成的エンカウンター・グループに参加した体験やファシリテータの体験が、自身の

柔軟性に一定の影響があったと思っている。構成的グループ・エンカウンター・リーダーには、非構成的エンカウンター・グループに参加するかファシリテータを体験することを勧めたい。プログラムの進行に固く縛られない柔軟性を身につける上で都合がいいのではないかと思う。

最後に、筆者がそうしているだけのことであり、予防や対応として挙げることができるかどうか分らないが、自分が苦手なエクササイズはしないようにしていることを付け加えておきたい。

いずれにしても、集中的グループ・アプローチには副作用や危険があることがあるという認識をもって、その発展を目指していきたいと思う。

・むらぐは まさたか  
名古屋音楽大学

## ●ゲシュタルト・グループの場合

日 高 正 宏

今、おふたりのご発表をお聞きしながら、いろいろなことを振り返っております。臨床経験は二十六年あります。グループ関係では、子どもたちのリクレーショナルグループなどはもともと昔からやっているわけですが、きちんとした臨床グループという意味では、ここ二十年近く続けております。その中で、修行時代、学生時代のことから、いろいろと思い出しております。たしかに、いろいろなびつくりするような場面に出くわしたこともありました。たとえば、

はつきりしないことをいろいろ、ぐずぐず言っているようなメンバーに、「ぐずぐず言うな!」ということ、ほんとうにスリッパや座蒲団が飛んでくる、というようなグループにも参加したことがあります。また個人面接の方で、余所のワークショップを終わって帰ってきてから、現実が混乱して、個人面接を求めてこられるような方の面接も、ずいぶんたくさんやったなあ、などということも、今、思い出しております。いろいろな方を思い出しますが、今、思い

浮かんだ、ひとりの人は、まあ、関係妄想とも言えますが、「ワーکشヨップグループの中で出会った人を好きになった。その人も、自分のことを好きに違いない」という確信を持たれ、「もう仕事をやめて、その人の住む町に行くんだ」ということで、いわゆる大騒ぎ、をやった人であります。その中で、「ワーکشヨップハイの鎮め」ということをお手伝いしたわけであります。

ところで、私はゲシュタルトセラピーの立場に立っているわけですが、「グロリアと三人のセラピスト」という映画をご覧になった方はお分かりと思いますが、あの記録映画を見た人は、まず、ゲシュタルトセラピーを嫌いになる。ということになっております。(笑い)「あんな恐ろしい所へはよう行かん」という反応であります。グロリア自身が、はじめはそう言っているわけです。「パールズ先生は怖い」というふうに言っているのですが、あれほど嫌がっていたグロリアが、ロジャースとエリスとパールズの三人のセラピストを巡った後でどう言ったかというと、「自分は、なぐさめてもらいたければロジャース先生の所へ行く。けれども、今、解決しなければならぬ課題を持っていて、何とかしなければいけないと思っているとしたら、パールズ先生の所へ行く。」と言ったのであります。

このことからお分かりのように、ゲシュタルトセラピーは方法としては派手に動きますので、他のセラピーに比べて危険性が高いと思われるかもしれませんが、内実はずいぶん丁寧に仕事をしておりますので、自分たちは危険なものとは思っていないわけですから、考えてみると、まちがって怪我をする、ということはありません。怪我というのは、これは物理的な怪我でありまして、心の怪我ではありません。(笑い)我々、よくクツションを使ったセラピーをします。一対一の面接ですと、合わせてもふたり分の力しか出ませんから、まず大丈夫なのですが、これがグループセラピーですと、当の問題解決ワークに当たっているメンバーとセラピストが、

クツションを介してもめている、たとえば、職場の人間関係を扱って、セラピストがクツションの蔭で、厭な課長の役を演じてもめている時に、それを見ている他のメンバーが、いたたまれなくなつてメンバーの後ろから、物理的に応援したりすることがあります。また、悪役の課長がすぐに負けてしまつてはクライアントさんが強くないので、心を鬼にして、課長の援護をするメンバーも出てきます。すると、物理的に何人もの力が加わるようになります。我々、ゲシュタルトセラピストは慣れていますから、怪我をしないように、心得てやっているわけですが、慣れないメンバーが加わると、思わぬ怪我をすることがあります。たとえば、我々はクツションをぎゅっと握るためにも、相手を怪我させないためにも、ワーکشヨップの前には爪をきちんと切っておくのですが、メンバーの中に爪を切っていない人がいると、クツションを奪われる時に自分の爪を痛めたりする人もあります。このような物理的な問題は、たまにあります。しかし、これはまあ、修行でして、慣れてくるとそんなことはあまり起こりません。クツションを持って、相手の怒りの感情を受け止める時、たとえば、嫌な課長への怒りの場合、本人は課長に出せないできた怒りを、クツションに向かって、「この課長!」ということ、一気に爆発させて、飛び掛かってくる。その時に、慣れないセラピストは、真正面から、その攻撃を受けてしまうわけです。そうすると、セラピストとクライアントが膝をぶつけてしまふことになります。そこで、我々は、必ず身体をひねって、膝を横に向けておきます。そういう工夫をすると、ぶつかって怪我をしたりしないようになります。物理的なことに関しては、そのような工夫が必要かと思ひます。

それから、募集のことにつきましては、今、我々のところのチャシでは、「ご自分のことについて、ご自分で選択をおできになる方、ご自分のことについて、ご自分で責任をお取りになれる方」という



表現を入れております。それから、申し込み用紙に紹介者欄を設けておりますので、だいたいは紹介者のある方を受け入れるようにしております。本人はお会いしたことがなくても、紹介してくださいった方を信用する形になっております。

今回、「グループアプローチの副作用、危険性」ということを考えるにあたって、私は、ワークシヨップによる自殺とか、精神科領域の問題とかは、むしろあまり思い当たらなかったのですが、それよりも、全く違う問題を考えておりました。自分自身がゲシュタルトの世界に居ながら、どうも気になることがあるわけです。それは、ゲシュタルトセラピーというのは、単なる問題解決のセラピーというだけではないわけで、「ゲシュタルト的生き方」という、ある種の人生哲学を提唱しているわけでして、それにかかわる問題を日頃から考えております。それは、「自分の人生に自分で責任を持つ。自分で選択して生きよう」。たとえば簡単な話、喫茶店に行った時にコーヒーにするか、紅茶にするか、熱いのか冷たいのか、周りに合わせるのではなく、自分で選ぼう、それが健康の概念である、というようなわけで選択と責任。それから自分で自律的に生きるということは、何かに縛られることではない、ゲシュタルトの言葉では「シュッディズム」、ちよつと訳しようがないのですがそのまま訳すと「べき主義」となります。その「シュッディズム」に陥ってはならない。だから、何かに縛られて生きるのではなくて、あらゆることを、ほんとうに自分で判断して生きる。それから「アバウティズム」の排除と言いまして、「くについて話す」、本題を避けて周辺を巡って話すのをやめよう、本題に即、入ろうというような考え方、それから、常にスプリット、分裂せずに丸ごと、統合をもって生きていく、とか、もっと単純な言い方としては、生き生き生きていく、というような、生き方の指針があるわけですね、そうすると妙なことに、セラピストとしての自分が、このゲシュタルトセラ

ピーの枠にはまってしまっているのではないかと思います。そうすると、たとえば自分がゲシュタルトセラピストであっても風邪をひくこともあるのですが、これ、僕はとっても恥ずかしくて、「私は今、風邪をひいています」ということが、よう言わんのです。（笑い）ゲシュタルトセラピストは風邪なんかひくはずがない、風邪はひいても、そんなことは自己コントロールの中で処理できるはずだ、というしばりの中で生きることになる。実際、今まで僕はそうして生きてきたわけです。僕は風邪で仕事を休んだことは、ここ二十年來、無いのです。風邪はひくけれども、その熱は夜中に上げておいて、朝には治す、仕事には支障がないようにコントロールする。それこそが生き生きとした生き方だ、ゲシュタルトセラピストこそ、そうした、どこから見ても、ゲシュタルト的生き方をしなければならぬ、という生き方をしてきました。けれども、これを逆に見たら、これは「シュッディズム」ではないか、「生き生き生きなければならぬ」ということに縛られた生き方ではないかという疑問が生じるわけです。（笑い）だから、来たメンバーにとって危険なことではない、こちらが、セラピスト自身が、ゲシュタルト的に生きていないと、絶えず不安全感がある、というディレンマに陥っているのではないかと思います。だから、喫茶店で自分が、「紅茶にしようかな、コーヒーにしようかな」とは迷えない。少しでも迷えば「お前はゲシュタルトセラピストのくせに、何を迷っているのか」と責めるので、「迷えない」という状況に追い込まれているわけです。（笑い）今、言っているのは僕のゲシュタルトセラピーであって、もっと偉いゲシュタルトセラピストは、もっとあるがまさに、迷うときには主體的に迷う、あるいは迷うことを楽しむ、という余裕をもっておられるのかもしれないが。僕のレベルでは、結果的に生き生きはつきりだけという、アメリカのビジネスマンみたいになってきて、逆に言うのと深みがない、そんなふうに自

己卑下をしたりすることもあります。それから、こういうゲシュタルト的な生き方をしているというときに、僕なんかはもう長い間、そういう生き方をしていますから、もう今はどうもないのですが、はじめてこういう世界に入ってきた人は、ワークショップの間はいいのですが、ワークショップを終わって、ふつうの会社とか、ふつうの学校とか家庭とかに戻った時に、ゲシュタルトの生き方をする人がまわりにいないと、また日本的な「シニシティズム」「アバウティズム」「縦社会」に戻ってしまいます、ということがあります。だから、どうしてもゲシュタルトの仲間がほしくなるわけです。たとえば、僕なんかゲシュタルトをやりはじめた頃は、周りには分析派の世界です。また勤め先が何しろ箱庭療法発祥の地で、分析の人たちばかりです。たとえば、何かのことでこちらがはらを立てて怒っている、「ああ、それは何かフックになっているのだな」とか「シヤドウが刺激されましたか」などと、すべてユング派のテクニカルチームで返ってきて、心から丸ごとのおつかりが起らないわけです。そうすると、そんな頭人間の、表層的生き方が嫌で嫌で、早くゲシュタルトの仲間に出たい、という気持ちになる。これは言わばグループピーの状態です。これはある種の新興宗教なんかで、同じ信仰を持つ人でないと心許せないというような状態と似ています。ただしこれは一時期のことであって、いつかは、ゲシュタルトの仲間が居なくてもゲシュタルト的に生きていけるようになるようです。僕は長い間役所勤めをしていたのですが、日本の役所という、最も縦社会の、非ゲシュタルト的なところでも、そう問題なく勤められるようになります。それから修行途中のことなのですが、この感情を出さない文化の中にあつて、ゲシュタルトをやり始めると、自分の感情を丁寧に扱うようになって、今まで抑えていた感情を大切にして、抑えないようになる、すると、会社とか役所の中で近所迷惑だということがあります。(笑い) 本人は生き生き

して心身症にもならなくていいのですが、まわりの人が心身症になる、というような状態があります。(笑い) 例えば、日本の勤め人のお昼ごはん、というのは、一緒に職場を出て、上役の顔色など伺いながら、「えー、今日は部長、何になさいます?、ラーメンですか、お寿司ですか」などと様子を見ながら、周りに合わせてメニューを決めていくのがふつうですが、ゲシュタルトをやった人はまずそんな生き方はしない。人が何を食べたいのか、ではなくて、今、自分が何を食いたいのか、で決めるわけです。まわりに無関係に「僕は今日は寿司を食べに行きます」というように、まさに自分の選択と責任で生きているわけです。ところが、これはふつうの人から見ると、いかにもデジタルで、わがまま、社会性未熟のようにとられる。自分では良いと思っても、まわりからは何か違和感が生じてくるのではないかと、そんなことも感じています。

その辺のところは、山田智彦というサラリーマン作家の「実験室」という小説によく表れています。文庫本になっていますからお読みになったらいと思います。主人公が企業の研修でワークショップに出るのですが、帰ってきて、家で寝ている時に、ふっと、側の妻子を見ると、まるで丸太ん棒が寝ているように感じてしまう。自分が生き生き生きているのだけれど、まわりの人々が、感情が乏しくて、まるで死んでいるような生き方しかしていないように感じてしまうわけです。「おれは生きているのに、こいつらは生きていない」と。あのへんのところは山田智彦は、実にうまく表現しています。あれはきつと、彼は銀行員ですから、銀行からの派遣研修か何かで体験したことを書いているのだと思いますが、さすがに小説家ですから、表現がよくできていると思います。

それから、長年いろいろなことをしておりますと、やはり、これはすこし危険かな、と感じる方にお会いすることもあります。実はそれは本人が一番よく知っておられるのではないかと思います。た

たとえばファンタジートリップというのがありますが、起きながら夢を見る、セラピストが導入部分だけを示して、あとは参加者が自分でイメージを追うものです。たとえば「それでは眼を閉じて、今から、船の旅に出ましょう。港を離れて、船は出ていきます」などと、導入だけをして、あとは各自が自由に旅をする、というような方法です。そんな時にまわりの人たちが、それぞれすばらしい旅や深い旅をして、中には涙を流したりしている人もいるような、いわゆるワークショップの緊張の中にあるような中で、ひとりだけぐっすり眠っておられるような人がいる。そうすると、その人はファンタジートリップというイメージ作業を避けておられるわけです。これはやはり自動的に、自分の身を守るということをやっておられるのではないかと思います。イメージワークとか、我々のやり方に乗らない人というのは、何らかの意味でご自分で危険を察知しておられる、と言えるのではないのでしょうか。ですから、我々は乗らない人は決して無理やり乗せてはいけないと思っています。それから何かをやる時には必ず、内容を説明して「やってみませんか」というお勧めはしますが、無理強いはいしない。たとえば、気になる夢を見た人が居て、この方とドリームワークをしようとする時には、「今、お聞きした夢が、あなたにとつてどんなメッセージを伝えているのか、少しはお手伝いできるかと思いますが、ドリームワークをやってみますか？」とまでは言いますが「やりましょう」とは言わない。本人が「やります」と言うまではワークに入らないわけです。これをワークの契約と言います。たいがい自分で危険を感じている人は、そんな時にあまり乗ってきません。

それから、反対に乗り過ぎる人もあります。これも危険です。ある時、ビルディングの上の方の階で、職員研修で、小鳥になるファンタジートリップをしたことがあります。「みんな可愛い小鳥になつて」という童謡で、フォークダンスみたいなことをした後で、

眼を閉じてもらい、「それではこれから私が窓を開けますから、みなさんは小鳥になって、自由に飛んでみましょう。今、人間のからだ、だんだん小さくなって、小鳥になったと想像してみましょう。羽はしっかりしていますか？ それでは私がそっと窓を開けますから、どうぞ、ご自由に飛んでいってみましょう。」と言ったとたんに、ケラケラと笑って「わあ、先生、きれい！ 川が流れてる！ きれい。気持ちいい！」と言い出した人がありました。これは危険ですね。イメージに乗り過ぎていくということもありますし、もうひとつは、この方は空の上でセラピストとふたりきりになってしまっている。職員研修なので、まわりに何十人という人がいるのに、この人は私にだけ話しかけて、ふたりきりで空を飛んでおられるのです。おびえが無いのは幸ですが、これは乗り過ぎですね。そこで私は、他の人の研修はともかく、この方のそばに行つて、イメージに乗りながら、耳元で、「そう、綺麗？ 気持ちいい？」と一言ながら次第に「元の飛び出した窓は見える？ そろそろ帰る時間ですよ。一緒に窓まで戻りましょう。今、どこにいますか？ 窓辺？ それでは部屋の中に入つて、床に足を着けて、羽をたたんで、そう、足をトントンとしてみて、床を感じますか？」と丁寧にイメージを戻していったわけです。

この例のように、イメージに乗り過ぎる人も危険だと言えます。う。絶えずメンバーの動きに敏感に、よく注意をしておく必要があります。

お話してきましたように、我々は、Tグループの山口先生と同じように、枠組みは非常にはっきりしています。まず宿泊のワークショップだとすると、はじめに注意事項をはっきりと伝えます。物理的暴力の禁止とか、勝手に帰ってしまったらとか、秘密の厳守、他人のことだけでなく、ご自分の経験も自分のグループのセッションの中のことはセッションの中だけにして、セッション外で他のグ

ループの人にも、自分のグループの人にもしゃべらないように、心に触れることはセッション外ではしゃべらないでおきましょう。休憩時間、食事やお風呂の時間にしゃべりたくなっても、ぜひ次のセッションまで待つておいてください。などと言います。そのために各セッションではセラピストが気をつけて、開始時には「セッション、はじめていいですか？」終了時には「このセッションを終われますか？ 終われない気分の人はありませんか？」ということを厳密に聞きます。とくにこれは、今のセッションでワークをした人ではなく、何もしなかった人の表情をしっかり見て、「終わっていいですか？」と、感情が動いたまま、表現されないでこもっている人がいないかどうか確かめることが必要です。ワークをした当人は案外すっきりしていることが多いのですが、まわりで見ている人の中に、怒りや悲しみの感情が発露されることが多いのと、やはりセラピストはワークをしている当の本人に気をとられがちで、周囲の人の心の動きを見落とすおそれがあるからです。その点、コ・セラピストがいるふたり担当制の時はセラピストどうしで役割分担ができるので安心です。もしも、感情的にセッションが終われない人がいる時には、その場でかわるか、もしくは、二十分なら二十分休憩しますが、休憩後の次のセッションまで待てますか？ ということを確かめます。

一日の終わりのセッションの場合は、感情のひっきりで夜、眠れない人や、寝室でべらべら心の問題をしゃべり出す人が居てはいけないので、必ずかなりしつこく「このままセッションを終わっても今晩は眠れますか？」ということを聞きます。また、多くの場合、今日のセッションはこれで終わりますが、今日一日あった、さまざまなこと、とくに心の作業は、一応、明日の朝まで閉じることができそうですか？ と問います。私の師匠の場合は、「心のノート」を閉じるイメージを使って、ワークシヨップ日誌に紐をかけたなり、鍵を

かけたりして、次の日の朝までは、心の作業は中断するイメージ作業をよく使われています。

また、ワークシヨップを終わって、解散する時には、ワークシヨップという非現実の世界、とくに頭ではなく心を使う世界から現実の世界に戻すように、五感がきちんと働いているのか点検をしたりすることもあります。「ワークシヨップでは心に向かつて感覚を研ぎ澄ましましたが、帰り道では電車の切符の値段や、電車の行き先など、現実をしつかり見なければいけません。ワークシヨップでいかに濃厚に感情のやりとりや人間関係のやりとりを経験したとしても、それはワークシヨップの中でのことであって、明日からは現実の世界で生きていく必要があります。どうぞ、ある意味ではワークシヨップのことを忘れて、現実を生きましょう。」「この顔ぶれでのワークシヨップは一回かぎりで解散して、以後、同窓会も開きません」というような話をしたりします。

もうひとつ、これは何派というのではなく、どの派でもワークシヨップに起こりがちな危険です。広島岩村さんなども常々言っておられますが、睡眠不足とアルコールの問題です。僕はそのあたり、かなり注意をして、寝る時は寝ようよ、昼間のセッションが大切だから、と言うこともあります。セッションの時も、みんながあまりにも疲れている時には、短時間の昼寝時間をとったり、数グループの場合には、スタッフミーティングで、全グループ共通の休憩時間を考えたりすることもあります。私個人としては、心の健康はからだの健康コントロールから、と考えていますので、睡眠時間は大切にしています。お酒の問題は言うまでもありません。セッション中に扱うべき心の問題をきちんと扱っていれば、お酒の上での発散ということは要らないはずだと考えています。

何も心の問題の無い人でも、睡眠不足状態や二日酔い状態ではうつ状態に近くなってしまう。そんな時にちよつと辛い話でも聞

くとすぐ涙になったり、つられて動揺したりしてしまいます。

僕は、ワークシヨップでも学生の宿泊授業でも、食事の時にはできるだけメンバーの食事量、残飯の点検をしています。食欲のないメンバーがいれば、まず心も不調と考えてもいいぐらいだと考えています。

それから、時々、セラピストとしてではなく、お金を払って、メンバーとして、リフレッシユのために遠くのワークシヨップに参加することがあるのですが、最近思っていますのは、やはりグループでは危険なことがある、それは、世話人が臨床心理の訓練を受けていない場合がやはり危ないのではないか、ということです。民間の企業の人事課長だったとか、社員研修部長だったなどという人の場合です。そんな人たちは受けをねらって、技法だけを探り入れ、その場のメンバーの傾向や状態を見ていない人があります。とくに精神科領域の勉強をしていない世話人は危険だと思います。妄想のある人や、幻聴のある人の個人面接をきちんと訓練を受けていること

## ● 集団精神療法の場合

——参加することに抵抗を示したり、脱落する患者の問題——

はとても大切だと考えています。いかにグループのことについていろんなことをよく知っていて、多彩な技法を使う世話人でも、心理臨床が分からない世話人は危険だと思います。また、よくありがちなことですが、過呼吸などのヒステリー反応に乗ってしまう世話人も危険だと考えています。親切心だけでグループの勉強をした人や、宗教など、心理以外のところで訓練を受けた人も危険です。プロの臨床家の中にもヒステリー反応を誘発しているような人がいます。このような余所での経験と、ワークシヨップ後の心理リハビリとしての面接を通して考えると、心理臨床の資格は、個人面談資格の上に、グループセラピストの訓練体系というものもしっかり考える必要があると思います。

時間となりましたので、一応このあたりで区切りとさせていただきます。

ひだか まさひろ  
平安女学院短期大学

中山 巖

### 一、筆者の集団精神療法の概要

筆者（臨床心理士）は、開放病棟のみの私立精神科病院（一五六

床）において一九七七年三月より入院集団精神療法を実施してきており、一九九三年十一月末現在で六八六セッションになっている。約八名の患者をメンバーとして選んで集団を構成し、治療期間は定まっていなく、院外作業のために集団を離れるメンバーが出たり、

退院したりした場合には、新メンバーを補充するような準閉鎖集団である。さまざまな症状の患者で構成された異質集団（アルコール依存症は除く）の男女混合集団で、筆者が毎週一回通っている金曜日の午前を定例にして、一時間開かれている。精神科医や他の臨床心理士（女性）は参加してはなく、筆者自身は集団精神療法のみに専念している。したがって、個人精神療法と集団精神療法を並行して組み合わせる方法の区分としては、個人精神療法（精神科医）と集団精神療法（筆者）を別々の治療者が行なっているコンジョイント・セラピーに該当する。初期には看護婦が交替で参加していたが、第八十七セッション以降は三か月間、第二八七セッション（一九八三年十月七日）以降は六か月間、同じ一名の看護婦が補助治療者として担当していた。しかし、第六六七セッション（一九九三年六月四日）以降は、一名の看護婦（病棟婦長）が筆者との共同治療者になり、他に三名の看護者（一名の看護士を含む）が補助治療者になるというシステムに変わり、集団精神療法のプログラムも、それまでの話し合い中心のプログラムから脱皮して、身体動作・表現やロール・プレイングを中心とするプログラムになっている。なお、筆者の病院では、看護者を含めたすべての治療スタッフが患者のカルテを読むことができるようにするために、個人精神療法や集団精神療法についてのカルテの記載はほとんど日本語である。

## 二、集団精神療法に抵抗を示したり、集団から脱落する患者の問題

メンバーとしての患者が集団精神療法に参加することに対して抵抗を示したり、集団から脱落しやすい原因としてはさまざまなものがあるが、ここでは、そのような患者に対して、集団精神療法の治療者として、どのように対応することが望ましいかについて、以下、具体的に考えてみたい。

(1) 治療者が患者の治療に関して隠し事（秘密）をもつことは、治療者―患者間の信頼関係のうえでマイナスになることがある。とくに、対人関係に過敏であり、相手にうそをつくことは不誠実であるという思いが強い分裂病患者にとっては、治療者があまい態度を示すことは好ましいことではない。したがって、集団精神療法においても、患者の言動を各自のカルテに記載していることを治療者が患者に対してきちんと伝えることが望ましい。ややもすると、治療者は、集団精神療法での患者の言動について各自のカルテに記載しているという事実を患者に明らかにしてしまうと、集団精神療法が不活発になり、建前だけでは発言されないのではないかとという懸念をいだきやすいものであるが、実際には、そのようなことはあまり心配する必要はない。

(2) コンジョイント・セラピーでの集団精神療法の言動がカルテに記載されて個人精神療法の治療者（主治医）に伝わることに對して、患者はさまざまな反応を示す。例えば、集団精神療法で発言した内容などから、状態が悪いと主治医に判断されてしまうことを恐れたり、個人精神療法の主治医に対する陰性感情などを表明したことが主治医に知られてしまい、主治医と不仲になることを恐れたりする。このような患者は、集団精神療法での自分の言動が個人精神療法の主治医に伝わることは、自分にとって不利になると考えてしまうわけである。さらに、患者によつては、集団精神療法での自分の言動がカルテに正確に記載されずに歪んだかたちで主治医に伝わり、主治医が自分のことを誤解してしまうのではないかという不安をいだく場合もある。逆に、集団精神療法での自分の発言内容が、集団精神療法の治療者によつてカルテに記載されて、個人精神療法の主治医に伝わることを期待してしまうような患者も出てくる。例えば、主



主治医が多忙であるために個人精神療法の時間が十分にとつてもらえないので、集団精神療法での自分の発言内容がカルテによって主治医に伝わり、その結果、自分の気持ちや願望を理解してもらえないことを期待したり、あるいは、個人精神療法の主治医に対して自分の気持ちをきちんと言語化できるような強さがないために、集団精神療法で自分の訴えや主治医への日頃の不満などを述べ、そのことがカルテに記載されて、主治医に知ってもらい、自分のことを理解してもらえないことを期待してしまうわけである。このようなことを期待する患者の場合は、投薬や退院についての最終決定権をもっている精神科医による個人精神療法の方を重視しており、集団精神療法はそれを補充するものであると考えてしまっていることが多い。

以上のように、治療者が異なるコンジョイント・セラピーでは、集団精神療法のメンバーである患者は、カルテに記載される内容について心配したり、期待したりすることがあるので、集団精神療法の治療者としては、患者に関する重要な情報は、個人精神療法と集団精神療法の間で相互に伝達・交換されることが治療上必要であり、チーム・ワークによる治療の一環として集団精神療法が位置づけられていることをきちんと説明し、確認しておくことが、最初の治療契約として重要である。患者が主治医による個人精神療法の方を重視し、それを補充するようなかたちでしか集団精神療法をとらえていない場合には、集団精神療法の治療者としては、個人精神療法の治療者である主治医に対しても、自分が行っている集団精神療法の目的や意義について明確にする必要がある。もし、集団精神療法の治療者が集団精神療法の目的や意義をあいまいにしたままで、個人精神療法の主治医に対してメンバーの推薦を依頼すると、主治医によって推薦理由が異なってしまうことがある。例えば、ある主治医は集団場面に慣れさせることを期待して患者を推薦するだろうし、

別の主治医は自分の個人精神療法で治療効果があがっていないような患者を推薦することがある。コンジョイント・セラピーでの集団精神療法の治療者である臨床心理士は、自分の職業的同一性を確立し、最初から自分自身が主体的になり、メンバーの人選についても責任をもつことが大切である。そして、集団のメンバーの人選の際には、患者の特性や病棟での対人関係についても十分に調べる必要がある。そのうえで、集団精神療法の治療者である臨床心理士が個人精神療法の精神科医と集団精神療法のメンバーである患者との間にしっかりと入りこみ、メンバーの問題を解決しようとする姿勢を患者に伝えるようにすれば、患者の側も、集団精神療法の自分の言動が精神科医（主治医）に伝わることに耐えるようになる。さらに、コンジョイント・セラピーでは、治療者間のコミュニケーションを定例にもつことも必要であるが、それ以上に、相手の治療者および治療態度を相互に尊敬し合っていることが大切である。もし、そのような信頼関係のもとで、治療者同士が自分の担当している患者を相手の治療者に送りこんでいる状況であれば、患者の側もそれを敏感に感じとり、精神科医と臨床心理士の立場の違いを単なる強者―弱者の関係としてとらえることをやめて、治療者間の守秘性ないし情報交換の問題についてもこたわらなくなるはずである。

なお、患者によっては、集団精神療法の治療者がカルテに記載している万年筆やボールペンの色や太さと個人精神療法の治療者のそれとが異なっているために、個人精神療法の際に主治医が開いているカルテに見える集団精神療法についての記載が目に入って気にしてしまうことがあるので、インキの色や太さをできるだけ同じようにして、目立たないようにすることも必要である。

③患者によっては、集団精神療法に共同治療者や補助治療者として参加している他の病棟の看護者から、自分が所属する病棟の看護者や自分の受持ち看護者に対して、集団での自分の言動に

ついでどのように伝達されるかについて不安をいだくことがある。すなわち、自分の言動について正確に伝えてもらえるのか、あるいは、悪い評価をされて伝えられてしまうのではないかとといった不安である。しかし、筆者の現在の集団精神療法のように、各病棟から一名ずつ看護者が参加している場合には、看護者が一名である場合に比べて、病棟間の伝達は必要であるために、このような病棟間の間接的伝達に対する患者の不安は少なくとも解消されている。このような意味では、看護者が複数であることにはメリットがある。一方、病棟で自分を担当してもらっている受持ち看護者が、共同治療者や補助治療者として集団に入っている場合には、患者によっては、自分の秘密や悪い情報について知られている受持ち看護者の前で「良い自分」を演じている姿を恥ずかしく思ったりすることがある。しかし、そのような葛藤も、「今、ここで」の気持ちとして皆の前で表明させ、全体の問題としてとりあげることによって、治療的に解決できることが多い。

(4)現在の精神科診療報酬では、外来での集団精神療法だけが点数化されており、入院患者については適用されていない。金銭面にこだわりやすい患者（分裂病）もいるので、そのことについてきちんと伝えることが治療契約としては望ましい。筆者の体験では、無料であることを患者に伝えることによって、参加意欲や治療意欲が低下することはみられていない。

(5)分裂病患者は、「他の人の話を聴くことはためになります、自分のことを詳しく知られたくはありません」、「自分のことについていろいろ質問されると、自分の嫌なところを見られているような気がして、恥ずかしいです」といった感想を述べることが多い。このように自分の過去の心の外傷体験にふれられることを嫌がる分裂病患者に対しては、今体験している集団精神

療法のグループでの対人関係をそのままとりあげて、「今、ここで」の自分や相手の気持ちを理解し、言語化させる方法が最も有効である。なお、寡黙型の分裂病患者にロール・プレイングを実施した場合、自分のことがテーマとしてとりあげられ、すると、次のセッションからは、自分が発言するとまたそのことが劇にされて自分のことに介入されたりするのではないかという不安をいだきやすいので、その点も考慮すべきである。

(6)分裂病患者によっては、「自分が黙っていると周りの人たちが白けさせてしまうように思います」とか、「発言する人がいない時には、自分が話さないといけないような責任感を感じてしまい、思いついたことを次から次へと話してしまいました。そういう時の自分は少しきつかったです」といった感想を述べることもあり、自分の沈黙に対して罪責感をいだきやすい。あるいは、寡黙型の分裂病患者の場合には、ロール・プレイングのウォーミング・アップで動作に一言つけ加えたり、抽象的なことを想像しなければならぬようなことについては苦手である。そこで、治療者としては、ウォーミング・アップのような場面では、無理して言葉を言わなくて動作だけでもよいとか、きつい時にはいつでも横にあるベンチに座って観察者になってもよいという、安全弁を与えてやる必要がある。さらに、寡黙型の分裂病患者によっては、他の患者たちが「今日の集団精神療法はおもしろかった」という感想を次々に述べた時に、自分だけが「おもしろくなかった」という感想を述べると、参加している治療スタッフから悪い評価をされてしまうのではないかとという不安をいだいて、本音を言えなくなることもある。しかし、このような患者であっても、グループから受容されていると感じるようになってくると、看護者がウォーミング・アップのプログラムで「すっきりしました」という感想を述べたり



すると、それに対して「それは、うそよ」と言って批判することができたり、ボール渡しのプログラムで最初に述べた自分の発言について「さっき自分が言ったことは、かつこ良すぎました」と訂正したりすることもできるようになる。

(7) 目立ちたがり屋で自分は特別であるという意識をもって発言するために他のメンバーを退屈させてしまうような患者に対しては、他のメンバーから、退屈している「今、ここで」の気持ちを言葉にしてフィードバックさせることが必要である。話題を独占するような傾向が強い患者や、思っていることを全部口に出してしゃべってしまうような患者にとっても、治療者側からよりも、他の患者からの指摘の方が効果的である。なお、寡黙型の分裂病患者などを傷つけるような発言をするメンバーに対しては、そのようなことが何回も続く場合には、思いきってメンバーから除外する勇氣も必要である。さらには、遅刻や欠席が多くて参加意欲に欠ける患者に対しては、個人精神療法の主治医の方から、集団精神療法に参加することの意義について時々強調してもらうことも大切である。そして、長期にわたってメンバーになっている患者は、他の患者が退院していく度に焦りを感じたり、「自分は古株である」という思いがして恥ずかしがり、メンバーから除外してほしいことを訴えたりすることがあるので、患者をあまり長期にわたってメンバーとして残留させないように配慮することも必要である。

## 文献

中山 巖「精神病院における集団心理療法に関する一考察(Ⅵ)」、

佐賀大学教育学部研究論文集、第三十二集、第一号(Ⅱ)、十三—二十五、一九八四。

中山 巖「精神病院における集団精神療法——メンバーが集団か

ら脱落する問題——」、集団精神療法、三、四十三—四十七、一九八七。

中山 巖「入院集団精神療法——コンジョイント・セラピーにおける精神科医と臨床心理士の関係——」、集団精神療法、八、二十三—二十八、一九九二。

中山 巖「精神病院における集団精神療法に関する一考察(X)

——コンジョイント・セラピーでの集団精神療法の言動がカルテに記載されることに対する患者の反応——」、佐賀大学教育学部研究論文集、第四十集、第一号(Ⅰ)、四十一—四十九、一九九二。

なかやま いわお  
佐賀大学教育学部

## ● 指定討論者のコメント

岩村 聡

シンポジストの発表は、危機感を感じさせるような事例を率直に報告された発表と、安全のための技術的な工夫が中心の実践報告とで、聞いている気持ちも違っていた。

小柳先生の報告などは、気になるケースの自殺などがグループのせいではないという話ではあったけれども、シヨッキングな報告だった。日高先生や山口先生の報告は、安全対策を持ちながらグループをやっているということで、聞いていて安心した。

私は、ここに集まった人達は、グループアプローチは、一つ間違えると危険があるぞという、問題意識をもっておられる人達だろうと思う。私達は、その問題意識や、経験や工夫を、より多くのグループ関係者に伝えて行く必要があるのではないかと。とりわけ、日高先生の話にも出てきたような、危険性を感じずにグループを主催したり、ファシリテートしたり、リードしたりしている人達に、参考資料として提供して行く必要があるのではないかと。できれば、そういう問題を経験したメンバーやファシリテーター、リーダーや主催団体の名誉を傷つけない形で、文字にして、紹介して行くことが必要ではないか、という感想を強く持った。

グループ・アプローチの危険・副作用。①それを引き起こす原因は、五つくらいあげられると思う。

一つは、批判攻撃である。ファシリテーターやグループ・リ

ダーからの批判。多くのメンバーからの集中攻撃。スケープゴートティングなどである。私が聞いた中にも、グループで批判攻撃を受けた人が、会場で他団体とトラブルを起こし、それが元で職を失った例などがあった。

二つめは、感激・興奮である。グループ体験によって過度に感激・興奮したメンバーは、冷静さを欠いた行動をしてしまうことがある。私の見聞いた中にも、グループ終了後の性的アクティング・アウトのため、社会生活に支障を来した例や、もともと病的傾向のあった学生が、終了後調子を崩して不登校に陥った例などがある。このような感激・興奮は、しばしば「よいグループ体験」の中から起こってくる。私たちは、「よい体験」にも、注意を払わなくてはならない。

第三の原因は、自我の弱さ、病的傾向である。精神病などの経験のある参加者が、会期中、異常発言が目立つようになり、飲酒がセーブできなくなったりしたため、途中で帰宅してもらった例もあるし、終了後、一時的に不安発作を起こした例や、病気を再発させて入院した例などがある。

四つめは睡眠不足、五つめは飲酒である。これらも、他の要因と複合したりしながら、望ましくない結果を誘発する可能性を持っている。

これらの危険・副作用への②予防策やそれが起こりかけているときの対応策として、私達は、次のような努力・工夫をおこなってきた。

まず、批判攻撃に関しては、グループをそのような方向にアクセレレートしないようにしたり、ファシリテーターの間などでその危険性を知らせたり、実際に批判攻撃が続いたときには、一時ストップをかけて、批判攻撃されている人に、時間や発言の機会を与えるようにしたりしてきた。

感激・興奮に関しても、そのような方向にアクセレレートしないグループ・ファシリテーションへと方向転換してきた。実際に興奮気味になっている人に対しては、落ちつかせる対応を心がけるようになってきた。

自我の弱いメンバーに関しては、そのような人に気づいて、攻撃や興奮から守ったり、その人の健康状態を見守ったりすることが大切である。そのため、そのような人を見抜いたり守ったりできる力を持っているファシリテーターを各グループに配置したり、ある程度以上の病状の参加希望者には、グループ参加を控えてもらう配慮をしたりするようになった。

睡眠不足や飲酒に関しては、夜のパーティーなどは、きまった時

## ●全体での討議

野島…これまで指定討論という形でコメントがありました、今

間に終了して後かたづけをするようにし、深夜は安静な雰囲気が保たれるよう配慮するようになってきた。

以上述べたような、重大な危険・副作用につながる③問題点の中心部分を、あえて、仮説的に提言するならば、私は、「本人の健康な自由意思や自己コントロールの力を越えた展開」が問題ではないか、と思う。各人の日常的社会生活との調和、無理のない展開、メンバー一人ひとりの主体性を大切にした運営、などがじゅうぶん配慮されたグループでは、危険・副作用は起こりにくいのではないかと思うが、いかがであろうか。

医療の世界にも「医原病」ということがあるが……。自らの成長や発展をめざしてグループに参加した人達が、むしろ逆に重大なマイナスの影響を受ける。そのようなことは、あつてはならないし、できることならば、グループというものは、参加すれば必ずよい収穫が得られる、といえるようなものに高めたものである。

危険・副作用の問題は、いいかえれば、グループの安全性・信頼性・安定した有効性の問題である。この問題は、私達グループ・アプローチ関係者が、その専門性を賭けて、一步一步解決して行かななくてはならない重要な問題ではないだろうか。

いわむら さとし  
● 広島大学総合科学部

からはオープンにしまして、色々ご質問なりご意見なりを十五分間

ばかりですが、ご発言願えたらと思います。

中堀仁四郎(南山短期大学)・・私は、二十八の時からトレーニングに関わりまして三十年になるわけでして、色々な状況を経験してきました。トレーニングをやっているながら、問題が起らないように、或いは危険がないようにするために、一つは組織の問題があります。例えば、JICEで私達がやっていたのは、班ごとに組織を作り、そこで色々な役割を決めていました。それからもう一つ、トレーナーの問題があります。トレーナー同志の不一致がありますと、余計に混乱させるというようなこともあります。それからトレーナーが一人じゃないという事が非常に大切だと思います。トレーナーは必ず二人いるという形があるといいんじゃないかなと思います。それから、トレーナーは、定期的に自己チェックをするという事が大切です。同僚のグループのオブザーブをさせてもらうとか、同僚のスーパービジョンを受けるというのがとても必要だろうと思います。それから、トレーナーの養成をしていかないとけない。JICEの初期にはですね、トレーニングにいつぱん出てきたら、次は帰って勝手にやるという人がおりました。それでトレーナートレーニングをやっていく体制を作ろうということになりました。トレーナーの教育のチャンスがあると、少し良くなるんじゃないかと思います。トレーニングの問題は、非常に大切だと思います。

野島・・貴重なご意見をありがとうございます。他の方で、お感じになった事や、質問などありましたらお出し下さい。

村久保・・小柳先生は、エンカウンター・グループの場合自殺が多いという事なんですが、観点を変えれば、自殺が自分の人生の選択肢にあるような人がこういうものを選びやすい、親しみを感じるといのが結構あるのではないかとという想像もあるんです。で、こういうグループ・アプローチが、参加しようというメンバーにとって、どういう魅力を持って伝わっているのか、そのグループ・アプロ

チに対する期待、参加しようとする人達が持つ期待と、ずっとお話ししてきました副作用や危険が、かみ合わせといいますか関係がありそうな気がしてきております。グループに対する期待とそれに応えるという事と、危険や副作用にどう対処するかという事の何かセットがあるのではないのでしょうか？

小柳・・人生の選択肢でそういうものを選びやすい人が、心理療法なりエンカウンターグループに関心を持つというのは、当然な事だと思っております。この人達がどんなに思っているのかというと、やっぱり、まとめてみてですけど、五人のうち四人は、自分の本当の姿を受け入れてほしいというニードを持っておられる。ところが、どうしても自分の別の姿しか出せない。自分の受け取ってほしい姿を出せば問題ないんだけど、自分の方で出せない。その事で自分がイライラしてしまう。その四人に関しては、甘えなかったんだなあという感じで、そういう場をエンカウンターに求めながら出せなかったという事でしよう。エンカウンター・グループの歴史の中で、多分これをやらなくなつて問題が少なくなつたというの、体にさわるという事です。それは、日本の文化に合っていないのに、アメリカからきたから、さわらなきゃいけない、みたいなそういう感じもあつたのかなあと思います。何となく自然なところでやるようになってきた。それからもう一つは、多数回参加者はおかしい、むしろ副作用と初めの頃は言われていましたけれども、自分の生活をふり返る機会ととらえていますので、一年に一回や二回は別に異常な事ではないという事で、多数回参加者を異常視するという傾向は少なくなっています。

野島・・何か異論がありますか？

日高・・ちよつと異論があります。からだに触らなくなつたから事故が減つたとは、僕たちの派では、全然思っていない。むしろ、上手に触れるようになって来た。だから、グループ外にそれが派生、

影響しなくなってきた。ゲシュタルトではよく泣いたり、感情出し切ったりしたあとで、自然にハギングが起こるわけですが、それが初期の頃、十五年程前には、ワークシヨップが終わった後も影響を残してしまい、町でゲシュタルトの仲間偶然会った時にも、男同志でハギングしてしまったりして、周りから妙に思われたりしたことがありました。最近は随分おさまっているようです。

小柳…そういうことが起こったというのはやはりアクセレイトしているからでしょうね。

日高…初期には僕たちもそれが良いことだと思っていた面があります。むしろ日本文化への挑戦とか、心身症を防ぐために、とか、いろいろ言っていたのですが、最近、我々も落ち着いてきて、日本文化になじむようになってきたのか、日本文化の方がアメリカナイズされて、僕たちがふつうになってきたのか。(笑い)

野島…他にどうでしょうか？

女性…私は、学生のグループをやっています。分裂病圈にいる子と、神経症圈の子、とっても健康な子と非常にミックスしていて、そのたびにどんな学生がくるのか全くわからないという状況で、最近自身が最も安全にできる一つの方法というか、私自身が安心していられるのは、自然のものをグループの合宿中に取り入れるという事です。水ですとか風ですとか空とか木とかそういうようなものに触れられる場所で、そういうものを味わいながら体験しながら、特に個人的なプライベートな話をするというのではなくて、その自然の中に一緒にいるとか、部屋の中で、非常に異質な人達と一緒に、そんなに無理なくいられるとかそういう感覚に、こちらが焦点を合わせながら、時間を過ごすという事ができる時に、非常に分裂病圈に近いなあという学生さんが、最初とは違って、皆の中にいるとか、それから、最初こんなのは不安だといってぶちこわそうとしていたような健康な子達も、一番後ろにいるような人の存在を認め

て座っていられるとか、そういう事がプロセスとして非常に起こっているなあという事を感じています。そういう事が感じられるグループは、非常に安定感がある、安全な、ある意味で物足りないといえるかもしれないんですけど、別の力強さとしての出会いがあるなあ、最近の学生で、特に体験しております。何かちょっと今までの先生方の言葉の中に出てこなかった、「居方」<sup>いかた</sup>みたいなものでしょうか。それは、今日の先生方は全員男性で、もしかすると、その「居方」<sup>いかた</sup>が男性と女性では微妙に違うのかなあと思いながら、一言最後に言わせていただきました。

野島…どうもありがとうございました。はい、どうぞ。

日高…なるほど、そういう落ち着いたワークシヨップもいいですが、ただ、私たちの場合、ワークシヨップ中には自然も取り入れています、最終日の解散の前には、なるべく、自然の風の音や花の香りや、そんなことには注意が向かないように、ちゃんと電車やバスなど、この世的なものに注意が向くように注意をしています。

それから、さつきちよつと言いつばなしになってしまっているのですが、長年こういうこと、ゲシュタルトとかTAとか、エンカウンターとかをやっていると、それらしくなってくるのか、各派で、それらしい人が寄ってくるのか、それとも、各派が来た人をそれらしくするのか、そんな疑問があります。岩村さんとか野島さんとかを見ていると、いかにもベーシックエンカウンターという雰囲気があるのですが、(笑い)学会でも、それぞれに雰囲気があります。例えば内観療法学会なんて行くと、いかにもそれらしいので、学会の休憩時間に廊下で会っても、インドのように手を合わせてお辞儀をしたり、という雰囲気です。反対にTA学会なんかに行くと、明るくて、アメリカの学会のような雰囲気ですね、だから、それぞれメンバーを染めるのかも知れないということは、我々常に意識している必要はあると思います。

野島…それでは、時間的にあと一人ぐらいだと思いましたが、何かありますか？はい、どうぞ。

女性…私は勤労青少年ホームの指導員で、三十才までの働いている人や失業者を含めた人を対象とした仕事をしています。一泊二日の構成的エンカウンターをしているんですけども、今、若い人達は、自分を見つめたいとか、本音で人としやべりたいという期待をもつてグループに参加しようとしています。それで、薬を病院でもらっているような人も、自分を変えたいとか言っているグループへ参加するんですね。それで、あんまり断られたというケースも聞かれないですね。私も自分がグループをやる時に断れなくて、これは引き受けるしかないと思ってしまったんです。断るとかえって傷つけそうな気がして、引き受けてしまった経験があります。結果的には、引き受けて大丈夫だった、大丈夫なようにやっただけなんですけれども、もし断った場合の事を少し、例をお持ちでしたら聞かせていただけたら役に立つかと思うのですが、いかがでしょうか。

野島…断る、断らないでどうでしょう。

日高…断った結果、個人面談でそのフォローしてずい分苦労したという経験があります。

村久保…私も学生なんかに接してまして、本音で話したいという学生は結構います。それで本音で話したいと思って、まじめな事をまじめにするエクササイズの時をもつんですが、普段そういう事をやってないものだから、かなり疲れるようです。今の方は、断ったために後が大変だったとおっしゃってましたが、僕は断るために大変だったという事で、断るために、二度三度と面接をした事があります。そういう風にして断りました。このまま受けて後でじっくり付き合うか、断ってその後付き合うか、断るために付き合うか、を天びんにかけてみて、一番私の負担も少ないし、相手にも多分ダメージが少ないだろうという事で、そのような選択をしました。

野島…なかなか白熱したところで時間が来てしまいました、企画者、司会者として思いましたのは、やっぱりこのグループ・アプローチは、ここにお並びの先生方とかここにご参加の先生方がやられますと、危険性が少ないと思います。しかし、やり方によっては、非常にインパクトがありますので、危険性、副作用があるという事を、改めて感じる事になりました。しかし、危険性、副作用については、今日も何人かの先生方がお話しになりましたように、相当気を配ってやっていきますと、防ぐことができるという事、これも強く感じました。一つはグループ構成の問題、つまり組織の問題、時間、空間の問題、スタッフの問題を工夫するという事があります。それから、もう一つは担当するスタッフのキャラクターなり、そこでの機能の仕方なりを工夫していく事でもあります。それからこれまでのグループ論ではあまり語られてこなかったことですけれども、睡眠とかアルコールとか、そういうささやかな生活上のことに思います。その辺の工夫をしていくことで、ずい分と防げるのではないかと思います。それと最後に岩村先生がおっしゃいましたように、ここにご参加の先生方は大丈夫だと思いますが、この辺の危険性、副作用という事に、殆ど自覚なしにグループを展開しておられるスタッフの方、或いは、そういう事を自分の組織の研修に取り入れておられる主催者の方、そういう方達に対して、こういうグループ・アプローチの危険性、副作用があるのだという事と、その予防なりについて、我々が少しPRしていかなければならないのではないかという事を思いました。それでは、駆け足でここまできましたが、長時間ご協力いただきました、どうもありがとうございます。(拍手)

(文責・野島一彦)

# ウォーム・スプリングスの浅い春に

## ジョージアでのPCAワークショップ（第八回）参加体験記

木村 易

雪のクリーヴランドからジョージアへ

クリーヴランドにいる間に一度はアメリカ南部に旅行してみたいといふかねがねあった気持ちだが、異常気象とかでその冬はやたらと多い雪とひどい寒さで強められていた時に、研究会の渡辺忠さんからスタッフ便りと一緒に二月のジョージア大学でのPCAのワークショップの案内のコピーを送ってもらったものですから、渡りに船と、丁度研究所でのゲシュタルトの訓練の方も暇な時期だったので、ワークショップには参加しない家内（絵を描いたり本を読んでいるからと言うので）の同行も可能なことだけ確かめて、会場のあるウ

ォーム・スプリングスという所もどうやらアトランタ市から少し南の方に下がった所らしいと調べた地図ではおおまかな見当しかつかないまま、さっそく申し込みました。

多少は詳しい内容の案内でもあるかと期待したのですが、当日のアトランタ空港での迎えの場所と時間についての電話連絡が二度ほどあっただけで、結局のところこの一枚のコピー片面に記された簡単な日程とPCAの原理についてのロジャースの短いことばの引用が唯一の手がかりで、中身については全くと言っていい位分からないまま（これがPCAなのかなと受け取ることにして）、大きな期待もなく、むしろそれが終わってからのニュー・オリンズ（ジャズ・フェスティヴァ

ルや「イーजीライダー」の場面が懐かしい）への旅行がお楽しみといった感じで二月十四日の朝の、まだ真つ暗な内に凍てつく雪のクリーヴランドを立ちました。

午後三時にアトランタ空港で、そして

午後三時、バスでオリンピックの準備で普請中というか埃っぽい感じで寒々したアトランタのダウンタウンをちよつと眺めてすぐ空港に戻り、電話で約束の手荷物引き渡し場所での旅客の混雑する中、目印のPCAと書いたものを持って現れるという迎えの人らしき人物を探してきよろきよろすること十数分、大分不安になりかけて荷物はベンチに腰掛けた

眼鏡の奥の目がえらく人なつこいアルバート（イギリス生まれで現在心理療法を個人開業している）とあとで知った）、後頭部がかなり薄くなつてちよつと神経質で、ズボンをずつこけそうな感じにはいた独身男の感じを色濃く漂わせたマーク（ソーシャル・ワーカーではないが、それ的な仕事をしているとか）、アルバートはミシガン、マークはオハイオのロンバスからとか言う、知らない土地のワークシヨップで心細かつたせいもあつて近い場所からと聞いただけでなんとなく親近感が湧きました。

旨いピッツアと大ジョッキ数杯のビールでぼくはジョージアを愛し始める

会場はアトランタから車で南へ一時間ほどの（高速を降りてから途中沿道の家の小ささ

汚さが目を惹きましたが、この州はアメリカでも最貧なのだとの席から振り返つたアルバートが解説してくれました。どこでもアメリカの大きい家に威圧され続けてきたばかりには、日本の家屋に近い家のサイズ、汚さには大変親しみを感じてしまいました。）、会場に使われたルースヴェルト・ウオーム・スプリングス・リハビリテーション研究所（自らポリオに罹患したことのあるフランクリン・ルースヴェルト大統領が、ここに出る温泉に湯治にしばしば訪れ、ポリオ療養施設を創る

のに力があり、この名が冠せられていて、それが滞在したスモール・ホワイト・ハウスと呼ばれる建物も残っていると聞きましたが、そこも温泉そのものもとうとう見ず仕舞い、施設内の松林の中に台座にのつたかれの大きな頭部がありました）は、松林に被われた赤土の台地の中の広大な（なにしろゴルフ・コースが敷地内に含まれているのですから）施設で、集まりは大体はそのセンター的な大きな中庭を囲む口の字型の赤煉瓦造りの平屋の建物、正面玄関には太い白い柱が目立つジョージア・ホールと呼ばれる、の中の玄関正面の大きな会議室で行われましたが、宿泊にはその建物の一面と少し離れたピーバディおよびハンティントンという二棟の白壁の美しい古いコテージを当てられ、ぼくらは全員ハンティントンでした。

ピーバディは本部から五分位の距離にあり、ハンティントンの方は少し離れた丘の上にあって、そこから、ジョージア・ホールまでは歩くと二十分位、車に同乗させてもらうことが多かったのですが、朝などは爽やかな空気のなか松林の間のゆるい下りの道を歩くと気持ちのよいコースで、ぼくらは二度ほど歩きましたが、アルバートなどはほとんど毎朝歩いてみたいのです。食事は朝は会議室にコーヒー、紅茶、オレンジ・ジュースと菓子パン（コンティネンタル風朝食と称するので

家内の脇に置いてうろろし始めたところで、やや離れた人混みの向こうにノート大の紙に小さな字でちよつとPCA WORKSHOPらしきことを書いたのを、お腹の下辺りにこっそり目立ちたくない風に持つてきよきよとして歩いている、日本の温泉街などで夜歩いていると寄つてきて「面白いところがあるよ。寄つていかない」と声を掛けて来るような、小柄で色の黒い五十がらみのアジア人的（ぼさぼさというか疎らに生えた黒髪と浅黒い肌からの印象で人種が特定しにくい。あとでインド生まれと分かりましたが）風貌の小父さんを発見、ヨヨ、マサカ、デモと恐る恐る近寄つて声を掛けると意外な、いい（ヒュマニスティックだ）笑顔とそうだという返事がごつごつした発音の英語で返つてきてやつと安心、するとそれをどこかで見ていたのかいずれも背中に大きなバッグを背負つた、バリツとは正反対のヒッチハイクの似合いそうな服装の四十がらみの男が二人突然出現、小父さんに何やら問いかけてこれもほつとした面持、どうやら彼らもこの時間と場所で約束のあつた参加者らしく、ここでお互いに名乗ることになって、迎えの小父さんがアリ（近辺のカレッジのカウンセリングの教授とかでやはり参加者の一人）、革のジャンパー、ツイードの鳥打帽をかぶり黒い顎ひげ、頬ひげと鳥の嘴のように突き出た鼻が目立つ、



アメリカに來た最初は期待したのですが、が片隅のテーブルに用意され、昼食は歩いて十分ほどのゴルフ・コースの中のクラブハウス、夕食はクラブハウスで開かれた二回の晚餐パーティを除いて、ジョージア・ホールにも食堂があるのですが、そこを利用する人は少なく、車で十分ほどの道路沿いにあるピッツア屋とかデリなどに出掛けました。

着いての最初の夕食も部屋に落ちついてしばらくして、アリヤマーク、(アルバートは菜食主義とかでパンや人参などを靴に詰め込んできたのを食べたりしていた模様)ジョージア大学の教授のディック・ページという人やかれの学生たち幾人かが行ったのもこのピッツア屋で、長いテーブルに向い合って座り、皆で分厚く直径四十センチ位のかいピッツアを何枚かと大きなピッチャー(ガラスの水差し)に二杯ものビールに分け合い、賑やかにやっているとなにやらジョージア版PCAの洗札をさっそく受けている(日本でワークシヨップやコンパの雰囲気も蘇って懐かしい)実感がビールの酔いと一緒じわじわと湧いて來ました。ディックという人は、あばたとかごつごつした砂岩を削ったような感じの顔、背は高くないががっちりした体格で、色褪せたジーパンにシャツ、大学の教授というよりちょっと西部の牧童と言った方が似合いそうな人で、ゲシユタルトにも関

心があるということから、ぼくがその訓練を受けているということで初対面でしたが少し話ができました。

定刻に人は集まらず、ぼくはクラインの壺に迷い込んだ蠅のような気分

大分ビールが回ったところで会場の会議室に戻ったのですが、プログラムにある開始の時刻七時半になっても一向に人は集まらず、ぼつりぼつりとやってきた連中も顔見知りらしい数人が固まって廊下だとか後ろの方で立ち話をしたり、輪に並べた椅子のここかしこに座って隣りとぼそぼそ喋っているという風で、一体どうなっているんだろうと思っていると、始めようという合図もないまま、いつしかどうやらその輪の空いている椅子が埋まって、二十数人位かの顔が一応揃った感じになったのは八時半近かったでしょう。

主催者らしき人の(大体このワークシヨップは案内によれば、ジョージア大学のDepartment of Human Development Services of College of Education内)のThe Person-Centered Studies Projectの提供ということで参加費の支払い先はそこになっていて、郵送先はジョージア大学内のJerald D. Bozarth, Ph. D. になっているのでかれが主催者と考えていいと思うのですが、単なる事務局だと言えないこともないわけです。スポンサーシヨップとい

う項には、このプログラムはジョージア大学The Person-Centered Studies Projectのスタッフの呼びかけによるとありました。)の挨拶も、事務的な案内も日程の説明も一切なし、案内を見てもファシリテーターのような役割の人がいるのかいないのかも一切分からないままです。空港に迎えに來てくれたアリも参加者の一人ということでしたし、電話で出迎えるの手筈を整えてくれたブレンダという若い中国系の女性も大学院の学生で、このワークシヨップの事務的な仕事をやっているとはいふものの、始まってからは事務局というより参加者の一人としてそこにいるだけのように見えます。もともと宿舎や食事の送り迎えを彼女の車でしてくれるなど幾分気を使っている風ではありましたが、それも仕事としてやってきているのか個人的な親切なのか一向にはつきりしませんでした。(彼女の名前もリストに他の参加者と全く区別なく載っていました。)

ジェロルド(主催者のJerald D. Bozarthで、あれがかれだとアリが教えてくれたのですが、六十代でしょうか、白髪、病氣でもしたのか疲れているような顔色の冴えないのが目につく、面長の柔和な笑顔の人)も幾分は時間に正確とはいふものの時間通りに現れるというわけでもなく、來ても何か特に言うわけでもなく、からだを斜めに脚を投げ出すようにし

て椅子にもたれて、近くにいる誰かとぼそぼそと喋ったり黙っていたりというわけで、かれの名前も他の参加者と並んで載っているだけです。ただ、ワークシヨップが終ったときにくれたというか、部屋のすみのテーブルに載っていたのを勝手にもらって帰った単位認定証(―)には、かれがこのプロジェクトのディレクターとして挙がっていました。(かれも参加費も払っていたのだからかとあとでふと思ったことです。)このワークシヨップのこの辺りの構造を考えていますと、パーティーへの立派な招待状をもらって屋敷に入ったけれども、そこにいるのは招待された客ばかりで、招待した主は実在せずあなた自身が招待主でもあるという事実を知らされるのに似た、外部が内部で内部が外部である奇妙に捻れた有名なクラインの壺の不思議な空間に迷い込んだような奇妙な眩暈感に襲われてしまいます。

## アメリカで初めて経験した十五分の沈黙

この最初の夜のコミュニティは沈黙、実際には十五分くらいでしょうがぼくにはひどく長く感じられた沈黙で始まりました。それまでザワザワ話し声が続いていたのがいつの間にか途切れて落ちる沈黙。これがなんとなく開始の合図という感じで、こんな場で珍しく

ぼくが口火を切る羽目になったのはビールのせいも大分ありますが、この徹底した構造の欠如への戸惑いと興奮(二十年以上前に初めて出た日本でのカウンセリング・ワークシヨップ体験が蘇りました)、PCAというところでどこからか知らないけれどもこれだけ人間が集まったという事実への感動やら嬉しさ、一体どういう人たちなのかという好奇心、また逆にロジャースの本などで述べられていた百人もの人が集まったというPCAワークシヨップに比べてこれだけの人数しか集まらないのかという一抹の寂しさ、そんなこんな複雑に混じり合った気持ちがよくに口を開かせたようです。

名前や日本から来てクリーヴランドでゲシュタルトの勉強をしていること、日本でもPCAに関心をもって活動しているグループがあること、このワークシヨップについては日本の仲間から教えられて参加したこと、PCAに関心をもつ人たちに会えて嬉しいといった常識的な自己紹介的なことを拙い英語で喋ったつもりです。これはアメリカに来て自分が経験した一番長い沈黙だと言ったら、大きな笑いが起こりましたし、ロジャースが死んでみんなどうしているのかなと思っていましたが、こうやってここにいるみんなの顔を見てPCAの生存者 survivors に会えたように(かなり多くのProjectionが働いています)

嬉しいと言ったときには、やや複雑な笑いの波紋が広がったようなのである程度は通じていたのだろうかとはくは思っています。

そのあと南フランスから来たセラピストの初老の女性ミシェル、(ぼくや家内に随分親しみを感じてくれて、一番と言っているほど一緒にいて話しをする機会がありました)、少し長めの茶の混ざった金髪、ちゃんと前歯があるのに無いうように見える口元が童女のように愛らしい人で、ハルコ・ツゲにどこかの集まりで会ったとその印象を懐かし気に語っていました。)がぼくのことを受けて参加への期待を喋り(フランス語なまりがあつて遠くで聞いているとかなり分りにくい)、マークがPCAやセラピーなどについて質問やら知的なことを喋り、また長い沈黙。そこでまたぼくが、ぼくは英語がよく分からないのでミシェルやマークの言ったことが十分には分からなかったが、かれらの声や表情からはかれらにとって大事なことを言っているらしいことは伝わってくる、ここには英語の分かる人話せる人が大勢いるのだろうかからかれらに伝えて欲しいなどと、あとで考えると恥ずかしいような余計なことを言い(どうもビールのせいです)勿論誰も何も言わずしばらく沈黙があつて、そのあと、ムーヴメントやダンスなどをやっていてPCAは初めてというベギーという女性がこういう始め方が

P C Aの一般的なやり方なのかという質問をしたり、その夫の顎ひげの立派な中年のジム（セラピストで開業、成功しているとかアルバートが言っていました。この男、落ち着いた常識のありそうな顔つきだったけれど、このあと宿舎で夜の十一時過ぎだというのにサキソフォンをひとしきり高々と吹いたのには驚きました。色々な連中がいるぞと覚悟をさせられた次第。）も発言していました。沈黙が少し減って、その間にいつの間にか居なくなるひともいたりして、このコミュニティはいつまで続くのだろうと黙っていると十一時ころになって誰が言うともなく（言ったのかも知れないけれどぼくには分からなかった）全員がそろそろと席を立ててその夜は終わることになりました。

アリに乗せて貰ってハンティントンに戻り、ディックたちとビールやかれのところにいる台湾からの女子留学生のチャオチャオがウォッカと薬草から作ったという、紹興酒風の酒を大分飲んで、こんな具合に夜遅くまで切りなく床の上やソファアの上でとぐろを巻く感じの酒の飲み方は、クリーヴランドなどではこれまで一度も経験したことのない、日本の場合と大変よく似ているやり方で興味深い、このP C Aワークショップとこの酒の飲み方は何か関係があるのだろうか、それともこれは南部風なのかなどとアリに喋ったり

して、アメリカという国を全てに亘ってかなりクルルに眺めているらしいかれの見解をいろいろ聞かせてもらったりして、まだまだ寝そうにないかれや他の連中を残して部屋に戻ってベッドに入ったのは一時過ぎでした。スケジュールはあるような無いようなままワークショップは進行する

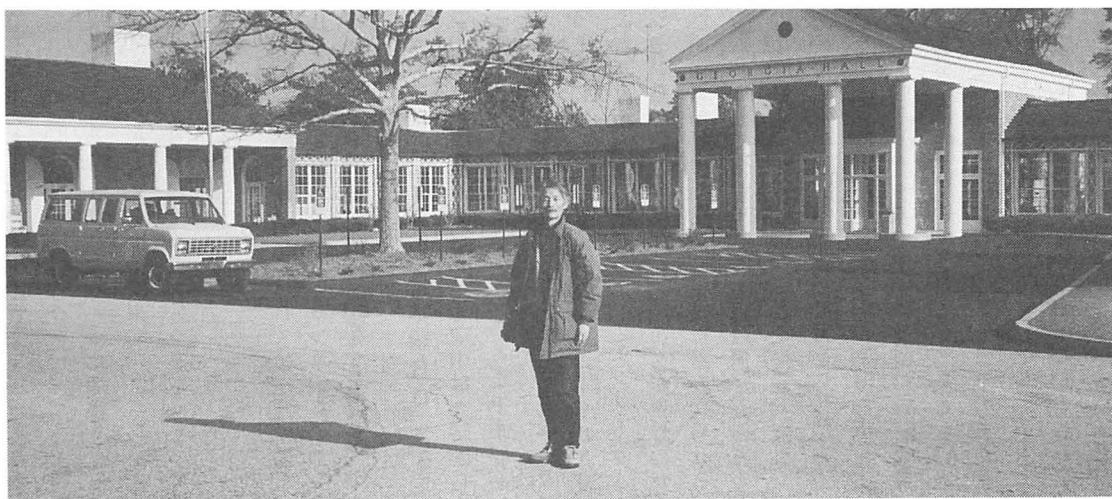
翌日は、二月十五日火曜日。さすがに中国の薬用酒だからか二日酔いもなく、またアリの車で九時の開始時刻近くに会場へ、昨夜同様にはづりばづりと集まってコーヒーを飲んだり菓子パンをつまんだりして、始まったという感じになったのは十時でした。開始の徴は例によってある程度出席者が揃ったのあとの自然に生じる沈黙。よくコンサートに行くとオーケストラのメンバーが一人二人と舞台の上に自分の楽器をもって現れて席に着いて、思い思いに自分の楽器の音を調整したり、隣の楽器と合わせたりして、その音がまるで揺らめく香の煙りのように立ち上り混ざり合い溶け合って微妙な不仕儀な音の空間を創りだし、それがいつか次第に静まって沈黙が落ちる。日本のワークショップでも経験することでもあるのですが、ここでのコミュニティの始まりがおなじなのがとても味わい深く面白く感じました。

案内にはこの日のテーマ（トピックス）は

「カウンセリング」となっていました。これを参加者がどの程度意識しているのかはよく分かりませんでした。影響していたような気もしますし、殆ど無関係に話していたような感じでもあります。昨夜遅く着いたという、カリフォルニアのビッグ・サーからの、ジャック（白髪、八十近い年齢を言っていました）が小柄でしっかりしたからだつき、日焼けして眼光鋭い目が時々優しさや微妙な表情を見せるのがよくには魅力的でした。この時頃は不勉強で知らなかったのですが、もう引退したんだというこの人にマサチューセツから来たマイケルというこれも白髪で血色のいい人、大学にいたけれどもいまはそのときの学生をパートナーに仕事をしているのだとそのパートナー自身の口からあとで聞きましたが、そのマイケルがこのあといつの集まりであったかは忘れましたがグループの中で、あんたは書く才能があるのだからもっと本を書いてほしいなどと言っているのを聞きました。このジャックとは話をしてみたかったです。これが殆ど機会がなく、コーヒーを飲みながらほんの少し立ち話をしたとき、日本にも昔行ったことがあるとかで、かれからも柘植明子さんの名前が出てとても懐かしんでるのが様子でよく分かりました。」という人がジェロルドに声を掛けて、少し顔色がすぐれないようだけれどどうかと親しいらしい挨拶があつて、

それにジェロルドが何かにもやもにや答え、  
というのはこのひとの南部風(?)の発音は  
これまた聞き取りにくいのです。そのあとま  
たマークが何か知的なことを平板な口調で、  
しかもしつこい感じで喋っていたような気が  
するけれど内容は殆ど覚えていません。この  
人はだれかのカウンセリングの講義でこの  
ワークショップについて紹介されて参加、P  
CAのワークショップは全く初めてであると  
あとで分かりました。ペギーが、自分はここ  
は初めてでPCAが何かも知らないし、ムー  
ヴメント・セラピーに関心があつていまま  
は構造化されたワークショップの参加経験が  
主だが、ここには何か他の人たちは皆知つて  
いて自分だけ知らないルールがあるのかと  
ジェロルドに質問、かれがそんなものはない  
といったことをまたもにやもにや答え、彼女  
は一向に釈然としない面持という場面もあり  
ました。この質問はよくには面白く思えたの  
ですがそれで終わってしまいました。

この午前中のコミュニティはハーモニー・  
ダイヴェロップメント(調和の発展)と名付  
けられていました。こういう恰好い題の付  
け方ってうまいなーと思いますね。アリはこ  
ういうスケジュール内容は対外的に必要なだ  
ら題が付けてあるのだとかちよつと皮肉な感  
じで言っていました。話しかけるとかれは何  
度もこのワークショップに参加しながらも常に



一定の距離をとってインド人の目でクレイ  
ジーなアメリカ人のやることと眺め笑って  
いる風のところが感じられ、その屈折したと  
ころがまたよくには面白く思えました。この  
ワークショップに参加すると、カウンセラー  
資格の保持に必要な継続教育として四・三  
単位(四十三時間)が得られることになって  
おり、アリのことはその辺りと関連するの  
だろうと思います。スケジュールが午後は一  
時から三時半までプレゼンテーション、そ  
のあと五時まで小グループとなっていたの  
を逆にしてプレゼンテーションが三時半か  
らということになりました。この辺りは午前  
の終りにジェロルドが喋っていたような  
感じがします。小グループといってもコ  
ミュニティと別に何が変わるというわけ  
でなく、ただ集まりが悪かっただけのよう  
な感じで、マークがこのグループはセラ  
ピー・グループなのか、そのためにはグル  
ープのサイズが大き過ぎるのではとか、  
グループの性格、目的を問題視して、そ  
こから *break* というようなことが話題に  
なって喋っていたと多くのメモにはあり  
ますがよく覚えていません。マークとい  
う人はこういう大真面目な知的な議論を  
飽きずにするのが大好きな人のように  
思いました。プレゼンテーションはビー  
ターという人の学習不振児についての話  
で、話のあとに見せてくれた市販の  
ビデオが、いかに子供たちの学習が多  
様な



情緒的（例えばその場の心理的に安全感の欠けた、急ぎたてたり、脅かす雰囲気とか）、あるいは認知的な条件（教師がある視覚的な教材を見せても子供たちはそこに別の思いがけないものを見ている可能性があることなどを、ゲシュタルト心理学に出てくる図と地の図形のようなものを例にしながら示すなど）

によって強く障害をうけるかということ、大人たち（受講生である教師や治療の専門家たち）に実感させる体験的な学習場面を記録したものでこれはなかなか説得的でよくとって面白いものでした。プレゼンテーションはこのワークショップのテーマに適切なものを参加者が提供することが案内で奨めていましたが、ある程度事前に事務局との間で申し出や打ち合わせがあつて決まっていたようにばかりには思われました。あとで出てくるカウセンシングのデモンストレーション以外はコミュニティの場合などでそのことが特に話題になった記憶はありません。この辺りは日本のワークショップのコミュニティがスケジュール作りに多くの時間を割くのは違い実際的なかとも思いましたが、またコミュニティ自体の徹底した構造化されない運営と異質で、未消化な感じもよくには残っています。

この夜はビールとワインのあるパーティーがゴルフコースの中にあるクラブハウスであつ

て、食事のあと若い連中は音楽を掛けて踊ったりしていました。ぼくらはコテージに戻ってアリやディックたちとまた酒盛り、そのうちに学生たちも戻つて来て、こちらが寝てからもかなり遅くまで大分うるさくやっていました。

真面目に結婚が論じられ、午後はビールを飲みながらのプレゼンテーション、夜、ぼくはアリと再び話をする

三日目、二月十六日水曜日は Family Development がトピック。午前中は九時から十時半小グループで、そのあと正午までが Demonstration for Harmony Development ということになっていましたが、みんなの出来たのが十時過ぎくらいで、デモンストレーションらしいものは無く、マークが自分の女性関係や結婚の問題で、結婚に踏み切らせるもの、そこで信頼できるものは何か、皆さんのご意見を伺いたいことを提起、女性たちが幾人もいろいろ忠告、助言やら体験みたいなことを喋って、ぼくはいい加減面倒臭くなっていると、一人の中年の元気のいい女性が自分は結婚していて子供もいて夫もいい人なのだが、本当に愛している人は別の男だということがますますはっきりしてきている、結婚を決心したとき自分の頭で考えていた最善と思われる選択は間違っていた、ハートへ

の裏切りだったというようなことを隣の男の手を握り締めて涙ながらに語るといより声を大にして、週刊誌の表現を使えば激白するというような場面もあつて、ぼくにはその語り方が自己陶酔的に見え多分に白けた感じで聞いていました。マークは興奮したのか大分顔を紅潮させて時々質問を挟んだりしていました。あとでアリに意見を徴したところ、この議論については離婚して今度は慎重に考えるとか言っていた彼は大分冷やかな見方をしていたようでした。

午後はコミュニティのあと、三時半からハインテンソンでディックがいつものようにビールの小瓶をラップ飲みしながら「非構造的グループのプロセス・ゴール」というプレゼンテーションをして聞く方も飲みながら聞いたのですが、ぼくには神学者ポール・ティリツヒの神あるいは自然の中に作用する三種の力（force）、愛（love）、力（power）正義（justice）という理論を借りたグループ・ダイナミックスやグループの発達過程の新しい概念化の試みが、特にグループにおける justice という概念の導入が目新しく、ピアジェなどの子供の道徳的観念の発達についての研究なども連想され示唆的で面白く思えました。これはもうじき出るはずの本の一章になるとかは言っていました。

夕食はまたピッツァ屋に繰り込み、夜はコ

ミュニティで十一時まで。帰ってまた酒。アリとディックは仕事で明朝帰るとのこと。このワークシヨップは前半後半二部に分かれていて一部がこの日の午後で終り、今夜が二部の開始ということになっているので、帰る人もいるし、新しく来る人もいるわけですが、こうしたオープンな構造は帰る人、残る人、

あとから参加する人、色々な参加者それぞれの内面と参加者の間に複雑な揺れ、ダイナミックスを引き起こすなど自分の経験から感じました。アリからは空港までの出迎えに始まって色々世話にもなり、東洋人同士二人だけでかなり話したので別れることには淋しさがありません。インドで八歳のころから十年寺院で坊さんとしての修行をし、サンスクリットやパリー語も学んだとか、アメリカに来て電気工学とか幾つかの分野の勉強をした挙げ句、カウンスリングにたどり着き、ロジャースやPCAに興味はあるものの全面的に傾倒しているわけではないとか、インド思想と関連させて本を書いているとか、アメリカ女性と結婚して子供もいるが結局離婚したとか、年取った母親がインドで暮らしている数回会いに帰ったとか、ひどい自動車事故に出会い全身の骨が金属でつないであって障害者の証明書を持っていて、空港の金属探知機で引っかったときはそれを見せるとか、コミュニティの中では全く喋らず、人々を脇

からというか斜めからというか観察して面白がついてあとでその観察や感想をばくに喋るといふ風で、かなり屈折した面を伺わせる面白いそして面倒見のよいひとでした。このあとマイアミの方の大学にカウンスリング学科の設置基準の監査のような仕事で行くのだと言っていました。

### セラピーの保険等の問題が論じられ、夜は同宿者間の葛藤も

四日目、二月十七日木曜日、この日のトビックスはEBS、会場までこの朝も送ってくれたアリと別れの挨拶、かれの姿を写真に収められなかったのが心残り。ディックやベギーたちは直接出発したらしく姿を見せませんでした。コミュニティ (Harmony & Transition Development) と銘打たれている) が始まったのは十一時ころ、ジャックが、セラピーの保険制度の問題から料金の問題についての議論の中で、自分はいまは無料でクライエントに会っていると発言、ギリシャから来たイオシフィデスという人 (翌年夏にマケドニアのオリンポスの山の麓の海岸でPCAフォーラムを開くという話を、このひとがあとで発表していました。) がそれは危険だとして批判するなど、個人で開業しているアルバートも盛んに発言していました。ぼく自身は、ぼくらの間でよく問題になるワーク

シヨップの妥当な参加費の額の問題とか、インドのグルが弟子から花や果物など受け取るだけとか言った話を思い出しながら聞いていました。だれだったか忘れましたが中国ではとか、これと似た話しを例に上げていました。アメリカのPCAセラピストにとっていま保険の問題がからんでこの料金の問題はかなり刺激的な話題のようであり議論は盛り上がっていたようでした。保険制度がセラピーに対して淘汰圧として強く作用している模様です。

午後的小グループは一時間遅れで始まり、余り盛り上がった記憶はありません。四時から芸術療法のプレゼンテーション、どこかの大学で教えているというまだ若い女性がプレゼンターで、有名なアルハンブラ宮殿などのモスリムの寺院の床や壁、天井などを飾っているモザイクの複雑を極める抽象デザインを美しいスライドで見せてくれて、それが円、六角形、三角形などのごく単純な基本形 (matrix) から生み出され構成されることが示されたあと、紙の上に印刷された正三角形だけが選んだ二色のマーカーで塗り分けて、自分のデザインを作り出すというエクササイズをやりました。これは最高に structured など皆面白いと勝手なことを言ったり、作品を見せ合って、やり方がのみこめないで全

然教えられたやり方に従っていない作品に笑いころげたりでこのワークショップの中では一番皆が子供に返った楽しい時間でした。全く同一の単純なマトリックスから一人一人が全く違った美しいデザインを産み出す事実は、全員の作品が壁に展示されたとき実に瞭然としていてぼくにはなるほどと唸らされるような経験で、またどこかで紹介してやってみないなと思ったことでした。

夕食のあとスケジュールでは何もなかったのがコミュニティとなり、九時から十一時まで。ハンティントンに泊まっている若者の間からその居間でのテレビをめぐる葛藤が話題として出て、テレビのあるその居間では折角の機会なんだからみんなで話しをしよう、そうすべきだというグループとちょうどテレビでやっている冬季オリンピックの放送をどうしても見たいという少数派（幾人かの女子学生）が昨夜揉めたりと分かりました。ただ肝腎の相手の女子学生たちがいないので直接の話し合いにならず、そのことを問題にする発言があったり、しばらくその話が続きたあと（日本の学生が合宿などすると必ずと言っていいくらい出てくる集団と個人の葛藤の問題との類似性が、個人を尊重するアメリカの若者もこうしたことで揉めるのかという意味ではくには大変興味深かったのですが）、このワークショップの最初からステイヴと

並んでよく発言していた大柄で陽気な顔のダヴという男が、コミュニティなどの開始時間の厳守の問題を提起、いろいろと議論が出ているうちに、イギリスから来たキャサリンが、だれかに何か言っていたが笑っているのは何だと突然横から攻撃して、これが応えたのか黙ってしまつて、かれをサポートする声も幾分はあつたものの続く話しも余り出ないままこの夜は散会しました。（そして翌日は黙って帰ってしまいました、そのことがまた最終日に話題になりました。ダヴは牧師だとかあとで聞きました）この集まりでぼく自身は、日本でPCA的なワークショップに参加して二十数年、かなりの自分の強迫性があったと信じていたが、ここへ来て依然として強迫的にスケジュールの時間を守って行動し続けている自分を再発見した思いであること、いかにそれから脱出することが困難か、依存性から脱して自立し、創造的にいまこそ自分の本当にしたいことをするために、どれほど欲求不満が必要なのだろうかと痛切に感じ考えているなどと喋りました。

アルバートが爆発して、ぼくはユダヤ人問題を身近に感じる

五日目、二月十八日金曜日、トピックスはGroup Process、昨日の時間厳守論議のあとでどうなるか興味をもって出かけましたが、み

んなさずがというか立派というか、相変わらずの集まりぶりでした。午前のコミュニティ（Reflections of Discordance, Harmony from Personal Empowerment）では思いがけずアルバートが大爆発。前の晩ぼくが寝てしまったあと若者バーティー・グループと一悶着あつたらしく、若者グループが音楽を掛けていたラジ・カセのコードを引き抜いて部屋の外にほうり投げるといふ激しい一幕があつたということなども話しのなかで次第に分かつてきたことでした。そのことをかれがまだその怒り醒めやらない感じでコミュニティに出したわけです。

丁度バーティーをやっている大広間の下に寝て毎晩の騒音に頭に来ていたかれが正当防衛と信じる行動に出たわけですが、そこにはイギリスに暮らして高校生の頃にユダヤ人として苛めに会つたという外傷的な経験があり、その経験ともつと広げてかれの親族にも被害者がいたホロコーストの民族的な経験とかが重なり、夜半すぎまでの音楽はかれにとり我慢できない暴力だったようです。ただ、学生たちからすればいきなりコードを引き抜かれた自分たちこそ被害者だという気持ちがかなり強く、学生がわのその場での中心的人物だった黒髪のコリンが、アルバートにその問題をコミュニティの場に出してくれたことに感謝すると冷静に言ったことから、ぼくだ

とか幾人かからその感謝ということばにひっかかるといった発言が出て、ぼくはアルバートのすぐ隣に座っていたものですから、激しい興奮で手をぶるぶる震わせているかれの背中をさすったり、深い呼吸をするように声を掛けたり、ぼくとしては大分かれと一体化した感じもあってサポートすることにつとめました。

メアリー（あとで大学で教えているセラピストでグループ・ファシリテーターとしての経験もあると聞いたのですが）という女性が、自分はいま恐怖を感じている、逆にアルバートから脅かされ苛められているような感じがすると発言、学生の一人はホロコースト云々にまで話を広げるならもう聞きたくない、昨夜あったことから離れ過ぎるなど、騒然とした感じで、そんな中でジェロルドが突然どこかにあった四角い鏡を持ってきてアルバートに渡して自分の顔を映して見てみるという、いやに臭いことをするんだなとぼくには意外な感じで、アルバートが鏡を床に叩きつけるかするのではと一瞬想像したりもしたのですが、かれは意外におとなしく自分の顔にしばらく見入っていました。それから少しづつ興奮が収まって、あとでかれが言ったこととしては、鏡の中に激昂していたときの自分の父親の顔を見、またもう子供ではない大人としての自分の顔を見、過去の経験と現在を区別

する冷静さを取り戻せたという体験があったようで、そのあとジェロルドに感謝したり、学生との間にも、特にコリンとの間にも笑顔や和解のことばが交わされるということがありました。夜中の騒音という問題から世代的な対立だけでなく、人種差別、ホロコーストの歴史的な経験までが呼び出されるところに国際的な今回のPCA体験のハイライトをぼくは感じました。

### 池の畔でのパンとワインの「聖餐」のあと芸術的かつ大道芸的パフォーマンスを楽しむ

山場を過ぎたからなのか、疲れたのか会場で待ってもこの午後はだれも来ず、定刻に来た真面目なマークやミシェルと家内も含め四人とも状況が分からないままさんざん待つて、そのあと何やらみんなどこか近くにある湖水だか池に行く計画があるらしいという情報伝わって、ピーバディまで行き、そこにいたジェロルドも交え十人くらいと合流してぶらぶら近くの池の畔まで出かけ、そこでパンを大きな塊からめいめいがちぎって食べ、葡萄酒の瓶の回し飲みをしたりしました。小さな湖の岸でパンと葡萄酒をみんな飲み食べたところから、新約聖書的な連想が働いて、もしかするとあれは一種のコミュニケーションの象徴的儀式だったのではあるまいかなどと考え

てみたりもしましたがこれは少々深読みで、単に午前のハードな話合いから気分転換の散策だったような気がします。池の向こう岸にある建物を指して来年のワークショップの会場にはそこを使う予定とかジェロルドが言っていました。

そのあとハンティントンに行き、葡萄酒がまた少し出て啜りながら、ブラジルからの女性ルシラ（ジョン・ウッド夫人）のアート・パフォーマンスと銘打ったプレゼンテーションがありました。これは芸術療法などで用いられる、一つの紙箱の外側と内側の壁と空間を写真、絵、絵の具、布、毛皮、ビーズ、石、木、人形などさまざまな材料を使い、塗ったり、貼り付けたりして飾り、自己の様々な内的世界を比喩的にあるいは象徴的に表現するという技法を大掛かりにしたものと言えます。フーテンの寅さんの持つているのに似たトランクを開けてイーゼルを取り出して組み立てることから始まりましたが、そのてっぺんにこれまた取り出した自分で染めたカラフルなパラソル風の折り畳傘を取り付けて（取り付ける道具の一つが二十センチもある大きな木製の洗濯挟みだったりで、トランクから何か出される度にどよめきや笑いが起き、お次に何かが取り出されるかといった興味が唆られます。）そこに幾つもポケットを付けた布製の壁掛け風のものを吊し、そ



のポケットにはIDと書いたカードが一枚ずつ入っています。それから腰のベルトには幾本ものケースに入った大きな扇子をぶら下げます。どこかガマの油の膏薬売りのような香具師か大道芸人を見るような面白さがありました。ルシラの強いポルトガル語なまりの英語がぼくにはよく聞き取れなかったのですが、IDカードには主婦とかオートバイ乗りとかセラピストとか彼女の幾つかある Identity とその説明が書かれていて、それに合わせたこれも手染めデザインしたシャツかヴェストのような衣装が掛け並べられます。また扇子にもそれに対応する形で色々な言葉や絵や模様が描かれていて、しかも一つの扇子が開き方で四通りに変化し、さらに畳んだのを横や縦から見るとまた別の文字や模様が見え、蝶番の位置を変えると扇子の開きが逆に成り別の模様が出現するとか複雑な仕掛けになっているのに驚かされます。銀色の髪の下の額に浮かぶ汗をこの扇子で時々あおいだりしながらの大熱演でした。

そのあとトランクの四隅に脚を取りつけて小さなテーブルにして、その上に最後に並んだのが大小幾冊もの書物で、それぞれが創世記、砂の書、男性性、女性性などと題されていて、創世記は旧約聖書の天地創造の記述と宇宙物理学のビッグ・バンの最新の理論とが対照的な形で記され、描かれた五センチ

四方くらいのもので、古くからの仕掛け玩具で、ぶら下げて持ち方を変えると次々と裏表がひっくり返って模様が変わるあの仕掛けで、次々と創世の段階が現れ消えます。ボルヘスの短編集と同名の砂の書というのは十五センチ四方大で、表紙を開けると箱になった中に細かい白砂と櫛が入って、砂の上に波目模様などを描いては消えるようになっていきます。人間の思想、学問、文学などの作品が全て砂の上に描かれた模様のように時間の風の中に消えていく(いった)のを示しているように、この砂の書が特にぼくには印象的でした。男性性の書は折り畳まれた頁を開いていくと蛇の姿が描かれていて、余白に神話が詩のような言葉が付されています。書物群は全体としては個人的なイメージや神話的、元型的なイメージが扱われている印象です。ルシラの手によって小さなトランクの中から次々と取り出されて、繰り広げられる手品のような仕掛けとイメージの豊饒な流れにそこに居た一同すっかり酔わされてしまいました。はげ頭の気むずかしい顔をした夫のウッド氏がこの間そばにずっと付き切りで細君を懸命に手伝っている姿にも微笑ましいものがありました。ここまではできないにしても、こうした作品を創ることができたらなという気持ちを強く唆られたパフォーマンスでした。

夜はパーティーでしたがぼくは写真を撮っ

たぐらいい取り立てて何もなく特に記憶にありません。

カウンセリングのデモンストレーションがあり、PCAについてのウッド氏の話を聴く

六日目、二月十九日土曜日、トビックスは Therapeutic Applications。午前の集まりでぼくは、この日になってまた新しい参加者が加わることが、ぼくにとつていかにエネルギーを要してしんどいことか喋りました。最初から大オープン・グループですから、小グループの場合のような凝集性の高まりは見られませんが、それでもある程度のグループ性ができたとところでの新しいメンバーの参加はかなりの葛藤を生じさせます。ぼく自身はかなりの欲求不満耐性の限界を感じていましたが、この気持ちを曲りなりにも表現できて幾分楽になりました。

マークが Client-centered Therapy の實際を知りたいと言ったことから、ジェーンというペンシルヴェニアの大学でカウンセリングを教えている、黒髪の三十代くらいの女性が午後デモンストレーションをするという話になりました。アルバートは同じ時間帯に別の場所で何かセラピストについてのトビックスで話し合うグループを提案していました。これも成立した模様ですが内容については聞

いていません。この朝は、珍しくジェロルドが用意したスケジュールの紙に時間、場所、トピックスなどが書きこまれました。ぼくはハンティントンでのジェーンのデモンストレーションに出ましたが、若い学生が四、五人、マーク、ぼく、などの少人数が集まりました。ブレンダがその場でクライエントになることになりましたが、二人の声が低くてぼくには聞き取りにくく、そのうちに眠くなって殆ど内容は覚えてません。印象としてはジェーンの動きは椅子に深く腰掛けて頬杖を突くような姿勢で、じっくりクライエントについていくスタイルのようでした。終つての質疑でも自分の関心から質問することはしないと答えていました。

ぼくは（よく聞いていないのに質問するのですからなかなかの度胸だと自分でも思いますが）クライエント中心療法からPCAへ（分裂病研究やエンカウンター・グループへの強まる関心以降）のロジャースの変化、セラピストの自己開示や積極的なフィードバック、コンフロンテーション、などの技法的な変化が、グループだけにとどまらないで、セラピーにおいてもクライエントからパースンへという見方の変化をも含意し、セラピーがセラピストとクライエントというよりパースンとパースンの間のより対話的なものとなる可能性を示唆しないかなどを問題にしてみま

した。ジェーン自身はその可能性を認めつつそこにはクライエントの問題もあるので自分のとつているアプローチではないと言っていました。このあとジョージア・ホールに戻り、ジョン・ウッドのPCAについての展望的な話。ロジャースが四十年代からすでにapproachということばを使っていたことを取り上げて、初期からClient-centered therapyを経てPerson-centered approachに至るまでロジャースの考えに変化はないというのがかれの主張でした。と同時に個人、小グループ、組織、社会はそれぞれ異なるレベルにあるので個人レベルで見いだしたことが、そのまま他のレベルに適用できると考えるのは誤りで、ロジャースもその誤りを時に犯していると言っていました。

ぼくはセラピーの場で人格変容がセラピストの態度条件とそれらがクライエントによって認知されることが条件となっていること、小グループにおいてもファシリテーターの態度条件のメンバーによる認知が重視されていると考えるが、すでにグループ・レベルでは個人セラピー場面のようにファシリテーターの態度条件に左右される度合は減少しており、さらに今回のPCAのワークショップのコミュニティのようにファシリテーターが例えているとしても特定できない状況では、その態度条件の認知云々も問題とはならず、特定

のセラピストとかファシリテーターによって支えられているのではない状況がそこにあり、グループでの人格変容の可能性については個人セラピーとは別の理論構成が必要ではないかと述べてみましたが、これは余り理解して貰えないで終わってしまいました。この人ともっと個人的に話しができたら色々勉強ができただろうと思うのですが、ちよつとつつきにくい感じの気むずかしそうな爺さままでの機会がつかれませんでした。

夕食はまたまたピッツァ屋に行き、新しく来たジョージア大でカウンセリングの勉強をしているという数人の女子学生たちと同じテーブルでその一人と話をしました。Cross cultural counselingのコースを取っているとかで、ロールプレイでnative Americanになった体験とかいろいろ面白い話が聞きました。この人も養子だといった話を聞いて、例のブレンダも香港生まれで養子と聞いていたものですから偶然とは言え、たまたまここで会った二人もが養子であるのは驚きでした。こういうことで驚きを感じるのぼくが日本人であるからに過ぎないのだろうと思います。

テキーラの飲み方を教わったぼくはウォーム・スプリングスでの最後の夜を楽しむ

この日の夜のグループは十一時を越えてし

まいました。十時を大分回ってから一人の女性（学生）が泣き出して、ミシェルやマイケルら七、八人が熱心に関わっていました。ぼくは疲れて何を話しているのか殆ど聞きとれない状態で、もう限界という感じで途中で抜け出しました。席を立ったばかりにマイケルが何か文句を言っていました。それも背中であいて。

さて、ハンティントンに帰って台所で会ったフリップからテキーラの飲み方（まず左手の甲を嘗めてそこに塩を振りかけ、次にその手に四半分位に切ったライムを持って、右手にテキーラをついだ小さなグラスを持って、準備完了、まず甲の上の塩を嘗め、次にライムをしゃぶり、その口にグラス一杯のテキーラを流し込みます。すると塩の味とライムの酸っぱい汁と涼しい香が口広がって喉に至るのを追っかけて、テキーラのちよつと芋焼酎にも似た臭みを帯びた液体が熱くとろりと喉を流れ下り、喉の奥、胃の手前で合流、味と匂いの全てがそこで解け合い混じり合うという趣向で、この手順のタイミンダに多少こつがあるというのが、ジョージア大学の学生の小柄で色白なフリップ君の見解でした。）を教えてもらって、教わった通りに幾杯か練習を重ねるうちにすっかり元氣回復。他の学生たちも一緒に、これは大学一年生のイニシエーションなんじゃないかとぼく



が言うそうだと、いつしかぼく自身もイニシエートされて、そのあと大いにかれらに仲間として受け入れてもらった感じで、テラスの床に座り込んで杯を重ね、この晩はやけに英語がよく分かるみたいで、まだ春は浅いけれども暖かな美しい南部の夜、月はなくとも気分は臘月夜、というわけでそのあとでまだ残っていた連中やピーバディに泊まっている連中までも現れて、勝手に冷蔵庫を開けてだれのものかはお構いなしの無礼講、二時過ぎになってやつとお開き、じつに愉快な夜でした。

### そして別れの時が来る

七日目、最終日の二月二十日日曜日、最後のコミュニティ。ミシェルがグループの新しい参加者について、ヤスシと同じ両価的な気持ちだということを述べて、最初からよく喋っていたステイヴ（かれはオレゴンでPCAでミノル・ハタセに会ったと言っていました）、石膏デザインに使われるアグリッパ（か？）のトルソのようにくるくると髪のカールした大きな頭が立派な男で、喋り始めるとやたらにことばが多くて、ぼくには何をかれが言おうとしているのかさっぱりということが殆どでした。それで、ぼくは、このときもあなたはここから見える中庭の噴水

のようにことばを撒き散らしているようだ。

ことばが多すぎてばくには理解できない。まるで中近東の市場の真中で膝まづいて―實際かれがよくそういう姿勢を取ったものですから、それを真似して見せて―腕を宙に振り回し何かわけの分らないことばで訴えているが、だれも聞いていない男の姿を見ようで悲しい気持ちになると、ことばも分らないくせに大胆なことをつい言ってしまいました。これは多少かれにとって意味があったのか、そのあと別れるときもいろいろばくに聞き返していました。が喋って、少しだけかけたところ、ミシエルがまた色々聞いていくので、ばくが疲れてちよっと席を外して部屋に戻ってみるとどうしたのかミシエルが怒って泣いていて、席を外していたらしいジャックに、old wise man machoだと噛みつく。

この評言は幾人もの女性からも賛成の声が出ましたし、エジプトからの留学生のモハメッドも同感だとかれを批判します。どうもステイーヴにミシエルが色々聞いていたときジャックが何か一言切って捨てるようなことを言つて部屋をでてしまつたらしく、この行動はおかしい、男がよくやるやり方だという女性たちからの声。ジャックはジャックでミシエルがステイーヴの気持を開かせようとして色々質問していくやり方がいやだ、自分とは同席してその witness になぞなる気はな

いから席を立つたと言い、モハメッドはまたその witness ということばに引つかかつて、自分は witness としてなどここにいるのではない、あんたはそんな気持ちでいるのか云々。この辺も話はあまり噛み合わず、ジャックは listening にせよ、ジェロルドが鏡を持つてきたようなことにせよ、そうしたエクササイズや技法めいた動きは一切自分は厭なんだといったことを言つて、結局この場面はミシエルのあんたは自分とは違う、あんたはあんた、わたしはわたしなので、あんたが嫌いでもわたしは好きだからやるんだ、あんたはあんたで勝手にすれぱいいわ的の宣言で一応幕になりました。

これがこのワークシヨップ最終のセツションなわけですが終わりの挨拶があるわけでもなく、皆何となくぞろぞろと立つて、したい相手と個人的に抱き合つたり別れの挨拶をそここでして解散。マイケルからはお前さんは小さいのだから酒を飲み過ぎてはいかん、気をつけなさい、酒はからだに毒だという忠告、どうもこの人こういう説教めいたことを言うのが好きだなど思いましたが、その白髪頭で白い頬髭のケッタツキー・フライド・チキンの店先の小父さんにも似た血色のよい顔に誠意が籠もっているものですから、こちらにも別れの忠告として聞こうかと殊勝な気持ちになりました。ステイーヴからばくがミノル

・ハタセを知っていると聞いたとかでジェロルドが、そうかかれを知っているのかと初めてばくを認める感じで笑顔を見せて別れの挨拶、欲求不満はまだ必要かなどとばくの言つたことについても覚えていて冗談風に言つて、今年のPCAのロゴとイラストの入ったXLのウェアをばくと、この会期中コミユニティー以外は大体行動を共にしていた（コミユニティーにも出たらという声もあったのですが、参加費も払っていないし、家内も出たくないというので、絵を描いたり好きに時間を過ごしていたのですが）家内にくれまして。最初からハタセとかツゲの名前を挙げて友達だとも言つていたらもう少し待遇も違つたんではとも思いましたが後の祭。この日は昼食はなくて、アルバート、マーク、ミシエル、ブレンダなどと挨拶もそこそこに、例のテキーラの飲み方を教えてくれたフィリップ君がアトラクタ空港まで真っ直ぐ送ってくれて、デルタ航空の入口の前で車の中のかれとはバイバイと軽く手を振つて別れ、僕と家内とはこのあと、ニュー・オリンズに向つたのですがそれはまた全く別の話になります。

改めてこのワークシヨップは何だったのかとばくは考える

このPCA、貰つた登録者リストには三十



九人の名前が載っていますが、ほとんどの知っているマークやその他幾人かの名前が落ちていたり、途中で一日だけ顔を出して帰るような人も幾人もいたようで、ほとんどの分かっている範囲だけで四十二人はいましたが、正確なところ参加者が何人だったのかよく分かりません。毎日のコミュニティ（グループ）の出席は多くて三十名くらいだったでしょうか。参加者の職業、専攻の分野から見ると、大学でカウンセリングを教えているとかマイケルなどのように退職者という人やラルバートやジムのようなセラピストとかカウンセラーとして働いている人、それからカウンセリング学部などの院生や学生などが主でしたから、この意味ではかなり等質的なグループと言えます。

参加者のPCAワークショップ経験は、ジャックのようにPCAの元老的な高度の経験者も参加していましたし、八回を数えるこのジョージアでのワークショップのファンというか古参者の参加者もいたようです（これはかれらの着ていた過去の様々な年度のPCAウェアのロゴからの推定です）、マークのような初参加とか二度目とかの人や地元のジョージア大学の若い大学生（？）や院生もかなりの人数参加しておりその点では非等質なグループでした。年齢的には七十年代から二十代までにわたり、若者層がややグ

ループとして目立ちましたが、全体としては大きな偏りは感じられませんでした。

参加者の居住地や人種民族文化性 ethnicity から見たときかなり多彩でしたが、一方における地方性と地方における国際性の結合がこのジョージアPCAの一つの大きな特色だったようにほくは思います。参加者は名簿に記載された住所及び記載されていないがほくに分かれている範囲で分類しますと、四十二名の内半数近くは地元のジョージア（香港一人、台湾出身一人、エジプト出身一人、インド出身一人を含む十九人、その大半は主催のジョージア大学の若い学生、院生たち）と近辺の州、サウス・キャロライナ（二人）、ノースキャロライナ（一人）、テネシー（二人）、遠隔の州としてカリフォルニア（一人）を除いては殆ど合衆国の東半分の州、東海岸のマサチューセッツ（一人）、コネティカット（一人）、ペンシルヴェイニヤ（四人）、内陸に寄ってオハイオ（二人、内一人は日本人、つまりほく）ミシガン（一人）、アイオワ（一人）、からの参加者と海外のいくつかの国（フランス一人、イギリス三人、ギリシャ一人、ブラジル二人）からのそれぞれ少数の参加者から構成されていきました。専らアメリカ人で、そう様々な国から参加者が大勢いたわけではないのですが、それでもこの多様性はある豊饒性（特にユダヤ系のアル

バートの例のように）をこのワークショップに与えていたようにほくは感じています。

構造からいうと日程が二部に分かれていたというだけでなく、途中からの参加や帰ることも（終る前日に参加した人もいましたし、一日だけ参加という人もかなりいました）、グループやプレゼンテーションの参加不参加も全く自由（日本では自由のはずでも律儀に参加し、ここでもほくはその例に洩れませんでした）、ほくとマークとミシェルが裏面目の御三家というところで、他の連中の中には一体何をしに来たのだろうと呆れるくらい、連日どこかに出かけたなりして殆どコミュニティでは発言したのはもちろん姿を見たのも稀といった人間もいて、実に見事にこの自由を行使していました」という、極めてオープンな構造のグループであったということ。これはグループの凝集性という点から言えばマイナスであり、メンバー間（内）の葛藤（欲求不満）を強くしたと思いますが、逆にそれがこのグループ経験を豊かにかつ強烈なものにしたと言えます。またスケジュールという点では、プレゼンテーションを除いて、このワークショップにおけるグループは、予め提示されていたトピックスは最初から殆ど名目化されていたようであり、実質的には全く内容が構造化されていなかったと言つてよいように思います。

このグループはファシリテーターの存在しない所謂リーダーレス・グループに近いものであったようにばかりには思われます。ワークショップの案内にはファシリテーターについての記述は特にありませんでした。アルバートは、ジェロルドとメアリーという女性がファシリテーターだという意見でしたが、終わって別れぎわにどうしても気になったばかりがメアリー自身にその点を確かめたところ、彼女は大学でカウンセリングを教えており、よそでのファシリテーター経験はあると言いつつ、このワークショップでの役割はきつぱり否定しました。その場において聞いていたミシェルが脇からヤスシ、あなたがファシリテーターだったのだ、と言うと彼女はミシェルもそうだし、グループのみんながそうだったのだと付け加えました。ちよつと教科書的な答えですが、そう言ってもいいなと確かにその時ばかりには思えました。そのグループ経験は、はく二十数年前日本で初めてカウンセリング・ワークショップなるものに参加したときの衝撃的な体験の記憶をなんとも懐かしく蘇らせました。リーダーの不在（日本の場合は、その役割を意図的に放棄しているものの、リーダーはそこにいるという印象が強かったのですが、ここでは本当に全くどこにもいないという感じが強くありました）の集団にもたらず、吹きさらしの空間に立つよう

な自由で解放的な感じと同時に強い不安感、くすぶる欲求不満とその裏にある根強い依存欲求、そして自立（セルフ・サポート）や創造的自発性への遅々とした歩み、その過程での外的内的葛藤、強い感情の揺れ動き。ただここでは、最初からこのリーダーレスという構造がPCAだからということでは知識や経験のあるメンバーの間ですでに了解済みのかたちになっていて、殆どコミュニケーションで問題として取り上げられなかった、もしかすると避けられていたということもこのワークショップの問題と言えるかも知れません。

このワークショップは、Organizational, Family, and Societal Harmony Through Personal Empowerment がテーマとして掲げられていましたが、はく個人としては確かにPersonal Empowermentと呼ぶべきものを自他に認めましたし、それを通してのこのコミュニケーションのある程度の調和の達成も観察したように感じています。この一週間にわたったワークショップの体験は、はくにとつて久しぶりに複雑な葛藤に満ちた豊かでインパクトフルな経験でしたし、それまでの一年半に及ぶアメリカ生活での疲れや傷を癒してエネルギーを与えてくれた場であったと感じています。もう一度読み直してみた案内に載っていたロジャースの短いことばは以下のようでした。

＊  
パースン・センタード・アプローチの中心的な仮説は、簡潔に述べれば、個人は、かれまたは彼女の内に、自己を理解し、自己概念、態度そして自己指示的行動を変化させるための豊かな自己資源を持っているのであって、これらの資源は、もし、定義可能な促進的な心理的態度の風土が供されさえするなら、栓を開けて流れ出すようにできる。

## 追記

この文章は筆者が一九九二年の夏から一九九四年の夏までオハイオ州の Gestalt Institute of Cleveland に留学していた際、丁度帰国する年の春に参加したジョージア州ウオーム・スプリングスでのPCAワークショップ体験について、その直後に書いて人間関係研究会の『STAFF だより九四―』に寄せたものです。今回本誌に載せるにあたって小見出しをつけたり少し補筆訂正しましたが、ほぼ原文のままです。文中の参加者の名前は主催者のジェロルド、プレゼンターのディック・ページとウッド夫妻を除いては全て仮名にしてあります。（一九九五・二二・二〇）

きむら やすし  
●愛知大学

# エンカウンター・グループでは何が起こるのか (6)

福井 康之

## 《グループ参加の難しい人たち》

人間関係研究会のスタッフが年間行事の一つとして、日本人間性心理学会（JHP）でグループに関する自主企画を例年実施し、その記録を本誌に掲載している。たまたま、本号には東京農業大学で開催された第十三回JHP大会で、筆者が企画し、司会を担当したシンポジウムの記録が掲載されている。

これは一九九四年九月のもので、すでに、一九九五年九月の第十四回JHPのときのシンポジウムが半年前に終わっていて、もう世の中が変わってしまったていて、言っていることが古びてしまっている。

第十四回JHP大会は、筆者が大会準備委員長を務め、愛媛大学で開催された。このときのグループに関する自主企画は、高松里氏と広瀬寛子氏の担当で「難しいメンバーを抱えた体験グループのファシリテーション」であった。

高松氏は「EGなどの体験グループにおいて、グループの話題を独占してしまう人や孤立してしまう人、精神的に不安定になる人などの存在が気になり出していた。……かなり「大変な人」がいても、メンバーの包容力やファシリテーターの力量で何とか無事に切り抜けてきたように見える。グループ自体もよりおだやかで、日常に近いものとなってきた。……このような「難しい人」がEGに参加してくる意味を考えて、……へこれはEG

Gの限界とか本質を考えるのに重要なテーマになるのではないか……」と、企画の主旨を大会発表論文集に書いている。

広瀬氏も「この人がグループに参加することとは適切なのだろうか……一人ひとりを大切にしたいと思っても、他のメンバーが傷つき、疲れ、不安になっているのを感じると、その人に向かう優しさがしほんでいきそうと、どうしたら他のメンバーを守れるだろうと、思ってしまう。私も不安になっている。私も巻き込まれているのだろう」と、発表の主旨説明に書いている。

ファシリテーターをやっている者にとつては、どう考え、どう対処すればいいのか、頭を悩ましている大問題なのだ。筆者も、もちろん、大いに関心のあるテーマなので、シン

ボジウムに出席したが、委員長として大会の運営が気になり集中できないので、途中で中座し、討議に参加できなかった。

聞くとところによると、出席したメンバーにも共通してアイデンティファイできるタイプの人がイメージできそうなので、討議の様子は、今回は記録に残さない方がよいということらしい。意見交換することにより、ファシリテーターとして各自の考えを自分で整理するのに役立つシンボジウムだったろうと思う。具体的な話し合いの中から、結論が導びかれるわけだが、討議の詳細を公表することは望ましいと思えないし、一致した結論に至ると思えないので、代表的な意見に整理して討議に参加できなかった人たちに役立つようにしてもらえenとよいと思う。

どの様な意見が出ていたのか興味あるが、筆者も企画の主旨に刺激されて、この問題について自分なりの考えを述べてみたいと思う。おそらく、この問題に対して、その人がファシリテーターとして、どの様に対処するのかということは、その人のEG観に関わる問題だと思える。

## 《グループ経験になじみにくい人に必要な能力》

グループというのは少なくとも三人以上の

メンバー構成がなければ成立しない。ということは三者関係の生じる場である。生じる場であるが、一人の世界に閉じ込めたり、二者関係が第三者を除外して持ち得る場である。しかし、その場合、他者の存在を無視してしまふことはできない。

さらに、EGのようなグループ経験を積極的に推進する場では、メンバーが三者関係を三人以上のメンバーの中で、二者関係のコミュニケーションをベースにして、どのように展開していくかを全員に問われてくる場なのである。

そのためには、少なくとも次の様な能力がメンバーに備わっているということが要求される。備わっていないところがあつたり、不十分なら、そのような能力がグループ・プロセスの中で、メンバー各自に育っていく必要があるということになり、とりあえず、それが最初の目標となる。

一、共感 よく聞き、よく見るだけでは、まだ傍観者の立場で、最初グループに参加した人はこの様な態度が多いが、積極的にその人の立場になって聴き、話し手と同じ視点で見られるようになれば、共感的に理解できるようになる

二、暖かさ 批判したり、判断したり、解釈したりしないで、受容し、一緒に居ることができる

三、尊重 羨望や嫉妬心なく、競争意識を持たず、依存させたり、支配したりしないで、支持できる。

四、正直 つくろつたり、演技したりしないで、言動に一貫性がある。規律や外的基準で判断しないで、自分で意見が表明できる。判らないことは知らないとはっきり言える。

五、開放性 防衛しないで、ありのままの自分をさらけ出せる。秘密やかくしだてがなく、素直で影がなく明るい。

六、感情表現 知性とは別に、感情を積極的に扱える。自分の感情を恐れて抑制しないで自由に表現できる。同時に他人の感情に対して感受性がある。

七、率直性 相手を傷つけることなく、直接かわりが持て、意志や感情が表現できる。

八、具体的 一般化したり、抽象化する能力とは別に、事態や出来事を個別に理解し、ありのまま見聞きし語れる。

九、自発性 他から強制されることなく、自分の意志で率先して積極的に行動し責任が持てる。

十、柔軟性 ルールに縛られたり、強迫的でなく、事態に即応でき、素早く適正と判断した行動ができる。

十一、現実検討 自己評価にこだわって過去や他人の思惑を気にしたりせず、今、ここでやるべきことは何かを直観でき、その時



点での自己の限界を知っていて行動できる。  
十二、対決 自分が傷つくことを恐れず、信じたことを表現し、真意を確かめる行動ができる。

十三、自己探究 自己の内面に目を向け、他者からのフィードバックを歓迎し、自己を向上させていく意欲を継続させられる。

十四、関係性 人間の存在は、他者との関係の中で成立していて、相互対等な関係が最も望ましいものだということを知っている。

十五、その他、あいまいさに耐えられ、一人でも淋しくなく、課題に集中でき、他人に好意を持ち、親切に振る舞え、お返しを求めない。心理を探究する情熱があり、生命を育むことに喜びがあるといった性格特徴を備えていることが挙げられる。

これらの能力や性格特徴が完全に実現している人はまれである。心理療法やグループの目標が、「自己実現」にあるといわれるのは、結局は人格成長 (Personal Growth) というものが、他者と集団の中で共存でき、他者の成長を援助できる人間へと完成していくことが、人間の理想像であるからだ。

今さら言うまでもないことを掲げてみたのは、グループ経験になじめない人というのは列記した能力が全般的に開発されていない人だと考えられるからなのだ。そして、この様な人がグループ経験を求めて参加してくるの

は、この種の能力が開発されていないため、日常の対人関係がスムーズに行かず、どうすればよいかわからなくて困っているし、周囲の人も困っているの、それを解決しなくてはならないからだ。

### 《EGは対人関係訓練の場である》

グループ経験のスタイルはいろいろある。特定の目標、例えば、協力していくためにはどういうことが大切かということ、グループ経験を通じて理解するために、構造化されたプログラムをグループでやるとか、自己の未開発の能力は何かに気付くためにゲシュタルトのグループワークを活用すること、を

EGは人との出会いを目標にして、自発的に生じてくるグループ・メンバーの *being and now* に焦点をあて、メンバーの個人的成長をシフト・アップするという特徴を持っている。個人療法やカウンセリングと違うところは、グループ経験は、メンバー間のインタラク션을成長促進の手段に使うところにある、EGも例外ではない。

このことは、直接的に対人関係のスキルの訓練の場になっていることだ。カウンセリングでは、対人態度の変容形成にかか

わっていても、特別のプログラムを導入しない限り、スキルの訓練をやることはない。

EGは対人スキルの訓練を直接的な目標にしているわけではなく、結果的にそのような側面の訓練になっていることで、目標はあくまでも、出会いという至高経験を体験するためのステップを重ねていく。

しかし、このステップは全くといってよいほど、そのときのメンバー次第で、やり方は違ってくる。まさに、パーソン・センタードという背景にある理論に従っている。

そこで、このステップを共同作業として、限られた時間内（三泊四日が標準）で進行させる。どう進行するかはメンバーの資質次第ということになる。そのため、列記した能力がメンバー各自にどれ程開発されているか、そして開発されていく可能性がどれ程かが問題となってくる。

極端にその能力が低い人がいると、グループ全体にブレイキがかかり、妨害する人をどう扱うかが深刻な課題となる。可能なら足並みの揃ったメンバーのグループであって欲しいとファシリテーターは期待するわけだ。そうでないと、他のメンバーの成長可能性を犠牲にして、この特異なメンバーの対人関係の基礎能力を開発する訓練の場にしなければならなくなる。

グループ・メンバーにとっては、この様な

人は厄介な存在であり、いない方が助かるわけだから、排除の原理が働いて、グループ・メンバーに生じている援助的意識と葛藤する。この様な人をグループの圧力から守るのがファシリテーターの役割であり、メンバーの葛藤を意識すれば、ファシリテーターもその葛藤に巻き込まれてしまう。

### 《対人関係能力の低い人への援助の仕方》

具体的にいえば、話題を独占する人やグループの中心になって、メンバーを支配しようとする人がいると、他のメンバーがそのことを指摘すればよい。しかし、この様な人は傷つき易い人なので、どう言えばよいのかメンバーは困ってしまう。

最初はファシリテーターが指摘するしか方法がないが、ファシリテーターがやりすぎると、メンバーが、困難なことはファシリテーターに依存してしまうのと、ファシリテーターとそのメンバーとのインタラクションに時間をとりすぎて、他のメンバーの相互の関係の進行が遅れてしまう。

その場合、ファシリテーターはメンバーの中で比較的成長している人物を見付け出して、そのメンバーと共同作戦を組むようにする。そのメンバーに、問題のメンバーの言動につ

いて「どう思うか」とファシリテーターから尋ねて発言を促す。言葉の足りない所やわかりにくい所を補足し、続けて伝えようとしていく。相手を受け取り易い面から入り、聞いていない所やポイントが通じているかを、ファシリテーターは確かめるという方法をとる。

そうすれば、対人関係の乏しい人への援助の方法を他のメンバーも模索し、グループを進行させる方向へと動き出す援助にもなる。この方法は、成長の促進のため、成長しているメンバーをモデルとして、他のメンバーに採用することを暗に薦めていることになる。これは筆者のよくやっているスタイルの一つであるが、ワンパターンになっても困る。

他にコ・ファシリテーターに対決役をやってもらって、ファシリテーターは問題の人の側に身を寄せて守りながら、コ・ファシリテーターとの間で対人緊張の解消の方法を経験的に発見するよう援助するということができる。コ・ファシリテーターとやるときは、その辺の機微を心得ているので安全であり、役割を交替した形でやることもできる。

しかし、メンバーの一人と相棒を組むときは、メンバーがそのことを十分承知していないでやるという難点がある。しかも、他のメンバーが、ファシリテーターが相棒に選んだメンバーと張り合って、ファシリテーターから承認を得るために競争相手となって行動す

るという現象が生じる。場合によっては羨望や嫉妬が生じたり、注意を引くような演技的行動が生じる。それが問題の人に波及し、望ましい能力の発揮よりも、さらに場を独占するという方向に発展しかねない。

E Gの特徴は、望ましい発言や行動・態度が自発的に出現したとき、グループ・メンバーが賞賛したり、承認することによって、望ましいものが強化されるというオペラント条件づけの原理による学習の場になっているところがある。望ましい反応が出現するまで、ひたすら持ち続けねばならないという忍耐が要求される。予め望ましい初発反応の喚起を準備することをしないで、望ましい自発反応が生じるのを待っていて、はじめて強化できるというのが、E Gの一つの泣き所でもある。

そのうえ、困った反応に対して報酬が与えられないということで、無視されたり、望ましくないという態度を自然に示されたりするが、罰を与えて禁止するという方法を採用しないので、望ましい反応とそうでない反応の区別がはっきりしないで、弁別しにくい。

そこで困った反応を繰り返す人が、自分で間違っていると気付く程、周囲の微弱な否定的態度に対する感受性がないので、飽きがくるまで困った反応をくりかえして自分で止めてしまうので根気よく待っていることになる。

これは、他人の迷惑考えず、やりたいことをやる場として活用できる自由が得られたわけだから、自己満足できるまでやれ、自己愛が充足できる。しかも、自分のやっていることが対人関係の形成によくないという自覚はいつまでも出来あがらない。新しい行動は以前の行動が望ましくないという認知がなされない限り、形成されない。

それで、自分の都合のよいように、他のメンバーたちの限界を超えて要求をし続けるので、結局阻止され欲求不満に陥り、満足できない。その不満が攻撃や引き篋もりとなり、陰性の要求固執の表現となる。

この種の人たちに必要な能力は、「断念する」という自発的意志なので、この能力の発現を可能にする働きかけを考えねばならない。そのためには、それに替わる利得がなければならぬ。それは他の方法で満足が得られる役割を与えることである。簡単な例を掲げれば、皆にお茶をついであげるといふ課題を自分から果してもらおう。他人に役立つことによつて賞賛や承認を得るといふ方法があることに気付かせる。

その他、少しでも望ましい応答や態度が見付ければ、ファシリテーターは率先して認めてやり、他のメンバーたちが、その人のいい所を探して対応できるように、グループ全体で受容する方向を探る。

この人たちとメンバーの出会いといった課題は、まだまだ遙か先のことで、一回の参加期間では、その辺の試みが少しでも効果があれば幸先がよいと考えておくことである。この種の人は何回もグループに参加して、少しでも改善されていくといった本人もファシリテーターも根気のいる見通しで、長期間の努力に待つしかなかろう。

この人たちにとっては、EG参加は対人関係を形成するための基本的な態度やスキルを学習する場なのである。

### 《グループの自然の展開とメンバーの成長》

EGのプロセスで生じてくる感動的な体験というのは、前記の様な諸能力がメンバーの間に開発され育つてくると、メンバーの中に大きな変化を示す人が現れてくることだ。

出会いのための準備、あるいは条件整備といえるスモール・ステップのオペラント学習の場が、その人にとってある臨界期に達すると、視点の転換ともいふべきことが生じる。

これをA h体験とか、洞察とか呼んでいたが、これは認知構造の転換といった方が判り易い。このことに関して、一つ考察しておきたいことがある。

それはEGでよく自発性 (spontaneous) と

か自然に (natural) という状況の認知や行動の仕方が強調される。そこで、自然に振る舞うとか、自然の姿という言葉の意味を追求しておく必要がある。これが「ありのまま」ということと同一視されたりするからだ。

自然であることは素晴らしいことだ、美しいことだという言い方をする。こういう時の自然とは一体どんな状況を指しているのだろうか。人工的とか、作爲的ということの対立概念であることは確かであり、そうしないということらしい。

自然というと、例えば農村の田園の風景がイメージされ、ハイキングに出かける野山の情景が思い浮かぶ。人工の極致である高層ビル<sup>1</sup>の建ち並んだ都会の眺望と対置される。田園の持つ静かな調和のとれた緑の美しさの中の人間の生活の姿が自然の姿であり、生命の安らぎを覚えるものだということになっている。しかし、田園といったものが、地球上に元から存在したわけでもなく、長い地球の歴史から見れば、ほんの一瞬の限定された状況に過ぎない。地表は元々荒廃したものであり、本来の姿は混沌とした無秩序のカオスである。田園地帯は一時的な人工的なものである。水田稲作農業という生産形態に見合った地形・風土・気候という生きた条件とマッチさせ調和させたシステムが、その中で生産に従事する者の手足を使った労働力に依存して

季節に合せて定期的に単純再生産を繰り返している風景にすぎない。流れる小川は灌漑のために配備された水路に過ぎず、せせらぎの音を聞くために用意されたものではない。

しかし、そのシステムの中に埋没してしまわず、生活の主体者としての意識と誇りを抱く者がせせらぎの音を喜びとして感じとるのである。

自然であるという生き方や態度は、その時代に応じた生産システムの中での生活様式に調和を求める姿から抽象された概念であり、本来的に保守的、停滞的な意味合いを担っている。この様な概念的な意味を持つ定義に留まっている限り、自然に振る舞うということは、システムの発展や文明の進歩と矛盾する。人類は紆余曲折はあっても、地球規模でより完全なシステムの建設を目指して努力してきている。そのためにシステムをコントロール出来ずに破壊させてしまう危機を回避しながら、システムをより望ましいと考える方向に改変してきている。

個の成長発展も、ナチュラルという場合、安定調和ではなく、変化しながら将来展望のもとに矛盾を是正して発展するという姿をとっている。

グループの展開も同様であり、メンバー（構成員）としてそこに居合やす個々の成長と相乗的な交互作用の中で矛盾を解決すると

いうダイナミクスを通じて発展していく。

グループの中でメンバーが大きな認知の枠組を転換させる現象が生じるのは、グループのダイナミクスの中で、個が今までの認知構造のまま留まっていることが出来なくなり、新しい認知の枠組を必要とするようになるからである。

しかも、グループが日常性から遊離した状況を呈していたなら、それはファンタスティックな世界への適応ということになってしまふ危険性がある。グループは日常から離れた設定のように見えるが、そうではない。メンバーは日常の矛盾を抱えて未解決のまま来ている。

日常生活の中では、生産システムの中に巻き込まれ、矛盾を意識し検討する余裕もなく、人間性を無視した低段階の古い認知の枠組しか持ち合わせず、違和感や自己矛盾を感じているだけである。何となくおかしい、これだよいかと感じるだけで、どうすればよいのかを問う余裕もなければ、他人から敬遠されるだけで、一緒に考えるということもしないで、疎外感だけを持つようになる。

グループは、日常でははっきりと見定めることの出来なかつた矛盾や人間関係の中ではっきりと突き付けられることのなかつた問題点や自己の認知の仕方の不適切さ、感受性の鈍さといったものを明瞭に露呈させてくれ

る場である。

そのような場で、グループになじめないメンバーというのは、日常の現実生活では、他人から敬遠されていることにも気付かず、問題を他人のせいにして、自分一人よがりの他者との共存が困難な生活をしている人なのである。単にEGになじめないということではないのであって、EGから逃げ出してしまつては、問題を未解決のまま残して先送りしているだけになる。

### 《グループからのフライト（逃走）》

グループ・セッションに参加するということと自体、そもそも大変勇気のいることだということとは、初回参加者の立場を考えるとよく判る。

スモール・グループが進行される部屋というのは、参加者にとっては密室であり、メンバー以外の人間が自由に出入りできるところではない。経験を重ねれば、メンバーにとっては開放された自由の空間だということが判ってくるが、最初はそこに座っているだけでも何が生じてくるか判らない。それ恐ろしい閉じ込められた空間なのである。

座っているだけで、ものすごい圧迫感と強制力が働き、緊張を強いられる。休憩時間に

やつと外へ出ることが許されたと感じる。何か魅力的な出来事が生じるのではないかという期待か、自分に課した義務感がなければ、次のセッションに出ていこうと思えない。早い目に行っていないと座り心地の良い場所が確保できない。

セッションが進むにつれて期待していたとおりになるとは限らず、ファシリテーターは知らん顔をしていて、自発的に発言しないと誰も助けてくれそうもない。以前に参加したことがあるという経験者は「あなたの言うことは私に関心が持てない」とか「論理でなく感情を語れ」とか、やたらEG用語を振り回す。どうすればよいのか訳が判らない。

EGのセッションで要求されている能力は、知的理解でなく、次元の違った異質なコミュニケーションの世界のようだ。そして、未開発の多くの能力の統合された人格特徴を備えていなくてはならないらしいと思えてくる。

だれでも、自己の能力に関しては相対的な劣等感を持っている。自己の能力のなさが、見知らぬ他人の前に暴露され、評価される場面に直面させられる危険性を察知すれば、自己を防御しようという気になるのは当然のことである。

自己の能力への評価を恐れて、グループのなかで危機的な場面を避けようとして生じてくる言動をグループ・フライトと呼ぶ。これ

は防衛のメカニズムであって、メンバーが自己を守るために意識的・無意識的にとる行動である。

グループ経験になじみにくい人がとる言動を、このフライト行動として把握することは、難しいメンバーへの対処を考えるのに有効だと思える。

この種の人たちは、そもそも、日常で問題を持つ人たちであるから、グループに参加する当初からフライト行動の徴候を示す。自我が弱いという理解だけでなく、具体的な場面や状況に即して、グループ経験への対応の仕方がわからないための行動であり、安全な場所を共同で作って学んで行こうという姿勢より、自己を防御することを優先してしまうという、今までのライフ・スタイルを反復するということだ。

道後グループで、後には他の人より意味のある参加ができたメンバーだったが、セッションの初期段階で、円座に座っていることに耐えられず、座をはずして襖ふすまの陰の隣の部屋へ行ってしまったメンバーがいた。ファシリテーターは無理に座にいらなくてもよいという自由をメンバー全員に了承を求めた。そのメンバーにとって安全な居場所を確保する自由の保証は非常に大切なことである。

筆者が翻訳紹介した『カウンセリング・ワークブック』の著者イーガンに『Face is

Face (一九七三)』というグループに関する本がある。これは『ENCOUNTER』(一九七〇)のダイジェスト版の小冊子(一六二ページ)である。両者とも最後の章で、この『Flight Behavior』を扱っているので、それに沿って考察を進めてみよう。

イーガン氏はどうも著書から推察しても、グループ・ファシリテーターの方が、個人カウンセリングよりもお得意のような気がする。東南アジア諸国まで出かけて、グループ・オーガナイザーとしても大活躍をしている人である。イーガンはフライト行動を二つに分けて述べている。メンバー個人のフライト行動とグループそのもののフライト行動である。

### 《個人のフライト》

イーガンは項目をたててまとめているのでその順に掲げて行く。

一、最大究極のフライト (Ultimate Flight)  
グループ経験に全くかわる意志のない人で、観察するという興味もない。ただ出席して時間が経てばよいという人。強制されて参加している人や資格を得るために参加している人で、この人の存在はグループを腐敗させるだけであり、グループメンバーにとって不信と不満、怒りの根源になる。

このような人は即刻、帰っていただくに限る。EGでは人情から何とか参加させようとするが、やる気のない人は帰ってもらうという決断が必要だろう。

二、自発性、主体性のな<sup>ら</sup> (Refusing Initiative) EGではメンバー同士の触れ合いを通じてグループ・プロセスが進行する。この人たちは受動的で、問われると返事をするだけだ。話をするが、二三人で雑談をする。礼儀正しく、おだやかで、他の人がさえぎって話し始めない限り、人の話をただ黙って聞いている。

三、皮肉屋 (Cynicism) 心を閉ざしたまま参加している人がグループの出来事に対してとる防衛のスタイルである。グループのインタラクションはかわるが、自発性はない。研究に示すところでは、グループの後半になるとポジティブになれる人だということである。対決者として選ばれることを避けている。グループが真剣になるとまじめになるようだが、所詮はグループの厄介者になり続ける。

四、沈黙 (Silence) 言わずと知れたとおり、沈黙は最大の防衛である。交互作用がないので、観察学習は可能だが、成長することには期待できない。グループを無言で操作し続ける。他のメンバーが関心を向けざるを得ないし、話させないような雰囲気を作っ

ているという罪障感を抱かせるし、話さないことに怒りを感じ、それを抑制せざるを得ない。本人はグループを操作していると思っていないので、困った存在だ。

五、解釈ゲーム (Interpretation-Insight Game) 知的遊戯は安全な防衛法であり、納得したり、教訓を見付け出したりして、当人は大いに学べたという気になっている。他のメンバー同士のインタラクションを解釈して口出しするのでうるさい。傍観者の立場なので、他者と関係を直接持たないので、グループ経験から学んだことにならない。

六、ユーモア (Humor) ユーモアは両刃の剣である。対決の刃を切り返してしまつて受け止めないという悪い面と、インタラクションを促進させるという良い面がある。しかし、インタラクションを深めたり、意味ある段階へと問題を展開させるメンバーの試みを、笑いによつて駄目にする武器として使われる。息抜きには良いが、問題に直面することを笑いで逃げていくことになる。

七、質問屋 (Questioner) 質問が悪いわけではないが、「気分はどう？」といった質問の仕方は感情表現をストレートにできなくなる尋ね方だ。どんな感情なのだろうかと考えて返事するので、感情の概念化をもたらず。さらに、「何故? Why」という質問

は解釈ゲームを引き起す。質問することによつてグループに知性的な応答を引き起しておいて自己の安全性を図ろうとする目論みである。

八、合理化 (Rationalization) ダンスができない人は庭が石だらけという。問題が自分にあるということを棚にあげて、環境や状況のせいにする。うまくいかないのはグループが悪いと考える。このグループに向いていないという。同じようにファシリテーターのせいにする。攻撃されないように他人のせいにして逃げる。攻撃は最大の防衛である。

九、退屈 (Boredom) メンバーのインタラクションに立ち合つていても意味がないと感じて、退屈に耐える。耐えていることによつて努力しているという免責で、積極的にかかわる責任を言い訳して逃れられる。おまけに退屈であるという表出は正直であるという評価まで貰える。退屈以外に何もしていないのに、それに値するだけの防衛力を身の囲りに張りめぐらしている。

十、一般化 (Dealing in Generalities) 私といわず、我々、彼等、あなたたち、人々はこの主語を使った文脈で話す。グループに居ない人の話をするのも同じことで、グループ・メンバーの誰かに話しかけるのではなく、グループ全体に話しかける。原理・

原則について話したり、専門のことや仕事のことを説明したりする。話の内容に自我関与がない。聴いているメンバーは退屈するので「あなたの話は聞きたくない」と言われてしまう。

十一、強烈な感情や葛藤に弱い (Low Tolerance for Conflict and Emotion) 対決や葛藤に弱いので、対立したり、感情的な場面になるとすぐ仲介したり、救援隊(赤十字)に回る。笑いで胡麻化したり、話題を変え、策を立て、気晴しを導入する。対決や直面は感情を爆発させるが、事態を避けるのではなく、課題を解決する方向に調整を試みる必要があるのだ。

十二、変化を好まない (No Space to move) 成長変化への可能性を探索すべきところ、変化を避けて動こうとしない。人を遺伝や環境や運命でしかみないで、主体的な行為を信じない。「できない」「やれない」と言い、「しなう」のは自分だという自覚がない。失敗、自己愛に傷つき、自尊感情の下落を恐れて、責任を回避する防衛なのだ。「個人の自由だ」とか「犠牲になりたくない」「不可能なことだ」という名目を主張する。この用な人は変化を求めてグループへ来たのではなく、変化への可能性のみをいつまでも保持するための他人の保証を求めてやって来ているにすぎない。

十三、支配 (Control) あらゆる手を使ってグループを自分の都合のよいように操ろうとする。グループを自分のペースで運営しようとし、ファシリテーターを誘惑して操ろうとする。長話や馬鹿話をして笑わせ、人気者になろうとし、議論を吹っかけ、エンカウンター・ゲームをやるうといい、リクレーションを主張する。場合によってはメンバー内にサブ・グループを結成して、仲間うちのペースで進行させる。策略に乗せられないように気を付けねばならない。

### 《グループのフライト》

グループ内の個人のフライトだけでなく、グループ全体が変化への抵抗を示して、グループ自体がフライトすることがある。

一、過ぎ去ったかかわりの分析 (Analysis of Past Interaction) セッションや人とのかわりは流動していく。終わってしまったかわりを分析するのは、グループ・プロセスの研究にはなっても、進行中のセッションで始めることはフライトに過ぎない。物事をはっきりさせるといった意図で始められても、裏には相互交流の一時中止の要求が隠されている。話される内容は Here & now から離れて there & then になり、グ

ループ自体への批判につながってしまう。

二、まじめな話 (Irrelevant Serious Conversation) 社会問題や時事問題などが真剣に話されるときがあるが、これもかわりを避けるフライトである。グループ・メンバーがかかわっている話であったとしても、それはグループの外側での話であり、過去の話である。両親との葛藤の話もそうである。とりあげるべきことは、両親の話をしたくなっている気持であり、グループ・メンバーがその話を聞きたいのかどうか大切である。

三、順回しとゲーム依存 (Turn-Taking and Dependence on Exercises) 一人ひとりの印象を話し合ったり、順番にグループに来たわけを話していったりすることは、グループの最初の段階では、グループを進行させるのに役立ちそうであるが、それは単なるウォーミング・アップや息抜きにすぎない。実際のな弊害として、作務的なものに頼る傾向を助長し、真の自発的なかわりを妨害する。特にゲームに頼るほど、メンバーはファシリテーターに操作されていると抵抗しはじめる。

四、一人に集中する (Dealing with One) メンバーの一人に焦点をあてることはよく生じることだが、メンバー間の交流のための時間を後へと引き延ばしてしまう。だれかがしゃべってくれと助かるというような

グループの雰囲気は、相互のインタラクシヨンの時間延ばしにすぎない。一人が話し続けると他は沈黙せざるを得ない。

五、暗黙のとり決め (Tacit Decisions) だれも言っていないのに、皆が思い込んでいるルールにグループが従っていることがある。「いいではセックスについては話してはならない (話題)」「人が話し出すと、聞いていなくてはならない (手続き)」「徹底的にさらけ出してはならない (交流のレベル)」「グループのスケジュールは守らなければならない (規則)」「グループでやらねばならないことは他人と共にいて不快であつてはならないことだ (目的)」といった間違つた思い込みをグループ・メンバーが暗黙にしていることがある。グループの初期段階では、この思い込みによってプロセスの進行にブレーキがかけられることが多い。ファシリテーターはこれらの思い込みを見抜いて、グループには前もってルールがあるわけではないことをメンバーに理解させるようにする。

六、儀式行動 (Ritual Behavior) EGそのものが儀式的雰囲気を持つている。同一感覚や同一の行動を繰り返していることは安全で心地が良い。それに凝疑的な一体感があり、同じやり方で反応していればよいので気楽である。カリスマ的で宗教的な雰囲気

気を持つているファシリテーターは気をつけないと、メンバーを依存させて、ファンタジックな世界へいざなつて心理損傷を残す。メンバーは、これに対する抵抗から、出席をしぶり、遅刻し、欠席しはじめる。

七、足並を揃える (Lowest-Common-Denominator) グループの進行について来ないメンバーが一人でもいると、EGではそのメンバーの動きにグループの活動の水準が低下してしまう。意欲の無い人はグループが成長するのに大きな障害となる。特にEGでは場面がいまいで無構造であり、目標が漠然としか理解できないので、とっつきにくく、意欲を喪失させる雰囲気になりやすい。この場合、スモール・ステップの目標設定、例えば、先ずお互いに理解し合いたいとか、親しくなりたい、近づきたいといった目標設定でやると雰囲気ができるようになる。グループ・メンバー全員が一斉に足並みが揃うということはありえない。早い人・遅い人、あるいは無鉄砲な人・慎重な人、粗雑な人・デリケートな人、心臓の強い人・傷つき易い人といった程度の違いがある。手間暇のかかる人はだれかがわかつてくるとその人にメンバーの多くがかわろうとするので、かわりの水準がその人のレベルに低下してしまう。

グループ・メンバーに防衛の強い人がいて

他のメンバー全てにそのことが見え見えである場合、その人が自分の問題に気づき、自分はどう振る舞えばよいかを自覚しないと、もっと深いかわりを求めている他のメンバー同士のかかわりに移行するために、その人は切り捨てられてしまうということが生じる。

その人がグループから脱落してしまつて、出席しなくなると、メンバーは罪障感を持つので、グループ・メンバーはその人と約束をしておいた方がよい。少くとも、その人に自分のペースでグループに所属していて、自分で学べることだけ学んでいて欲しいと、そうすれば他のメンバーも安心して、もっと深いかかわりを持つことができる。その人のグループ参加の利得は他のメンバーと異つても、それが限界だとグループが判断し、本人も納得できればよい。

イーガンはグループ・メンバーのかかわり水準についていけない人を deviant member と呼んでいる。水準からずれている人、あるいは逸脱者というわけだが、ネーミングが難しい。重い鎧よろいを着ている人で、自分の鎧で窒息しかかっている人もいれば、武装強固で、他人を突き飛ばしてしまう人もある。

この様な人がグループ経験によつて、防衛の鎧を少しでもゆるめてくれるとよいが、防衛を取り去ってしまうことはかえつて危険である。その行動が防衛であるとメンバーに指



摘されて気付かされただけでもパニックを引き起こす危険がある。せめて軽い鎧に着替えて帰って欲しいと思うが、それでは身の危険を感じるのだろう。

ファシリテーターはグループ内で、メンバーがそれぞれの必要に応じて、その人なりの防衛をしていることを認めて、許容的であることが大切である。何といっても、メンバーが自分の問題をかかわりを通じてチャレンジするには、その場がその人にとって安全であるという自己認知がされないと、うまく始められないからである。

グループ経験の意味は、複数の他人と相互対等な人間関係を現実にして持ちながら、自分でやりたいことをやる自由を満喫できる生き方を体得していく場所であるということなのだ。EGに栄えあれ！

#### 引用文献

①Egan, G (1970) ENCOUNTER: Group Processes for Interpersonal Growth. Wadsworth Publishing Co.

②Egan, G (1973) Face to Face: The Small-Group Experience and Interpersonal Growth. Wadsworth Publishing Co.

③日本人間性心理学会第十四回大会準備委員会(一九九五) 日本人間性心理学会第十四回大会発表論文集 愛媛大学 六〇七頁

かくい やすゆき  
●鳴門教育大学

## ■おしらせ・情報・あれこれ

### 96年度プログラムの御案内

人間関係研究会ワークショップ・プログラムが出来ました。過去二年間の参加者の方には、当会より送付しましたが、御希望の方は、90円切手貼布の返信用封筒を同封の上、編集事務局宛にお申し込み下さい。

#### 編集だより



#### ■購読申し込み方法

購読料は、二号分で一五〇〇円(送料込み)です。「何号から希望」と明記の上、郵便振替にて編集事務局宛にお送りください。郵便局備付の用紙を用いる場合は、本欄末尾の振替番号、加入者名を御記入下さい。

単品購入希望の場合、送料および購入方法は左記バックナンバーと同じです。

#### ■バックナンバーの購入方法

No.6〜20は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料を加えた金額を、郵便振替にて編集事務局宛お送りください。

郵送料は、一冊まで250円、三冊まで350円、五冊まで400円、八冊まで500円です。

なお、バックナンバーの内容については、ワークショップ・プログラムを御参照下さい。

#### ■訂正とお詫び

20号掲載の「企業におけるグループ・アプローチの可能性を求めて」の8頁、上段12行目「保身的」は「促進的」の誤りでした。訂正し、お詫びいたします。

■編集後記・21号をお届けします。毎号産みの苦しみと手にした喜びを感謝しています。今号は、学会からの報告が重なり、名実共に重量級になりました。

木村易先生のジョーシアでのPCA・ワークショップ参加体験記、長編ですが、雰囲気損なわぬよう一挙掲載しました。

■21号編集委員・福井康之・野島一彦・小柳晴生(編集事務担当) 小柳欣子

#### ■購読申し込み・問い合わせ先

高松市屋島中町383-3-507

『人間関係研究会編集事務局』小柳晴生

☎0878-43-6444

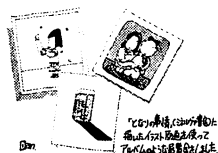
#### ▼郵便振替

振替番号・01680-3-36521  
加入者名・人間関係研究会編集事務局

---

# ENCOUNTER

出会いの広場 No.21



発行所 人間関係研究会 1996年 5 月31日  
〒145 東京都大田区上池台1-34-26 (渡辺  
方) 編集事務局 〒761-01 高松市屋島中  
町383-3・507 (小柳方)  
印刷 (株) 美 巧 社 高松市多賀町1-8-10

---



---

# ENCOUNTER

## No.21 1996. 5

### CONTENTS

---

#### Special Series 1 : Expectations for Encounter Groups

On The Purposes of This Special Series .....	Yasuyuki Fukui
Our Tasks for New Century .....	Minoru Hatase
What I Found in My Encounter Experience .....	Minoru Masuda
Practice, Research and Facilitator Training .....	Kazuhiko Nojima
On an Application of EG Groups in Medical Nursing .....	Hiroko Hirose
Encounter Groups for Community Support System .....	Satoshi Takamatsu
Commentation : As an Enthusiastic Commentator .....	Yasushi Kimura

#### Special Series 2 : Beyond the Dangerous Aspects of Group Approach

On The Eimes of This Special Series .....	Kazuhiko Nojima
What We Care For in T Group Practice .....	Mahito Yamaguchi
What We Care For in Basic Encounter Groups .....	Haruo Oyanagi
What We Care For in Restricted Encounter Groups .....	Masataka Murakubo
What We Care For in Gestalt Groups .....	Masahiro Hidaka
What We Care For in Therapy Oriented Groups .....	Iwao Nakayama

My Personal Experience of PCA Workshop in Georgia .....	Yasushi Kimura
Various Results in Encounter Group ( 6 ) .....	Yasuyuki Fukui
Information	

---

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Central Office : c / o Tadashi Watanabe, 1-34-26, Kamiikedai,  
Ohtaku, Tokyo, 145 Japan

Editorial Office : c / o Haruo Oyanagi, 383-3 Suite 507,  
Yashima Nakamachi, Takamatsu City, Kagawa Prefecture,  
761-01 Japan

---